613
7
613-77
1200501535363

附旭川人名録

7. 8.5

旭川年鑑

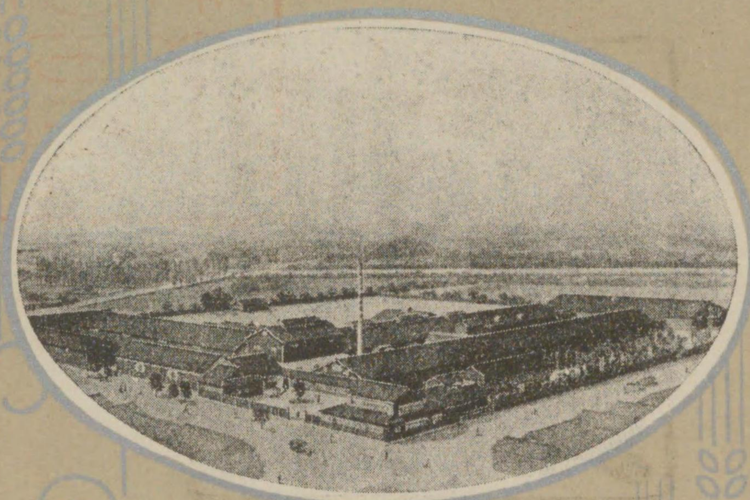
旭川商工会議所發行

501

旭川年鑑

附旭川人名鑑

——旭川商工議所——



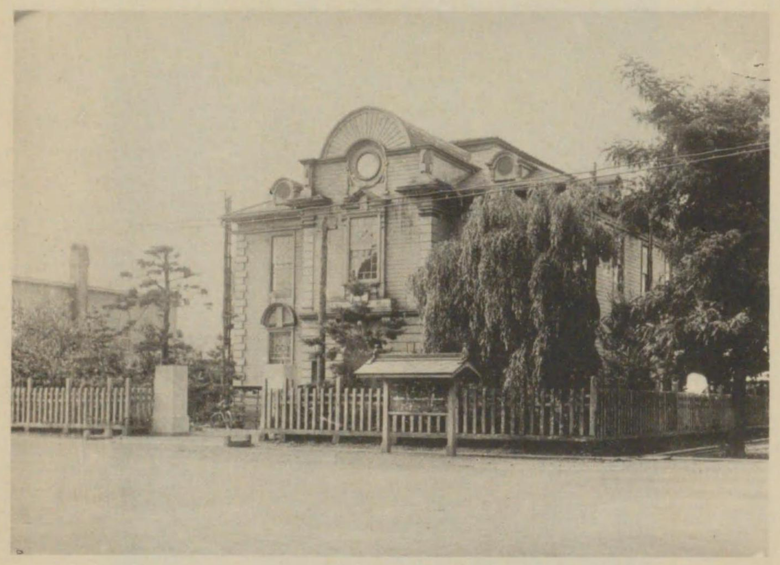
味のよい、わりのきく
經濟第一、

マル井醬油

旭川市四條通二丁目
今井釀造株式會社
電話二〇五四番

愛のシンボル
お酒に代へて
良い
お酒
北の誉
旭川市
野口合資会社

旭川市役所



旭川商工會議所

資本金壹億五千万円

株式會社

安田銀行

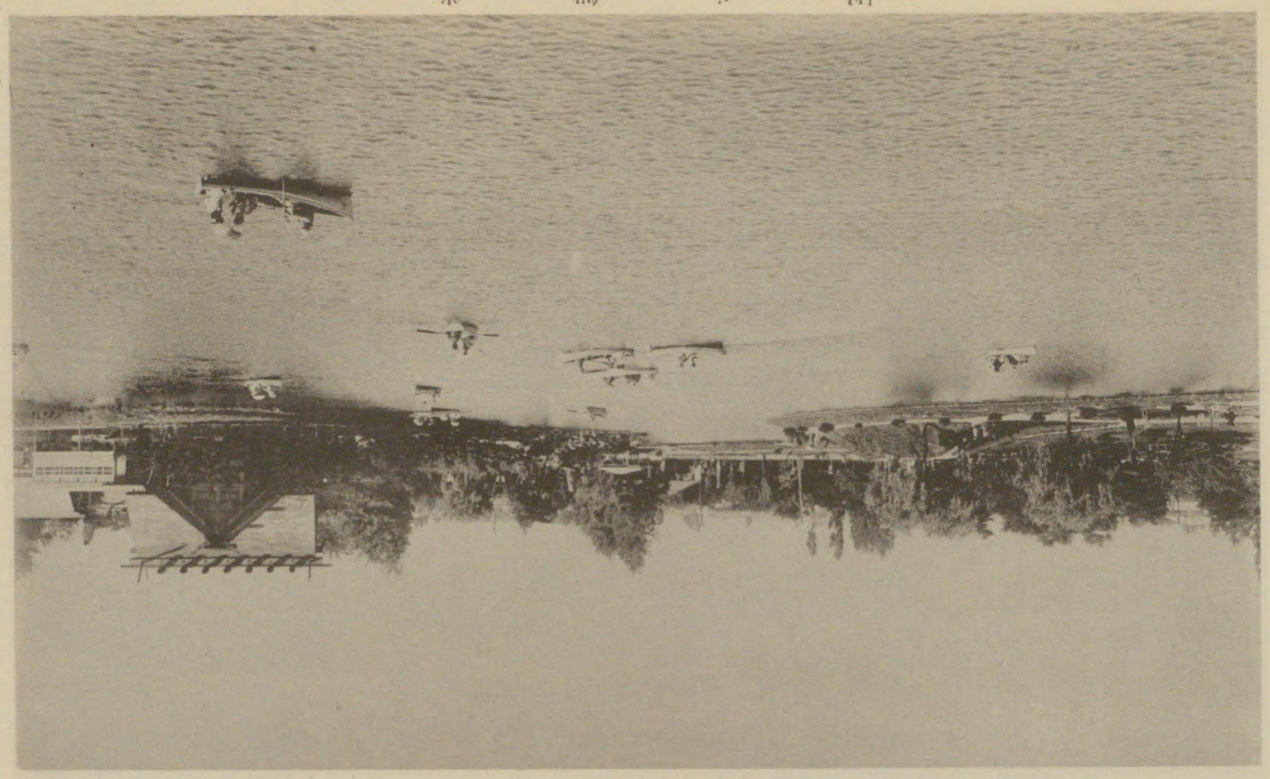
旭川支店

旭川市四條九丁目

旭川市全景

市中夜景

圖　公　艦　常



景勝の峽雲層

酒お
な徳
酎燒ードーゴ
酎燒ードーゴ

613-77

旭川年鑑目次

沿革

アイヌと和人の印せる足跡……一

旭川年誌

開拓時代……三
明治元年より同十年まで……三
明治十一年より全十九年まで……四

創業時代……五
明治二十年より同二十七年まで……五
明治二十七年より同三十四年まで……七

町制時代……八
明治三十五年より同四十年まで……八
明治四十一年より大正二年まで……八

土木建築請負業
美瑛産石材
採取販賣業

旭川市五條通九丁目左十号
鶴間禮藏
電話三五〇三番
電略(ツ)又ハ(ツルマ)
出張所
帯広町西二條十丁目
十五番地

區制時代……一〇
大正三年より大正六年まで……一〇
大正七年より大正十年まで……一一
市制時代……一二
大正十一年より昭和元年まで……一三
昭和二年より昭和六年まで……一四

地理

位置……一六
地勢……一六
氣候……一六
寒氣……一七
暑氣……一七
氣溫統計（平均最低、最高氣溫及平均溫度）……一八
風力……二〇
風速統計……二一
降雪……二二

雨量……二三
戸數と人口……二五
戸數人口比較……二五
最近十ヶ年人口……二六
本市隣接町村の現勢……二七

財政

一般會計歲入（最近五ヶ年比較）……二八
同　歲出（同　　）……二九
同　（臨時部）……三一
特別會計歲入出決算（最近五ヶ年比較）……三三
負擔稅額（國稅、地方稅、市稅ノ市民負擔額）……三四

交通

鐵道……三八
市內の三驛……三九
旅客小荷物發着數……三九

道路（本市を過ぐる又は發する道路）……四〇
橋梁……四一
電車（市内電車及市外電車）……四二
諸車數……四三

通信

郵便局……四四
郵便、小包、電報發着……四四
電話……四四
ラジオ……四五

電力

無限の電力……四五
北海道電燈株式會社……四六

商事

概況……五〇
主要商品消流狀況……五一

物價（最近五ヶ年騰落比較）……五五
商工業者業態別統計……五九
商工機關……六〇
旭川商工同議所……六二
旭川商工組合職合會……六六
準則同業組合（全組合及組合長組合員數其他）……六三
會社（現在各種會社ノ社數業態別資本金其他）……六六
株式會社（本店）……六八
同（支店）……七二
合資會社（本店）……七四
同（支店）……八六
合名會社（本店）……八七
會（支店）……八八
銀行と金融……八九
旭川組合銀行……九〇
加盟銀行……九一
各殘高五ヶ年比較……九二

産業組合と無盡業……九七
産業組合（旭川信川組合其他）……九八
無盡會社……九八
倉庫と運送業……九九
市場……一〇三
市立公設市場……一〇三
私立日用品市場（全市場名及内容）……一〇四
魚菜市場（旭川市場株式會社）……一〇六
旭川正米市場……一〇七
中央卸賣市場……一〇九

工業

概況……一一〇
工場數……一一一
工産額比較……一一三
勞銀……一一五
主なる工業會社と工場……一一八

合同酒精株式會社……一一八
野口合資會社酒造所……一一九
日本清酒株式會社……一二〇
野崎酒造所……一二〇
小檜山酒造所……一二一
世木澤酒造所……一二一
大谷酒造所……一二一
山崎酒造所……一二一
旭川酒造株式會社……一二二
下村釀造工場……一二三
北日本釀造株式會社……一二三
今井釀造株式會社……一二四
其他主なる釀造工場……一二四
齋藤合資會社……一二五
松岡木村部本店……一二五
旭川木工場……一二六
其他主なる木工場……一二六
明治製菓株式會社旭川工場……一二七

帝國製菓株式會社旭川工場……一二八
各種工場（全市各工場名）……一二八

教育

沿革概容……一三三
中等學校……一三三
各種學校及幼稚園……一三三
小學校……一三四

公私社會施設

旭川職業紹介所……一三五
公益質屋……一三六
下村育英財團……一三七
旭川消防組……一三八
旭川市聯合衛生組合……一三八
旭川教育會……一三九
青年訓練所……一三九
旭川青年團……一三九
旭川少年團と旭少年團……一四〇
北海ハーモニー協會……一四〇
旭川育兒院……一四〇
旭川養老院……一四一
旭川救護院……一四一
旭川保護會……一四一

社寺

上川神社……一四三
寺院……一四五
基督教教會……一四九
刊行物（新聞と雜誌）……一五〇
劇場……一五一
觀光案內……一五三
附近の名勝……一五三
遊覽コース……一五三

旭川人名鑑

官公署學校（職員氏名及概要）

旭川市役所……一六三
旭川測候所……一六八
旭川警察署……一六九
上川支廳……一七二
旭川郵便局……一七五
旭川運輸事務所……一七九
旭川保線事務所……一八一
札幌鐵道局旭川工場……一八二
旭川驛……一八三
上川税務所……一九一
旭川地方裁判所……一九二
旭川區裁判所……一九四
上川外四郡農會……一九五

第七師團

第七師團……一九六
第七師團長補職年月……一九七
師團司令部（各部）……一九七
聯隊區司令部（札幌、函館、釧路、旭川）……一九九
衛戍病院（旭川、札幌）……二〇〇
旭川衛戍刑務所……二〇〇
旅團司令部（歩兵第十三及第十四）……二〇〇
歩兵第二十五聯隊（札幌）……二〇一
歩兵第二十六聯隊（旭川）……二〇三
歩兵第二十七聯隊（〃）……二〇五
歩兵第二十八聯隊（〃）……二〇七
騎兵第七聯隊（〃）……二〇九
野砲兵第七聯隊（〃）……二一〇
函館重砲兵大隊……二一二
工兵第七大隊（旭川）……二一三
輜重兵第七大隊（〃）……二一三
旭川憲兵隊……二一五
旭川森林事務所……二一六

北海道廳設事務所……二二七
旭川土木事務所……二二三
旭川商工會議所……二二五
旭川營林區署……二二六
赤十字社北海道支部病院……二二七
札幌刑務所旭川支所……二二九
北海道農產物檢査所旭川支所……二三〇
北海道廳旭川出張所……二三一
旭川中學校……二三三
旭川商業學校……二三四
旭川師範學校……二三五
永山農業學校……二三六
旭川高等女學校……二三七
北都高等女學校……二三七
旭川實科高等女學校……二三九
精華高等女學校……二三九
旭川盲啞學校……二三九
旭川中等夜學校……二四〇

旭川商工學校……二四一
中央尋常高等小學校……二四一
日章尋常高等小學校……二四二
大成尋常高等小學校……二四三
北門尋常高等小學校……二四四
北鎭小學校……二四五
朝日尋常高等小學校……二四五
青雲尋常高等小學校……二四六
近文尋常小學校……二四七
新北門尋常小學校……二四七
啓明尋常小學校……二四八
日新尋常小學校……二四八
北鎭小學校附屬幼稚園……二四九
旭川精華女學校附屬幼稚園……二四九
旭川實科女學校附屬幼稚園……二四九
旭川相愛幼稚園……二四九

公私各種團体（公私各種團体人名鑑）

市會議員及各種委員……二五〇

商工會議所議員……二五四
旭川消防組役員……二五七
全市町內會會長……二五八
旭川醫師會會員……二六〇
旭川齒科醫師會々員……二六三
開業獸醫……二六四
旭川辯護士會會員……二六五
公證人……二六六

銀行と主なる會社（概況と職員氏名）

銀行

北海道拓殖銀行旭川支店……二六七
北海道銀行旭川支店……二六八
十二銀行旭川支店……二六九
北門銀行旭川支店……二六九
北門貯蓄銀行旭川支店……二七〇
中越銀行旭川支店……二七〇
安田銀行旭川支店……二七一

會社

旭川市街軌道株式會社……二七二
旭川電氣軌道株式會社……二七二

商工人名錄（目次別揭）

商工人名錄……自一至一〇三
生命保險會社（代理店又ハ出張所）……一〇五
火災保險會社（同上）……一二六
上川支廳管內全町村議員及町村長助役收入役……一二四

廣告目次

日本清酒株式會社旭川支店……裏表紙
今井釀造株式會社……表扉裏ノ一
野口釀造合資會社……〃 二
安田銀行旭川支店……〃 三
合同酒精株式會社……本文目次前ノ一
鶴間禮藏（請負業）……〃 二
北海道電燈株式會社旭川事務所……本文中四八頁
世木澤酒造店……〃 一二〇頁
小檜山酒造店……〃 一二〇頁
山崎酒造店……〃 一二〇頁
大谷酒造店……〃 一二〇頁
下村醬油釀造店……〃 一二三頁
北日本釀造株式會社……〃 一二三頁
北海道拓殖銀行旭川支店……〃 二六六頁
十二銀行旭川支店……〃 二六六頁
旭川市場協會……本文中 一〇六頁
西村末吉（乾物卸商）……〃 一〇六頁
明治製菓株式會社……〃 一二六頁
帝國製菓株式會社……〃 一二六頁
今井吳服店（百貨店）……（商工人名錄中）目次前ノ一
松浦吳服店……〃 二
山崎清軒（乾物商）……〃 三
山カ山本保壽堂（藥種商）……〃 四
淺野悅藏（木材商）……〃 五
永沼孝治（請負業）……〃 六
小泉恒吉（木材商）……（商工人名錄中） 九六頁
松岡源之助（木材商）……〃 九六頁
北海道運送社旭川支店……〃 四八頁
荒井商店（請負業・精米業）……〃 四八頁
旭川商事株式會社（金融業）……〃 一〇五頁
北海道銀行旭川支店……〃 一〇五頁
中越銀行旭川支店……奥付後 一

レンカ堂（池田小間物化粧品店）……奥付後 二
明治屋（蓄音器、自轉車、樂器商）……〃 三
大印中央運送社……〃 四
野崎酒造店……〃 五
三浦屋、宮越屋（旅舘業）……〃 六
報知新聞……〃 七
丸大井内醬油釀造店……〃 八
藤田醬油釀造店……〃 九
堀川醬油釀造店……〃 一〇
北日本無盡株式會社……〃 一一
日之出無盡株式會社……〃 一二
薄島洋服店……〃 一三
合名會社館脇倉庫……〃 一四
花月（料理店業）……〃 一五
梅林（料理店業）……〃 一六
旭川市街軌道株式會社……〃 一七
高山孝次（精米業）……〃 一八
福居清兵工（精米業）……〃 一九
野島商店（米雜穀、石炭商）……〃 二〇
中島恒造（建具指物、請負業）……〃 二一
山カ翠月園（茶商）……〃 二二
森本木工場……〃 二三
西村組（土木建築請負業）……〃 二四
千秋庵（製菓業）……〃 二五
中屋菓子舗……〃 二六
藤川靴店……〃 二七
北門銀行旭川支店……〃 二八
北門貯蓄銀行旭川支店……〃 二九
北海ホテル……〃 三〇
正札堂洋品店……〃 三一
三日月（料理店業）……〃 三二
山田屋商會（金融業）……〃 三三
拓殖無盡株式會社……〃 三四
宮川佛檀店……〃 三五

西田幸次郎（荒物商）……奥付後六
山田紙文房具店……〃 三七
樫原富藏（乾物商）……〃 三八
島岡猪源太（米雜穀肥料商）……〃 三九
元木三平（菓子問屋商）……〃 四〇
瀧野常吉（菓子問屋商）……〃 四一
旭川酒造株式會社……〃 四二
越後屋旅館……〃 四三
丸勝松村吳服店……〃 四四
第一樓（料理店業）……〃 四五
前田和一（藥種塗料商）……〃 四六
長岡驅蟲劑製造株式會社出張所……〃 四七
山本駒次郎（陶磁器商）……〃 四八
上木彌一郎（土木建築請負、木材商）……〃 四九
近藤家具店……〃 五〇
岡本米一（菓子問屋商）……〃 五一
丸大伊藤金物店……〃 五二
町井樂器店……〃 五三
丸サ旭園茶舗……〃 五四
大一花輪金物店……〃 五五
高橋善吉（木材業）……〃 五六
青山和洋家具店……〃 五七
共成株式會社（精米業）……〃 五八
丸肥旭川肥料株式會社……〃 五九
丸ヨ吉竹鶴吉（乾物荒物問屋業）……〃 六〇
株式會社三箇商店（精米、機械、製麵業）……〃 六一
加仁秀三郎（家具商）……〃 六二
カフエーライオン……〃 六三
杉野菊次郎（海產、乾物問屋商）……〃 六四
山岡發動機北海道支店……〃 六五
旭川電氣軌道株式會社……〃 六六
森松木工場……〃 六七
川島醬油味噌釀造場……〃 六八
丸山製粉所……〃 六九

田中要藏（土木建築請負業）……奥付後七〇
更谷製網製作所……〃 七一
渡邊甚三郎雜穀問屋商）……〃 七二
石倉忠平（化粧品商）……〃 七三
河合　勇（日用雜貨問屋商）……〃 七四
有限責任旭川信用組合……〃 七五
吉富木工場
瀧波木材店……〃 七六
横山初三郎（土木建築請負業）……〃 七七
山一中央堂紙文房具店
今野富藏（精米業）……〃 七八
大坪木工場
山本孫次郎（米穀肥料問屋商）……〃 七九
山本磯吉（白米商）
香川長太郎（米穀、肥料問屋商）……〃 八〇
小柳留吉（蒟蒻製造商）
曲丸小松源吾（陶磁器商）……〃 八一
丸大齋藤仙次（陶磁器商）……〃 八二
島垣松六（乾物漬物問屋商）……〃 八三
曲ト山口旭川支店（荒物雜貨商）
曲丸古谷商店旭川出張所……〃 八三
一タ高桑旭川支店（荒物雜貨問屋商）
山十一高岡竹次郎（海產乾物商）……〃 八四
曲万米倉商店（荒物雜貨商）
中瀨旭川支店（菓子問屋商）……〃 八五
谷松五郎（菓子問屋商）
佐々木治七（菓子問屋商）……〃 八六
函館菓子製造株式會社
進藤金物農具店……〃 八七
繁宮金物店
金子安太郎（エビ曲製作商）……〃 八八
七里太作（金物商）
曲與桑原旭川支店（米穀問屋商）……〃 八九
白倉貞二（鋸商）

中島光太郎（精米、麥業）……奥付後九〇
太田牛兵衛（履物問屋業）
西澤德彌（家具商）……〃
トモエヤ洋服店……九一
菅沼商店（毛糸問屋商）……〃
松本清藏（家具商）……九二
藤森家具店
神保家具店……九三
淺香和洋家具店
上田家具店……九四
田中家具製作開屋店
米山塗料店……九五
丸仁辻藥局
藤原石油問屋店……九六
丸一師尾藥局
たぬきや商店（萬印入物商）……九七
櫻井洋服店……九八
森田茂（製麺、石炭、精米業）……〃
丸桝賣炭所（石炭商）
丸善博善株式會社……九九
カツミ商會（看板商）
青山貞郎（果實商）……一〇〇
小林かもし商店
マルヤ洋品店……一〇一
丸サ見番
奥村紙問屋店……一〇二
大谷醬油釀造店……一〇三
大和屋（家具問屋商）
成久式ストーブ製作所……一〇四
當矢商會……一〇五
大我口永松（木工場）……一〇六
田中組（土木建築請負業）……一〇七
水上善四郎（木工場、ゴム製品場）……一〇八
坂野商店印刷部（各種印刷諸帳簿）……裏扉二
齋藤合資會社（木材業）……裏扉一

沿革

アイヌと和人の印せる足跡

アイヌ

上川アイヌは古來土着のものたりとなす說或は十勝より移り來れりとなすもの北見天鹽、日高なりとするもの等々諸說あれどもイナラ（木幣）に刻せる記號より推すに上川アイヌは敍上各地の系統を汲みたるものと察知すべし。石狩川、忠別川沿岸に部落をなして散在し酋長を戴き之を代表として外部に對し事に當り之等部落を聯合せるものに總酋長を置いて統制を圖つたものである。

家屋は堀立にして梁を渡さず四周及び屋根は茅笹等を以て之を覆ひ、床に草を敷き上に「キナ莚」をのべ、中部に爐を穿ち構造甚だ粗なるに住み衣服は「オヒヨウ」樹の皮を剝ぎ取り之を溫泉に浸し、裂きて糸と爲し、以て織りたる反物即ち「アツシ」を身に纏ひ漁獵による鮭、鹿其他獸魚を食となせり。神を信ずること篤く日の神、家の神、火の神、水の神、山の神等尊び多神教を奉じ惡神、惡魔の祟りを信じ天災、疾病の如きに對しては種々の方法によりて之を祓へり。

熊祭と稱するは熊の幼兒を捕へ來り婦女の乳を以て育て稍長ずるに及んで檻に入れて飼育し舊曆十

月乃至十一月に至つて親戚、知人を招ぎ多數會する所に於て之を殺し祭禮を行ふを謂ひ、祭にあげられるべき熊が引き出されるや婦女子は或は囃し、或は踊り、遂に毒矢を放つて之を殺す。終つて一同酒宴を張り熊肉を煮て食し終日を樂しむ、實に全族行事中の盛儀である。

語源

譯語	アイヌ原語	原語の大意
上川	ペニ、ウングルコタン	上川に居住する人々の部落
旭川	チユツプ、ペツ	チユツプ(旭)ペツ(川)水源東方に當り旭の出づる處
忠別	チユツプ、ペツ	音譯
近文	チカツプニ	大きな鳥の巢
牛朱別	ウシシユベツ	鹿の蹄の跡多き川
石狩川	イカラカラペツ又はイシユカラペツ	同流川美しく作りたる川

和人の足跡 寛政十年 徳川幕府目付渡邊久藏、使番大河内善兵衞、勘定吟味役三橋藤右衞門等を遣はし蝦夷地を調査せしむ。この時藤右衞門は部下二十六名と共に松前を發し宗谷に至り、皈途手鹽より部下三名に命じ天鹽川を溯らしめ石狩川の上流即ち上川の地に入らしむ。

文化四年 幕府勘定役近藤重藏命を以て西海岸を歴巡し皈途手鹽川を溯つて上川に入り踏査を終へ皈へりて徳川家齊に中央道路開鑿の要を說く。即ち石狩より石狩川筋を溯り上川を經て北海岸斜里に至るものを開くに於ては上川は往來の中心となり開拓大いに進み遂に全道樞要の地たるべしと。

尙近藤重藏と前後して享和文化の頃間宮林藏蝦夷地の地理實測及道路選定の任を以てこの地に至り石狩、天鹽兩河の上流を踏査す。

文化八年 アイヌ對交易場所たる石狩元場所請負人村山喜右衞門上川忠別太に番屋を建て爾後冬季を期してこの地に來りアイヌの獵獲物を交易す。

安政四年 石狩在勤足輕松田市太郎上川に至り更に石狩川を溯り旭岳を踏破す。

仝 年 五月雇吏松浦武四郎上川に入り各地を跋涉し路線を撰定し中央道路開鑿に關し、箱館奉行に提出し力說大いに努むる所ありたり。

開拓時代（北海道と上川地方）

明治元年 四月政府は箱館裁判所を置き後箱館府と改稱し全道に新政を布く。

十 月 幕府の脫賊榎本釜次郎等來りて全道を占領す。

明治二年　五月五稜郭開城し、七月開拓使を置き八月蝦夷を北海道と改め十一國八十六郡に分つ。この時石狩場所は札幌、石狩、樺戸、空知、夕張、雨龍、上川の七郡に分れたり。

明治三年　正月八日兵部省の石狩外八郡の支配を免ず。仝月田中銃次郎、平田貞治開拓使の命を以て郡界調査の爲め上川に來る。

明治四年　開拓使廳を札幌に定む。

明治五年　開拓使は使部高畑利宜を上川に遣はし地勢、戸口、産物等を調査す。當時アイヌの戸數は六十八、人口三百六と記錄せられたり。

明治六年　六月開拓使雇教師米人ヲスソン測量基線撰定の爲め上川に來り適地を得ずして歸へり九月再來石狩川を測量し愛別に至つて引返へす。尙七月仝ライマン地質鑛物調査の爲め上川に入り更に土勝に至る。この行を終へてライマン上川に天皇の行幸を仰ぐべきの意見を陳ず。

明治七年　二月札幌本廳管内各部大小區劃を定め上川郡を第五大區一小區となし上川郡は石狩外七郡と共に石狩郡役所の管轄たり。

尙明治五、六年頃より鈴木龜藏なる者アイヌの需要品を携へ上川に來り、獸皮、鹿角、干鮭等と交易をなし居たり。

明治八年　三月屯田事務局を置き五月始めて屯田兵を札幌郡琴似村に移す。

明治九年　九月大小區劃を改定し上川郡を第二大區三小區とす。この頃アイヌの毒矢による狩獵を禁ず。

明治十年　二月西南役起り四月屯田兵出征、九月凱旋す。この歳上川アイヌ四十一戸、百八十二人。

明治十一年　十一月蝦夷人の呼稱を舊土人と改む。

明治十二年　七月大小區劃を廢し郡區町村を編制し石狩外七郡役所を石狩に置く。

明治十三年　十一月手宮札幌間鐵道開通す。

明治十四年　明治天皇行幸手宮へ御着艦札幌へ成らせられ室蘭を經て九月七日函館より還幸。

明治十五年　二月開拓使を廢し函館札幌根室の三縣を置く。上川郡は札幌縣の管轄たり。

七月岩村通俊本道を巡回し北京を上川に建て殖民局を置きて之を管するの議を高唱す。

十一月十三日幌内鐵道竣功、仝日札幌岩見澤驛間及び岩見澤幌内間開通。

明治十六年　樺戸集治監副典獄櫻木保又石狩川を溯り上川の水利地形の調査を行ふ。

明治十七年　八月内務屬高橋不二雄、北海道地圖作成の爲め札幌に至り、札幌縣御用係福士成豐を同伴して上川に來り上川の經緯度高度等を測量す。この測量により上川の地圖略ぼ完全す。

明治十八年　八月司法大輔岩村通俊、屯田兵本部長永山武四郎上川に來り近文山に登り形勢を瞰望す。通俊函館に至り、北京を上川に奠くの議を草し内閣に提出す。

九月永山武四郎上川の地勢開濶にして將來緊急の地と認むと陸軍大臣に上申す。

明治十九年　一月函館、根室、札幌の三縣並に北海道事業管理局を廢し「北海道廳」を置き司法大輔岩村通俊第一次の道廳長官に任命。

五月上川假道（自空知郡市來知村至上川郡忠別太）を開鑿し尙上川鐵道豫定線（自岩見澤至上川）を測量す。

この歳近文山に岩村、永山等の開拓紀念碑を建つ。

創業時代（上川地方と旭川）

明治二十年　上川假道の改築に着手し上川開拓の緒につく。十月岩村長官忠別太に至り先づ仝道中樞のこの地開拓を抱負とし道路開鑿、農事試驗場設置等施設する所ありたり。

明治二十一年　永山武四郎長官の任につき岩村前長官の意を繼ぎ上川開拓の急務を說き、上川道路の修築につとむ。

七月上川測候所を忠別太に置く。

此歳陸軍次官桂太郎（七月）侍從片岡利和、藤波言

忠、德川義禮(八月)　永山長官、參謀本部次長小澤武雄(九月)　上川を視察す。

明治二十二年　五月上川市街地(神居旭川)を區劃す。

參謀本部次長川上操六上川を視察す。

十一月市來知、空知太間續いて空知太、忠別間電話線竣功。

仝月永山長官上川離宮豫定地設定の議を內閣に具申す。十二月上川郡に他日一都府を設け離宮を置かるべき旨仰出さる。

明治二十三年　永山長官上川離宮豫定地を調査す。

侍從東園基愛(四月)　永山長官、樞密顧問官榎本武陽、遞信次官前島密(九月)　上川を視察す。

九月始めて上川郡に神居村(今は神居、神樂、美瑛に分る)永山村(今は永山、鷹栖、比布、愛別、當麻に分る)旭川村(今は旭川市、東旭川、東川に分る)の三個村を置く。旭川の名稱この時に始まる

明治二十四年　六月渡邊千秋道廳長官に任ぜらる。

神居、旭川、永山三村戶長役場を創設し上川全部を管轄せしむ。

侍從片岡利和(六月)　京都府知事北垣國道(八月)陸軍監督官野田豁道(九月)　屯田兵永山司令官(十月)上川を視察す。

此歲上川、網走間道路竣功。

永山に笠原釀造所を開業す。

明治二十五年　一月上川市街宅地の貸下を告示す。

四月札幌警察署旭川分署を置く。

七月北垣國道道廳長官に任ぜらる。仝月下村釀造所設立。

八月旭川村字ウシシュベツに屯田兵三百九十六戶移住。

九月北垣長官、宮內大臣久方久元、御料局長岩村通俊旭川市街及永山屯田を視察す。

明治二十六年　一月旭川に上川農會を設く。

三月旭川に眞宗大谷派本願寺別院說教所を開く。

六月旭川に戶長役場を置き旭川、神樂、神居、鷹栖の四村を統轄す。

七月上川神社假殿を設く。

八月內務大臣井上馨北垣長官と共に上川を視察す。

九月忠別小學校を置き十二月三等郵便局を置かる。

明治二十七年　五月舊土人に近文區劃地を割渡す。

八月淸國に對し宣戰公布、北海道を第七師團管區とす。仝月旭川に曹洞宗說教所を開く。

この歲石狩川架橋。

明治二十八年　二月旭川市街地に川添、寺、中、忠別本、宮下の六町、神居市街地に美瑛町を置く。

三月四日動員下令、屯田兵を以て臨時第七師團を編成し中將永山武四郎司令官に任ぜられ出發東京に至り命を待つ。

旭川に私設忠別消防組を置く。

明治二十九年　二月上川鐵道敷設の件衆議院に於て可決。

原保太郎道廳長官に任命。

五月第七師團を札幌に置き中將永山武四郎師團長に輔せらる。

上川より中川郡に至る道路開鑿、空知太、旭川間鐵道起工。

明治三十年　四月上川郡役所を旭川に置く。

是月十勝線及び天鹽線鐵道旭川より工事に着手す。

旭川警察署を置く。

安場保和道廳長官に任命。

九月日蓮宗說教所を開く。

十月郡役所を廢し上川支廳となす。

仝月眞宗本願寺說教所を開く。

十二月東川村を置く。是月旭川村字ウシシュベツを永山村に編入す。

明治三十一年　四月旭川に鐵道部の工場を置く。

五月上川倉庫株式會社設立、荒井精米所開く。

七月杉田定一道廳長官に任ぜらる。

上川線空知太、旭川間及十勝線旭川、邊別間(七月)天鹽線旭川、永山間(八月)天鹽線永山、闢留間(十一月)開通す。

九月東旭川村を置く。

十一月園田安賢道廳長官に任ず。
是月鷹栖村字近文を第七師團位置に撰定せらる。
明治三十二年　七月第七師團建設工事に着手す。
八月旭川市街地字名を改め一條通乃至九條通及び宮下通、曙通、常磐通とす。
九月陸軍大臣桂太郎、第七師團長永山武四郎及び教育統監寺内正毅來旭師團工事其他を視察す。是月今井合名會社旭川釀造所を設く。
明治三十三年　一月今井合名會社旭川支店を設く。
三月上川稅務署を置く。
四月中將大迫尙敏第七師團長に補せらる。
六月忠別消防組を廢し旭川消防組を置く。
八月眞宗慶誠寺開山す。
仝月三十一日旭川村を旭川町と改稱。
是月日本酒精株式會社旭川釀造所を設く。
十一月歩兵第二十六、二十七、二十八聯隊及び騎兵砲兵、工兵、輜重兵の諸隊旭川に移轉す。
十二月旭川盛有株式會社設立。

明治三十四年　二月旭川郵便局を二等局とす。
六月第七憲兵隊本部を札幌より旭川に移す。
陸軍大臣兒玉源太郎旭川を視察す。
八月十七日載仁親王旭川に成らせられ二十九日御出發。
仝月第七師團司令部を札幌より旭川に移す。

町制時代

明治三十五年　三月曹洞宗大休寺を開く。
四月旭川町に一級町村制施行。
五月忠別小學校を分離し高等科を上川高等小學校尋常科を上川第一尋常小學校同校第一分校を上川第二尋常小學校近文第五小學校を上川第三尋常小學校とす。
五月始めて旭川町町會議員(二級)選擧を行ふ。
旭川、札幌、小樽間電話通信開始。
八月始めて衆議員選擧を行ふ。
十月第七師團司令部及各隊兵營竣工。

明治三十六年　一月上川神社創立許可。
是月共成株式會社旭川精米所を設く。
四月廳立上川中學校を開校。
十月神谷酒造合資會社(現合同酒精株式會社)創立せられ日本酒精株式會社解散後の事業を繼承す。
十二月旭川一條郵便局を置く。
明治三十七年　二月十日露國に對し宣戰の詔勅發せらる。
八月第七師團動員下令。
十一月野戰第七師團第三軍戰鬪序列に加はる。
十二月野戰第七師團二百三高地戰に加はる。
明治三十八年　七月南樺太占領。
十月日露平和克復の詔勅發せらる。
是月十勝線利別帶廣間開通、十勝線釧路線を連繫し上川線に接續す。
仝月北海道拓殖銀旭川支店を設く。
明治三十九年　三月九日第七師團司令部凱旋。
四月森林事務所を開設す。
北海道銀行旭川支店を設く。
六月上田有澤第七師團長に補せらる。
十月旭川電燈株式會社設立。
河島醇道廳長官に任ず。
明治四十年　三月眞言宗眞久寺を開く。
四月廳立上川高等女學校を置く。
是月上川土木派出所を置く。
八月內務大臣原敬旭川視察仝月大將貞愛親王第七師團を檢閲せらる。
九月旭川、釧路間鐵道全通式を釧路に行ふ。
十一月旭川市中電話開通。
明治四十一年　四月旭川に上川第四尋常小學校を置く
仝月上川博善株式會社創立。是月北海道建設事務所を札幌より旭川に移す。
六月上川營林區署を置く。
下村正之助、小林繁三等の發起を以て實業青年會組織を圖り九月之を創立す。
十二月中將上原勇作第七師團長に補せらる。

明治四十二年　内務次官一木喜德郎(五月)　農商務大臣大浦兼武(六月)　參謀總長奥保鞏(七月)　遞信大臣兼鐵道院總裁後藤新平(八月)　旭川を視察す。
十二月世木澤精米所開かる。
明治四十三年　三月當磐公園を開く。
旭川郵便局を一等局とす。
十一月留萌鐵道全通す。
明治四十四年　一月近文驛を置く。
二月私立和洋裁縫女學校を精華女學校と改稱す。
四月旭川町火災豫防組合を設く。
五月第七師管内招魂社を設く。石原健三道廳長官に任ぜらる。
七月特命檢閲使大將長谷川好道第七師團を檢閲し、八月皇太子嘉仁親王旭川に行啓あらせらる。
中將林太一郎第七師團長に補せらる。
大正元年　七月明治天皇崩御、皇太子嘉仁親王踐祚、元を大正と改めらる。
二月第七師團に於て始めてスキーを試用す。

九月十二銀行旭川支店。十月百十三銀行旭川支店を開設す。
十二月山之内一次道廳長官任命。
大正二年　一月旭川市内電燈點火。
二月中村純九郎道廳長官に任ず。
五月特命檢閲使大將大島義昌第七師團を檢閲。
仝月農商務大臣山本達雄旭川視察。

區制時代

大正三年　四月一日旭川町に區制を施行し旭川區となる。
仝月日本赤十字社旭川委員部及愛國婦人會旭川幹事部を設く。
仝十一日昭憲皇太后崩御。
是月西久保弘道道廳長官任命。
尚仝月旭川醫師會の創立あり。
五月中將宇都宮太郎第七師團長に補せらる。
七月旭川區長市來源一郎就任。

八月獨逸に對し宣戰布告す。
十一月旭川教育會を設く。
大正四年　四月上川中學校を旭川中學校と改稱。
六月上川神社鄕社となる。
俵孫一道廳長官に任ぜらる。
十一月　大正天皇卽位の大典を擧げらる。
仝月旭川少年團を創立。
大正五年　一月旭川實業青年會を旭川實業協會と改稱。
五月旭川地方裁判所を設置。
六月日刊北海日日新聞發行(週刊北海めざまし新聞改題)
中將藤井幸槌第七師團長に補せらる。
仝月札幌監獄旭川分監を置く。
十一月裕仁親王立太子禮を行はる。
大正六年　一月旭川電燈株式會社富士製紙株式會社と合併し從來の營業所を富士製紙株式會社旭川電氣事務所とす。
二月內國通運株式會社旭川荷扱所を旭川支店とす。
四月旭川商工組合聯合會を設く。
第七師團滿洲守備命を以て旭川出發。
大正七年　二月十一日下村長藏私財を以て下村育英財團を設立。
六月上川測候所を旭川測候所と改稱す。
八月開道記念博覽會を札幌及小樽に開會。
仝月載仁親王、妃智惠子、王子春仁王旭川に御成あらせらる。
十月下村育英財團文庫を開く。
十一月惡性感冒流行、旭川區立各學校一時休校。
十二月株式會社田中木工場及旭川商事株式會社設立
大正八年　一月旭川分監を廢し旭川監獄とす。
笠井信一道廳長官に任ぜらる。
四月第七師團旭川に皈還。
八月旭川商業會議所設立、旭川實業協會會報を旭川商業會議所月報と改題發行。
仝月博恭王、博忠王旭川へ御成あらせらる。
九月上川馬車鐵道株式會社旭川市内の軌道撤去。

十月富士製紙株式會社旭川事務所を同社の旭川出張所とす。
十月日刊旭川新聞發行（旬刊北海しののめ新聞改題）
十二月中將內野辰次郎第七師團長に輔せらる。
是月二十三日井內歡二旭川商業會議所會頭に當選。
大正九年　一月旭川手形交換所を設く。
是月第七師團の尼港派遣隊旭川出發。
丸カ三箇商店（二月）今井釀造株式會社（今井旭川釀造所組織變更）旭川肥料株式會社、北海肥料株式會社（四月）設立せらる。
五月第七師團より北部沿海洲派遣隊を編成。
七月薩哈嗹派遣隊編成。
八月朝融王、邦久王旭川へ御成あらせらる。
九月旭川開市三十年記念式を擧ぐ。
十一月北海道產米百萬石記念祝賀會を札幌に開く。
十二月帝國在鄉軍人會旭川區分會を帝國在鄉軍人旭川聯合分會と改稱す。
大正十年　四月區立旭川女子職業學校の組織を變更し北都高等女學校と改稱。仝月上川土木派出所を旭川土木事務所と改稱。
五月宮尾舜治道廳長官に任ぜらる。
旭川郵便局通信養成所を札幌遞信講習所旭川支所と改稱。
七月野崎小三郎旭川商業會議所會頭に當選。
是月出征中の第七師團各隊旭川に凱旋。
八月成久王旭川に成らせらる。
是月第一回北海道商業會議所聯合會を旭川に開催。
十二月富士電氣株式會社を北海道電燈株式會社と改稱し從來の營業所を同社旭川事務所とす。

市制時代

大正十一年　一月北門銀行旭川支店及北門貯蓄銀行旭川支店を設く。
三月旭川商業學校開校。
五月私立旭川盲啞學校を設く。
七月一日　皇太子裕仁親王旭川に行啓十六日綱走に向はせらる。
八月一日旭川區に市制施行旭川市となる。
九月廳立旭川師範學校を置く。
十月旭川監獄を旭川刑務所と改稱。
十一月石北線新旭川愛別間開通。
是月荒井初一旭川商業會議所會頭に當選。
仝月旭川商工組合聯合會復興。
大正十二年　五月私立旭川中等夜學校を設く。
六月旭川市長岩田恒就任。
七月邦彥王旭川へ御成ゆ遊ばさる。
八月中將國司伍七第七師團長に補せらる。
仝月日刊北都每日新聞發刊。
九月關東地方大震災、第七師團外各團体より救護衞生團を派遣。
是月土岐嘉平道廳長官に任命せらる。
十一月石北線愛別、上川間開通。
十二月日本赤十字社北海道支部病院を旭川に設く。
仝月上川神社縣社となる。
大正十三年　一月　皇太子裕仁親王御結婚の御祝典を擧げらる。
三月私立旭川女學校を廢し私立旭川實科女學校を設く。
區立旭川商工補習學校を旭川商工學校と改稱。
六月神樂岡御料地內に上川神社遷宮。
八月旭川自動車株式會社市內及近文線の自動車運轉
是月衞生聯合會附屬衞生參考館を設く。
十月合同酒精株式會社（神谷酒造株式會社外三社合同）設立。
十二月旭川刑務所を札幌刑務所旭川支所とす。
この歲常磐公園千鳥が島に上川神社頓宮造營なる。
大正十四年　一月神樂岡御料地內原野を買受け旭川市有とす。
五月衆議員選擧法改正、普通選擧制となり、旭川市を第二選擧區に屬す。
九月中川健藏本道長官に任命。
是月旭橋下流に工兵特別演習施行石狩川に新橋を架す。

中越銀行旭川支店を設く。
是歳師團道路舗裝工事者手翌年に亘る。
昭和元年　一月旭川電氣軌道株式會社札幌より旭川に移る。
三月渡邊錠太郎第七師團長に補せらる。
六月旭川に大成、中央、日章、北門の四青年訓練所を置く。
七月北海道齒科醫師會旭川支部及北海道藥劑師會旭川支部を設く。
八月國産振興博覽會を札幌に開く。
九月載仁親王旭川へ御成
十二月二十五日　大正天皇崩御皇太子裕仁親王踐祚元を昭和と改めらる。
是歳神樂岡市有地に公園設計。
昭和二年　一月旭川健康保險署を置く。
仝月旭川、東旭川間電氣軌道運轉開始。
昭知三年　一月新北門小學校開校す。
共榮貯金銀行營業停止。

二月糸屋銀行の和議裁判確定。
雍仁親王殿下本市に御成あらせらる。
四月旭川市都市計畫施行都市に指定せらる。
市立旭川商業學校を地方費に移管。
旭川商工會議所會頭に齋藤彌三郎選任。
五月都市計畫區域決定す。
第七師團歩兵隊天津方面に派遣せらる。
六月上川神社造營工事竣工す。
八月大禮記念中部北海道物産共進會を大成小學校に於て開催す。
九月長輪線全通す。
十月職業紹介所新廳舍竣工。
十一月今上陛下登極の御大禮を行はせらる。
十二月旭川市街軌道株式會社創立。
昭和四年　一月啓明尋常小學校開校す。
四月牛朱別川工事起債許可施工準備に着手す。
五月中將新井龜太郎第七師團長に補せらる。
六月第七師團支那派遣隊旭川に歸還す。

恒憲王殿下御來旭あらせらる。
博恭王殿下旭川驛御通過遊ばさる。
奥田千春旭川市長に就任す。
池田秀雄北海道廳長官に任命。
十一月旭川市街軌道株式會社市内電車開通す。
昭和五年　四月牛朱別川切替工事起工式を擧ぐ。
八月商工振興展覽會を十日間日章小學校に於て開催。
九月安田銀行旭川支店設置。
十一月旭川市街軌道株式會社電車師團線開通す。
旭川正米市場開場。
昭和六年　七月閑院宮載仁親王殿下本市に御成遊ばさる。
國産振興北海道拓殖博覽會札幌小樽兩市に開催せらる本市も之に參加し生産品宣傳に努む。
八月思想善導全國佛寶博覽會を旭川商工會議所主催を以て大成小學校に於て開催入場者十五万に達し本市未曾有の盛況を見たり。
中將佐藤孑之助第七師團長に補せらる。
九月日新小學校開校す。
十一月佐上信一北海道廳長官に任命。

地理

位置　旭川市は北緯四十三度四十七分東經百四十二度三十二分、略北海海道の中央に位す。東は上川郡永山村及び東旭川村に接し西南は忠別川を隔てゝ同郡神居村及び神樂村に連り北は同郡東鷹栖村及び鷹栖村に境し面積一方里三九六四周圍六里三十五町四十一間にして其の廣袤東西一里三十六間南北一里二十九町三十一間あり。

地勢　海面上約百十三米の高原地帶で地勢平坦第四期沖積層土に屬し北東方より流れ來る石狩川は市の中央部を貫流し全川と竝流する牛朱別川と市中に於て合流し市の東西より來る忠別川は市の南境を劃して流れ西南隅に於て石狩本流と合しやがて神居古潭の溪流となる。各川の市内流河の沿長石狩川は約五千七百尺二十間忠別川三千八百六十間牛朱別川は約千二百九十間に亘る。

氣候　旭川市は地位の關係より大陸的氣候に屬し極寒極暑の差は全國的に甚だしい方で晝夜の氣溫の高低隔差も多きい。春秋の兩季節及び春暖秋冷の期間に至て短く恰も冬より夏に、夏より冬へ遷るの感が深い。即ち冬期最も長く夏期亦他の地方に比して長い。旭川測候所開設以來三箇年間の

一ヶ月間晝夜平均氣溫最低は二月の零下八度九分で最高溫は八月の攝氏二十度三分で全國に記錄的である。

寒氣　秋冷を感じる間も短く十月下旬に入れば既に降雪を見、最早冬の狀態に入り漸次寒氣加はり一月下旬より二月中旬まで約三十日間最も嚴しく年中の極低溫度はこの期間に現出する。それより日增寒氣うすらぎ四月に入れば暖氣加速度に增進し日々融雪を見春色を加ふ。

既往三十ヶ年中の極低溫度は明治三十五年一月二十五日の零下四十一度を最低とし明治四十二年一月十三日の零下三十九度六分は之に亞ぐものである。

暑氣　四月中旬より暖氣逐日加はり六月に入れば夏期の狀態に移り、七月中旬より八月上旬迄は日中の溫度は三十度近くに昇騰するを常とし、上川地方の農作物の豐饒の主因をなす。年中の最高溫度は全國的であるが高溫を保つ時間は午後一時より午後三時迄の間に止まり、午後四時頃に至れば涼風袂をはらひ夜間苦熱に轉々するが如き事は全くなく、北海道の喜こぶ所以は夏の夜の涼味にある。

既往三十ヶ年間の最高溫は昭和三年八月十九日の華氏九十七度四分で次ぐものは大正九年七月二十

五日の華氏九十五度である。

氣溫統計

平均最低氣溫

	大正十一年	〃十二年	〃十三年	〃十四年	昭和元年	〃二年	〃三年	〃四年	〃五年	〃六年
一月	二四・〇一	一四・三一	一六・二一	一三・二一	一四・八一	一四・一一	一五・一一	一六・〇一	一五・〇一	一八・六一
二月	一一・〇一	一八・五一	一三・〇一	一五・五一	一一・八一	一八・六一	一五・二一	一六・七一	一五・四一	一七・九一
三月	一〇・二一	八・五一	一六・〇一	一二・五一	七・六一	九・九一	八・一一	八・八一	六・六一	八・八一
四月	一・〇一	二・五一	〇・二一	二・九一	二・七一	〇・二一	二・〇一	二・一一	二・一一	一・九一
五月	四・二一	五・一一	二・七一	三・八一	三・四一	四・二一	五・七一	四・八一	三・八一	三・四一
六月	一〇・六一	九・九一	九・九一	一一・二一	八・六一	八・九一	一〇・一一	九・二一	九・三一	九・二一
七月	一五・七一	一四・一一	一七・七一	一四・〇一	一三・九一	一七・〇一	一五・六一	一七・四一	一五・一一	一三・一一
八月	一五・九一	一四・七一	一五・五一	一七・七一	一四・二一	一七・一一	一六・五一	一六・〇一	一六・八一	一六・七一
九月	九・二一	一一・一一	一〇・〇一	一一・五一	一一・四一	九・六一	一二・八一	八・三一	八・三一	一一・三一
十月	三・五一	三・二一	一・七一	四・一一	二・〇一	四・一一	三・四一	三・四一	二・八一	五・三一
十一月	二・九一	二・三一	一・四一	二・八一	二・七一	一・八一	三・七一	三・七一	三・三一	二・〇一
十二月	一三・〇一	七・七一	一三・四一	七・五一	一〇・一一	八・二一	一〇・八一	八・六一	一一・二一	七・八一
平均	〇・二一	〇・四一	〇・〇一	〇・七一	〇・三一	〇・七一	一・一一	〇・三一	〇・五一	〇・一一

平均最高氣溫

	大正十一年	〃十二年	〃十三年	〃十四年	昭和元年	〃二年	〃三年	〃四年	〃五年	〃六年
一月	一〇・三一	四・九一	六・五一	三・九一	四・九一	三・五一	三・四一	五・一一	五・七一	六・六一
二月	〇・二一	四・五一	三・八一	三・八一	一・五一	五・八一	三・六一	四・二一	二・三一	五・三一
三月	〇・八一	三・〇一	一・三一	一・一一	一・八一	一・五一	二・八一	一・七一	三・七一	二・〇一
四月	一〇・六一	九・二一	一一・六一	一〇・〇一	六・〇一	一二・一一	一一・七一	八・六一	一一・五一	七・五一
五月	一五・九一	一七・六一	一五・〇一	一八・三一	一七・〇一	一六・二一	一八・五一	一七・五一	一八・一一	一四・四一
六月	二三・九一	二二・三一	二三・九一	二五・九一	二二・六一	二三・六一	二三・〇一	二二・四一	二二・七一	二〇・六一
七月	二六・七一	二五・二一	二九・一一	二五・五一	二五・七一	二八・二一	二八・八一	二七・九一	二七・三一	二七・一一
八月	二六・一一	二六・六一	二八・一一	二八・一一	二五・八一	二七・六一	三〇・五一	二六・五一	二六・八一	二六・六一
九月	二三・〇一	二二・五一	二二・五一	二三・九一	二二・五一	二二・一一	二二・八一	二二・八一	二二・四一	二二・四一
十月	一五・七一	一四・九一	一四・五一	一五・六一	一一・三一	一六・一一	一六・六一	一六・〇一	一六・五一	一六・五一
十一月	六・六一	六・六一	六・三一	六・〇一	四・一一	六・八一	六・三一	五・六一	四・八一	四・八一
十二月	二・二一	二・二一	二・一一	〇・八一	一・八一	〇・九一	二・二一	〇・三一	二・四一	〇・四一
平均	一一・二一	一一・四一	一一・四一	一二・〇一	一〇・六一	一一・九一	一二・七一	一一・五一	一一・九一	一〇・四一

	大正十一年	〃十二年	〃十三年	〃十四年	昭和元年	〃二年	〃三年	〃四年	〃五年	〃六年
一月	一六・三一	九・二一	一一・〇一	八・三一	九・八一	八・七一	九・〇一	一〇・三一	一〇・〇一	一一・八
二月	五・五一	一一・六一	七・八一	九・四一	六・三一	一一・九一	九・二一	九・九一	八・六一	一一・一
三月	四・七一	二・三一	八・一一	六・三一	二・八一	四・一一	二・四一	三・四一	一・四一	三・一
四月	四・五	三・三	五・四	三・三	一・五	五・七	四・六	二・九	四・五	二・八
五月	九・五	一一・〇	八・七	一〇・八	九・八	一〇・〇	一一・八	一〇・九	一〇・八	八・八
六月	一六・五	一五・〇	一五・八	一八・三	一四・九	一四・四	一五・六	一五・〇	一五・一	一四・三
七月	二〇・七	一九・四	二三・一	一九・四	一九・三	二三・一	二一・六	二三・二	二〇・九	一六・〇
八月	二〇・四	二〇・一	二一・四	二三・三	一九・二	二一・七	二三・八	二〇・五	二一・四	二一・六
九月	一五・〇	一五・六	一五・五	一六・四	一五・七	一四・八	一七・五	一四・三	一六・〇	一五・七
十月	九・一	八・六	八・〇	九・二	六・二	九・三	九・五	九・一	八・六	八・六
十一月	一・二	一・五	二・三	一・六	六・五	二・〇	二・四	〇・九	〇・七	一・八
十二月	六・九一	四・〇一	七・〇一	三・三一	〇・五一	四・四一	六・〇一	四・二一	六・七一	四・二
平均	五・三	五・六	五・五	六・二	五・八	六・〇	六・六	五・七	五・九	四・九

風力

廣茫目を盡きせぬ上川平野の中心に位置するも四面山脈を以て圍まれてゐる爲め風力至て微弱にして農期中殊に弱く市下は勿論附近農村に於ても風に因る被害あるなし。

この風力の弱い夏は暑氣强く農作を助けると共に冬期は寒氣の鋭鋒を殺ぐ助けとなるは寔に自然の妙理に慈まれたるものと云ふべし。風向は冬期中西方風最も多く東方の風は皆無といふべし。

風速統計

旭川市平均風速度（最近十ケ年）

年次＼月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	平均	最多風向
大正十年	二・五七米	一・五一	二・〇九	二・五一	二・一〇	二・〇〇	一・八四	一・二八	一・二〇	一・一七	一・九九	二・一〇	一・八七	西
大正十一年	一・五一	二・一九	二・二一	一・八六	二・二一	一・九三	一・五一	一・二〇	一・四四	二・〇三	二・二一	一・三三	一・八一	仝
大正十二年	二・四四	一・〇四	二・三三	三・四三	二・三六	一・八七	一・八三	一・四六	一・五一	二・〇三	二・五二	二・〇九	二・〇九	仝
大正十三年	二・一〇	二・二一	一・五〇	二・一八	二・一六	一・八六	一・五八	一・三四	一・五三	二・二四	一・九二	一・七二	一・八五	仝
大正十四年	一・二五	一・四九	二・〇一	一・七六	一・六二	二・〇〇	一・六五	一・五六	一・三八	一・四七	一・六八	二・三〇	一・六八	仝
大正十五年	一・三七	一・八四	一・八〇	二・二七	二・二〇	一・七六	一・六二	一・三八	一・四〇	一・九九	一・四九	二・一七	一・七七	西南西
昭和二年	二・一〇	一・四〇	一・七八	二・一九	二・四一	一・八九	一・五一	一・三七	一・二四	一・五二	一・六〇	二・一八	一・七六	西
昭和三年	一・〇六	一・三三	一・八八	二・一九	二・〇八	一・六九	一・二八	一・一一	一・二七	〇・九五	二・二四	一・八七	一・五八	仝
昭和四年	一・五四	一・二四	二・一一	二・三七	一・六九	一・六八	一・三六	一・二三	一・三三	一・二六	一・六二	一・五三	一・五八	西南西
昭和五年	一・四〇	一・三一	一・七九	二・一七	二・一四	一・五七	一・三五	一・二五	一・〇六	一・一四	二・一五	一・四六	一・五六	北

旭川市最大風速度（最近十ヶ年）

年次＼月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大正十年	一二・〇米	一一・七	九・二	一六・〇	九・五	八・三	六・三	四・八	八・二	七・一	九・五	一三・〇
大正十一年	一〇・五	一二・九	一〇・三	七・八	九・九	七・六	六・三	七・一	一六・五	一〇・六	一〇・五	九・一
大正十二年	九・九	六・七	一一・〇	一七・〇	九・三	七・〇	六・九	七・二	八・三	九・七	一二・三	一〇・三
大正十三年	一二・三	七・九	七・四	一四・九	九・九	六・四	五・八	七・二	七・五	八・二	一二・六	一一・六
大正十四年	七・三	七・八	八・二	七・二	七・六	七・六	七・六	七・九	九・七	八・六	一二・八	一四・九
大正十五年	九・五	一〇・二	九・三	一〇・八	一三・四	八・二	五・四	七・八	一一・四	八・四	九・六	一〇・三
昭和二年	七・八	八・二	八・〇	九・五	一一・一	一〇・二	五・五	七・九	五・二	七・九	二・三	二・一
昭和三年	六・六	八・五	八・九	九・五	九・五	八・九	五・五	五・九	七・一	五・七	八・五	二・一
昭和四年	一〇・三	七・四	九・三	一一・二	九・三	六・〇	五・一	五・六	六・四	八・二	九・二	九・九
昭和五年	六・九	七・九	一一・三	九・八	九・九	六・八	五・一	七・八	八・四	六・二	九・七	八・八

降雪　例年十月下旬初雪を見十一月上旬に入り積雪厚く大地を蔽ひて根雪となる。根雪は平均十一月二十三日にして融雪は平均四月十四日となつてゐるが初雪の早來と根雪の早きとを本市の特徴とする。

年平均積雪量高さは二尺五寸と算出されてゐる。

地上積雪平均

	大正十一年	〃十二年	〃十三年	〃十四年	昭和元年	〃二年	〃三年	〃四年	〃五年	〃六年
一月	七八・〇極	七六・二	五六・七	四八・九	五七・五	五〇・二	五六・一	五〇・四	五二・三	七二・八
二月	七六・二	八四・六	七七・九	六四・〇	七二・五	八四・九	八二・四	六七・八	六〇・〇	九一・〇
三月	六二・八	六〇・三	七六・三	七〇・七	六二・四	八二・八	四七・四	五八・一	三三・五	八二・〇
四月	八・七	—	三・八	九・二	五・四	四・五	〇・二	二・六	—	一五・七
五月	〇・一	—	—	—	—	—	—	—	—	—
十月	—	—	一・二	—	—	—	—	—	—	〇・一
十一月	二二・一	四・二	三・八	四・四	九・〇	〇・五	五・八	六・三	一〇・二	三・八
十二月	四九・〇	一七・〇	二七・二	二一・三	二七・六	二六・〇	三六・八	一三・六	四二・九	三九・三

雨量　降雨量は農期中始めに少なく漸く増加し九月最も多量にして、本道北部の如く寡少ならず南部の如く過多ならず農産地として中庸を得たる雨量にして其の量本道中の中位にあり。

尚降雹は甚だ稀にして既往二十ヶ年間僅かに七回見たるに過ぎず從て降雹に依る農作物の被害皆無である。

旭川地方ニ於ケル日用液体類凍固溫度

液体品名	凍氷ヲ始メタルトキノ空氣ノ溫度	全部凍氷スルトキノ空氣ノ溫度	上欄溫度ガ來ルヘキ時節
清酒（正宗）	零下十四度	零下十六度五分	一月五日頃
〃（地古酒）	〃十四度	〃十六度	〃
醬油（龜甲万）	〃二十四度	〃二十五度五分	一月二十五日頃
〃（地製上）	〃二十五度	〃二十六度	〃
葡萄酒（地球握印）	〃十三度	〃十五度五分	十二月五日頃
石油（タンク印）	〃二十六度	〃七分迄ハ異狀ナシ	一月二日頃
〃（チヤスター印）	〃二十一度	〃不明	一月二十五日頃
白酒（金時印）	〃不明	〃十四度	十二月三十一日頃
白絞油	〃九度	〃十度	十二月十一日頃
麥酒（サツポロ）	〃十度	〃不明	一月二日頃
サイダー（金線印）	〃六度	〃八度	十二月三日頃
ブランデー	〃十九度	〃二十一度	十二月二十一日頃
酢（地製上）	〃六度	〃八度五分	

戸數と人口

明治二十三年開村當時の人口僅かに百五十三戸六百九十七人にして爾後この地の有望なると、政府の開拓方針の宜しきに基く轉住者漸次增加し明治二十五年には一躍六百五十七戸二千五百三十七人を數ふるに至り更に明治三十年末には一千三百八戸三千六百二十七人の多きに至り翌三十一年鐵道開通第七師團の設置等あり本市發展の機運熟するに及んで戸口激增し明治三十四年末には戸數二千九百四十二人口一万三百九十五人に達し當時の戸口增加率は如何に本市の發展性が內外に着目せられたるかを立證するものであらう。

其後戸數は百分の二乃至五十二人口は百分の二乃至六十二の割合を以て增加し、大正九年第一回國勢調査の結果は戸數一万一千三百四十人口六万一千三百十九と發表せられ爾後の趨勢別表の如く本市が僅々四十年にして現在人口八万を數ふるに至つた增加率は全國的に異例とせられる所である。

戸數人口比較

年次	戸數ト人口 戸數	一戸ニ對スル人口	年次	戸數ト人口 戸數	一戸ニ對スル人口
大正十年	二、九六六戸	四・九二人	昭和元年	一三、三四四戸	五・五三人

本市近接町村の現勢

町村別	面積	戸數	人口 男	人口 女	人口 計	人口 一戸當人口	生産價格 農産	生産價格 其他	生産價格 合計
上川郡神樂村	一七、八方里	二、三、八戸	六、八、三人	六、三、三〇人	一三、一、四三人	五・六三人	一、〇九一、八三七円	四三、四二円	一、一三五、二四九円
〃 神居村	一〇、二	七四六	二、三〇一	二、一三五	四、四三六	五・九三	四七、五四〇	一〇三、〇三五	五五〇、五六五
〃 江丹別村	二三、〇	四四一	一、一七四	一、一四六	二、五二三	五・七一	一九五、一二四	一三、四九八	二一七、六二三
〃 鷹栖村	二一、〇	一、四三三	四、七四〇	四、四五〇	九、一九〇	六・四〇	—	—	—
〃 東鷹栖村	五、三	一、四四九	四、三七四	四、二九七	八、六七一	五・九八	六一〇、八九七	二一四四	六三一、五三三
〃 北壱村	六、一	一、一二八	三、八七六	三、五五一	七、四二七	六・〇九	七七六、一三五	三一七〇九	八〇八、八四四
〃 永山村	二一、三	二、一八三	六、一四四	六、〇五四	一二、一九八	五・五九	五九三、五五五	一、七四一、六四四	二、一三六、一七九
〃 當麻村	一五、五	一、六五五	四、九七四	四、七六七	九、七六一	五・九〇	七四五、二九〇	二〇八、三三四	九五三、六二四
〃 東旭川村	九、五	二、五三七	七、八四六	七、五九九	一五、四四五	六・〇八	二、四八一、一四二	八四、一五二	二、一五六、三九四
東川村	二、九	一、一三五	四、三一五	四、〇九五	八、四一〇	六・三四	六六七、四九〇	二七一、五八九	六九五、〇七九

上川支廳管内概況

面積	戸數	人口	一戸當人口	地積 田	地積 畑	地積 計
六三七、三七一方里	四六、七五三戸	二七四、四九三人	五・八七人	六二四九五、一町反	七〇六二一、七町反	三三一〇六、八町反

最近十ケ年人口

年次＼人口	男	女	合計	年次＼人口	男	女	合計
大正十年	三一、一七七人	二七、六三六人	五八、八〇五人	昭和元年	四一、四九七人	三一、五六六人	七三、七六三人
大正十一年	三三、四二一	三〇、〇五〇	六三、四六一	昭和二年	四二、四四六	三一、八六九	七五、三一五
大正十二年	三五、四五〇	三〇、八七七	六四、三五七	昭和三年	四三、〇四九	三四、一三二	七七、二六一
大正十三年	三七、四七二	三五、八五二	七二、三四四	昭和四年	四四、〇二〇	三四、八五五	七八、七五五
大正十四年	四〇、七六六	三一、五七五	七二、三四一	昭和五年	四五、三二五	三七、一八九	八二、五二四

最近十ケ年人口

年次＼人口	男	女	合計	年次＼人口	男	女	合計
大正十年	三、一七七人	二七、六三六人	五八、八〇五人	昭和元年	四一、四九七人	三一、五六六人	七三、七六三人
大正十一年	三三、四二一	三〇、〇五〇	六三、四六一	昭和二年	四二、四四六	三一、八六九	七五、三一五
大正十二年	三五、四五〇	三〇、八七七	六四、三五七	昭和三年	四三、〇四九	三四、一三二	七七、二六一
大正十三年	三七、四七二	三五、八五二	七二、三四四	昭和四年	四四、〇二〇	三四、八五五	七八、七五五
大正十四年	四〇、七六六	三一、五七五	七二、三四一	昭和五年	四五、三二五	三七、一八九	八二、五二四

一般會計歳入

（昭和五年度迄ハ豫算決算額ヲ示シ六年度ハ豫算額ヲ示セリ）

科目	昭和六年	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年
使用料手數料	九六、七八〇円	九七、七五五円	一〇三、八三〇円	九八、二九六円	一三三、一三三円
國庫下渡金	六九、〇三〇	五九、八六九	五九、八六九	六〇、三六九	五八、九六九
雜收入	八三、一九二	四八、九五三	五二、四〇七	七一、五四二	五一、〇五六
繰越金	二一、〇〇〇	二一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇	三五、〇〇〇
附帶金	一八、八七四	二〇、八三六	三三、二七二	二二、六〇三	一七、二四一
國庫補助金	四、六五七	五、二九	八、九五三	二、五二一	一、五三三
寄附金	四、二二〇	三、六三三	四、一五五	四、一三六	三、五七二
繰入金	二、五六一	九、三〇八	三、七九七	一〇〇	一〇
繰越金	二六、八二二	二六、三七六	一八、一六二	一四、五九六	二六、一六〇
市債	四五、七二五	四九、三五一	五五、二五五	五五、九二二	四七、三四一八
負擔金	一〇一、〇〇〇	一二、二〇〇	八〇、九〇〇	二六、二〇〇	二四、七、二五
合計	一、〇三七、七四九	一、〇三二、六七〇	一、〇四二、一四〇	一、〇六七、二四九	一、一四三、七二三

一般會計歳出

（昭和四年度迄ハ決算額ヲ示シ五、六年度ハ豫算額ヲ示セリ）

科目	昭和六年	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年
神社費	五六円	五六円	五六円	五六円	六〇円
市役所費	二〇、三六二	二二、六九七	二三、三七二	二三、三三二	二二、四二二
市會議費	五、三九四	五、八四四	五、八九六	四、四九六	四、二〇二
小學校費	三四、二三六	三九、九〇四	四五、四七九	三六、八二一	五一、六二五
土木費	二六五、七六三	二〇四、二三五	二七二、五四五	二五三、二二六	二四〇、七六三
高等女學校費	六〇、〇六六	六二、五八四	六三、四五二	六三、六四四	五五、二三五
商業學校費	—	—	—	—	—
商工學校費	五、〇八〇	五、二〇九	五、二〇九	五、二二六	四、一九七
青年訓練所費	三、二二〇	二、九八〇	二、八八〇	二、三五五	五、二二七
傳染病豫防費	一九、二八八	二〇、八九二	二〇、一八六	二〇、八二二	二〇、九〇五
ラヽゝ治療費	二、二八〇	二、七〇四	三、二六七	三、二九五	三、三五三
衞生費	三〇、〇四六	三三、五六五	三二、一九三	三二、三六六	三〇、九六三
汚物掃除費	三二、二八	二八、五〇	二二、六七六	一〇、〇〇六	九、三二

科目	昭和六年	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年
	円	円	円	円	円
警備費	四六、七四二	五〇、一五五	四九、四三四	四三、二二八	四〇、五三三
産業諸費	四、六〇三	八、〇〇〇	四、六一〇	四、三一〇	四、七六四
統計費	一、二四六	一、二〇〇	一、三二五	一、二二五	六六〇
屠場費	五、六五四	六、三一五	五、七〇九	五、六三七	五、八四八
公園費	三、七一五	三、九九九	五、四六二	四、一四三	四、〇一三
諸税及負擔	四、八六一	四、五一三	四、九五三	五、〇九〇	五、一七六
市費	—	—	—	—	—
社會事業費	二五、八五二	二五、一三一	二二、六八三	二三、九四一	二三、一三二
雜支出	二三、〇七二	二一、七九七	二三、二五二	二三、二五五	二三、一四三
豫備費	二三、〇五一	一七、六六五	二一、九三八	一一、四〇五	二七、〇二九
墓地及火葬場費	—	—	—	—	—
救助費	—	—	—	—	—
財産管理費	六三五	五一九	二二〇	一七〇	二〇
公金取扱費	五二〇	一、四九〇	一、五三〇	七八〇	七〇〇
合計	七〇七、七八八	七三九、〇七三	七三七、三二八	六七七、二三八	六八三、六七二

一般會計歲出（臨時部）

科目	昭和六年	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年
	円	円	円	円	円
役所費	五六〇	—	—	—	—
土木費	五六、四三七	五五、八七七	五四、一七〇	六三、八五三	五五、一二二
小學校費	六、九七二	八、七二二	一三、〇二三	一六、八八七	一、七四八
高等女學校費	二八四	六二五	六〇二	三一〇	四九五
商業學校費	—	—	—	—	—
衛生費	二、〇四五	四六四	三〇〇	一、一三	一、一五二
警備費	五、九〇〇	—	七、〇〇〇	—	七、六〇〇
産業諸費	—	—	—	一三、五〇〇	—
家屋賃貸價格調査費	—	—	二、五〇〇	—	—
屠場費	一六八	二、六〇三	—	八二八	四〇四
公園費	二、四八一	八二九	三、九六五	八、六六二	一〇、三四一
公債費	七九、〇二五	六三、四二六	五二、二六三	五〇、六三〇	五六、〇二〇
市史編纂費	三、〇〇〇	三、〇〇〇	五〇〇	二〇〇	一、〇四〇
墓本財産補塡費	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	—

土木費本年度支出額	—	—	—	—	—
市場費	—	—	—	—	—
財産管理費	—	—	—	—	—
統計費	—	七二〇	—	—	—
基本財産支消金補塡費	—	—	—	—	—
寄附金	—	—	一〇、五五六	—	—
青年會指導費	—	—	—	—	—
補助費	八、〇五〇	八、〇五〇	六、五五〇	六、五五〇	六、五五〇
雜支出	八一八	一、三〇〇	—	—	—
國勢調査費	—	四、三二一	—	—	—
社會事業費	一〇五	—	—	二五、〇〇〇	七五二
舊旭川區未拂込金支出額	—	—	—	—	—
都市計畫費	一〇、七二二	七、四九〇	八、〇五七	七、二八三	—
交通費	—	—	—	—	—
寄附金本年度支出額	—	—	—	—	—
分擔金	—	—	—	—	—
小學校費本年度支出額	一三一、〇四六	一三三、二五〇	一五四、〇九八	一九〇、八〇八	二七九、五八六
商業學校移管寄付額	—	—	一九、五〇〇	三三、〇八二	三七、六四二

傳染病豫防費	—	—	—	—	—
合計	三一八、九六一	二九二、五九七	三三四、〇八四	四一〇、〇〇七	四六〇、〇七四
通計	一、〇三六、七四九	一、〇三一、六七〇	一、〇四一、四〇二	一、〇八七、二四五	一、一四三、七四六

特別會計歲入出決算（昭和六年度豫算）

科目	昭和六年	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年
普通基本財産	二五〇、八四一円	二三五、三〇九円	三八九、七九一円	一五九、七二五円	一五二、二八二円
學校基本財産	二七、九七九	三一、六八五	八、一四八	六、〇一七	五、八五一
慈善事業資本	一、〇六六	一、〇二五	七五二	七六一	九〇九
舊土人保護費	八、五〇四	八、四二八	八、九六三	八、五五三	九、一四九
北鎭小學校及同附屬幼稚園費	一八、二三〇	一八、三三〇	一七、一二六	一七、一〇九	一六、一一二
恩賜兒童就學奬勵費	七〇二	六〇〇	一、一八九	六一〇	六七五
墓地火葬場費	一四、一九一	一一、六八一	三三、八九九	三四、三八五	七六、五一〇
牛朱別川切替費	三〇四、二〇〇	二九〇、六二五	四〇〇、〇〇〇	—	—
公益質屋費	一一〇、九一三	一三七、六三八	三五、三一〇	—	—
公會堂建設資金	五〇、〇三〇	五〇、〇一〇	—	—	—
養老院費	二、一四〇	—	—	—	—

其他	砂糖	清涼飲料	酒精及同造成飲料	酒稅
合計	二三六九九六	一八三六八	五五九八六六	二二五四五七円
	一	一	一	一
	二四五七六五	八五八三	三六八四五四	六七一七一四四
	一	一	一	一
	二〇四四三七	一〇二八七	三〇四四三五	九九七二七二円
	一	一	一	一
	一四五九四〇〇	一四二〇三	一六〇四三	一四二九一六六円
	一	一	一	一
	一七一二五九	七一〇四七九	三七九二五一	一六七九一〇円

間接國稅負擔額

相續稅	甲種資本利子稅	乙種資本利益稅	營業收入	第三種所得稅	第二種所得稅
合計	一四〇六〇四四	八七〇八	五一四六六八	三一六六二	九一四三六
	二一七九四	二六一	五二一六七	二七九八六	三八九四八
	二三九七九三	三六一	二一〇二四	二二一九四三	二六八三五
	二一九九四四	二一七二	一一八〇〇	二一九四三	二六〇二八
	二三八八四四円	六七一七一	五二一四九	二三七九四七	二三七二五六
	二四九四三五	三四〇四四	三四八四八	二六〇四三	二四九四〇〇
	一九九七二七円	一〇二八七	三四四二四三	二六〇四三七	一四五九四〇〇
	一四二九一六六円	一六〇四三	一四二〇三	一四二九一六六円	一四五九四〇〇
	一六七九一〇円	三七九二五一	三七九二五一	一七一二五九	一七一二五九

國稅負擔額

地租	市地直接國稅	合計	一戶平均負擔額	一人平均負擔額	戶數
一九六三二	四七五一七六	一〇三六四六	八二五〇〇錢四	一四八九〇	一四〇四〇三
二四九三〇四八	三四〇九五二九円	一〇七二四一八	七七四七七錢七	一四〇七二一	一四九四四四
二四九三〇四九	三四九四四三五	一〇三八六七五	七七四二錢一	一四〇七八一	一四九四四四
二四九三〇四三	三四八四三五	九四二一六五	六九八八錢五	一四二五九一	一四二五九一
二四九三〇四七	三四五六四二八円	一〇五八一〇	七七二三錢四四	一四二五九一	一四二五九一

負擔稅額

合計	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年	昭和元年
七八八〇六	七五一四三七円	八五一七八	三二一五九	三六一四七	

地方税負擔額

地租附加税	七、一四三円	七、二三八円	七、一一六円	六、九七三円	六、三五二円
營業税	一九、五四三	二三、四八七	二四、六四一	一〇、二八八	二一、一九八
雜種税	六三、五三〇	六五、二九二	六〇、六八三	六五、六九二	六八、四一六
營業收益税附加税	九〇、一六五	九一、八七二	八七、八八九	三五、五一七	六六、六三三
所得税附加税	一〇四、七〇二	一〇四、五八九	一二三、八一七	四一、六四七	七、三三六
戸數割	—	—	—	—	七七、一四〇
段別割	四、〇四〇	四、〇七五	三、九五八	四、〇〇二	三、九九二
都市計畫特別税營業税割	二、四八七	—	—	—	二、〇三三
特別地税	—	—	—	一〇	一九
家屋税	六三、〇四〇	四九、七三〇	四七、三〇〇	五一、五一三	—
其他	—	—	—	—	—
合計	三五四、六五〇	三四五、二八三	三四四、四〇四	二一五、五六二	二五三、一一三

市税負擔額

所得税割		—	—	—	三八、四四七
營業收益税割		六六、〇四八	四八、六〇一	四三、七三七	六〇、一七八
營業税割		二四、七五七	二六、七六〇	二四、二六六	二三、〇七四
地方税雜種税割		一〇二、三八一	九六、一六七	八三、三六八	一一五、一九一
特別税戸數割		二五四、六三三	二五一、一一七	二一四、一七一	一三八、九九三
特別税段別割		二〇、五六一	二〇、〇〇八	一七、七六九	一七、一九〇
貸座敷營業税		一四一	一四七	一四八	一五九
家屋税割		四九、四六九	四九、四七三	五三、〇三一	二一、二七七
合計		五一七、九九〇	四九二、二七三	四三五、四八三	四一四、五一一

交通

鐵道

鐵道は旭川市より三方に分岐し一は函館方面、一は稚内方面、一は根室方面に連絡す。

函館方面は途中留萌線と合し更に岩見澤に於て室蘭線に連絡し、札幌小樽を經て函館に達し稚内方面は名寄に於て網走線を分ち稚内に達し、根室方面は帶廣釧路を經て、根室に達する。市内には、旭川近文新旭川の三驛を有す。

尙稚内に向ふ線より新旭川に於て中越驛に達する上川線あり昭和七年十月北見と開通し石北線をなす。

旭川市より道内主要地に至る鐵道哩數を擧ぐれば左の如し。

主要地	札幌	小樽	函館	室蘭	釧路	帶廣	留萌	名寄	稚内	岩見澤	網走	根室
哩程	八六、三哩	一〇七、四	二六五、四	一四七、七	一九一、九	二二、九	五一、二	四七、三	一六〇、一	六一、〇	二〇三、九	二七六、〇

市内の四驛

本市に於ける停車場は旭川驛、近文驛及新旭川驛の三驛とし之に市外電車起點四條驛を加ふ。旭川驛は本市の核心をなす師團道路の正面にあり近文驛は市を距る西方二哩五分の地にあり、同驛より第七師團練兵場に至る鷹栖線を分岐し、新旭川驛は市の東端牛朱別に在り石北線の分岐點をなし、四條線は四條十八丁目にして對東川、東旭川方面の貨客を呑吐す。

（最近五ヶ年旭川、近文、新旭川、四條驛）

旅客小荷物發着數　（昭和三年前は四條線を含まず）

旅客乘降數

項目	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
乘車人員	九六六、〇五七人	九八六、二八四人	一、〇六九、四五六人	一、一四九、一二四人	一、〇八七、四四九人
降車人員	九四五、七〇八人	九七三、一七九人	一、〇六〇、八〇五人	一、一三六、八一〇人	一、〇七五、四〇八人
旅客運賃	八九三、二三〇円	八六四、四二四円	九二五、四八三円	九三六、五〇四円	九一一、六一九円

貨物發着數量

種別	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
發送個數	一七九、六九五噸	一五四、九五三噸	一七六、三九八噸	一八五、五六七噸	一五〇、七三二噸
到着個數	三一〇、〇一〇	三三〇、一六四	三三七、三二五	三六七、〇三五	三五九、五九七

小荷物發着數

種別	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
發送個數	一三四、九三八	一四七、七一二	一五九、九五四	一五二、九四三	一三一、〇二七
到着個數	一〇八、〇四七	一一八、五二八	一六三、五〇八	一二五、二八三	一一四、一五四

道路

管轄	路線名	經路
國道	國道二十七號線	神樂村界忠別橋より一條通に出で右折七八丁目間より左折して四條通元標に至る。此の延長十五町二十一間五分
地方費道	旭川稚内線	四條通八丁目元標より師團道路を通りて鷹栖村界を經、稚内に及ぶ。鷹栖村界迄の延長一里五町二十間
同	旭川停車場線	一條通八丁目より旭川線に至る。延長一町二十間
同	旭川根室線	四條通八丁目より十八、九丁目に出で左折して永山村境に至る。永山村界境橋迄延長二十一町四十間
準地方費道	旭川當麻線	四條通十八丁目より東旭川村界に至る。延長五町四十間
同	旭川江丹別線	大町より東鷹栖村界に至る。延長三十五町二十七間
市道		道路法に基き認定せる路線中使用開始せるもの、二十八里三十三町九間
同	東御料地線	同上未開鑿に屬するもの
本市に通する村道	牛朱別南一號線	二十丁目先より忠別川沿岸を通り東御料地に至る
同	新師團通線	南牛朱別より東旭川に至る
同	九丁目十丁目横通線	日の出橋を經て永山村方面に至る
同	中島通線	永隆橋を經て永山村に至る
同	一號通線	中島を經て永山村に至る
同		近文高台を過ぎて鷹栖村に至る

橋梁

種別	國費	地方費	市費	計
橋梁數	五		二四	二九
延長	二〇八間		五〇五間	七一三間

橋梁名

旭橋　忠別橋　永隆橋　日の出橋　大正橋
新旭橋　秋月橋　緑橋　中央橋
旭橋（昭和五年起工昭和七年竣工豫算國費一四〇万圓）

電車

市内電車　市民の翹望により之が建設は始め市營の計劃を進められてゐたが速成を期する爲め民營の企劃に變更せられ昭和三年旭川市街軌道株式會社創立せらるゝや直に起工昭和四年十一月第一次計畫路線を開通し、昭和四年十一月更に師團線を開通し現在に至りたるが牛朱別川切替工事完成並に夫に伴ふ都市計畫の進捗と共に各路線の延長線並に比布、鷹栖、神樂等の郊外線に着工の豫定である。

軌道亘長（復線）　一二・二粁
使用車輛　電車二六輛數　自動車六輛
乘車人員　二、九三五、〇七〇人（昭和五年）

市外電車　大正十五年三月旭川電氣軌道株式會社創設せられ市外線を起工昭和二年一月旭川市四條十八丁目より東川西三號に至る九哩七分を開通し昭和四年十二月新旭川追分より東旭川市街地に至る二哩三分を開通し更に之を延長し昭和五年十二月景勝旭山公園に至る二哩〇分を開通し現在に至る。

軌道亘長　二二・二粁（東川線　一五、五粁　旭山公園線　六、七粁）
使用車輛數　客車八輛　貨車八輛
乘車人員　三七一、四一一人（昭和五年度）
取扱貨物數　二三、六一五瓲（〃　）

諸車調

（昭和五年末）

客馬車	荷馬車	自轉車	オートバイ	乘用自動車	貨物自動車	計
二七	五一三	五、一〇五	八二	九七	四二	五、八六六

通信

郵便局 旭川市本局の外市内三等郵便局は十一局にして三等局中電信取扱局は一條東、大町師團前の三局、電話通話所は本局、近文二線局の二局、公衆電話は八箇所に設置されてゐる。

郵便、小包、電報

種別／年別	大正八年	大正十三年	昭和元年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
通常郵便 引受	二、七四〇、五二三	一〇、〇二〇、六五六	九、四八五、六九四	一〇、九六二、五一六	一二、四九〇、七六七	九、五二〇、六五二
通常郵便 配達	二、七八〇、三〇五	七、六〇七、八一二	八、九八七、三九七	九、九九一、〇七一	一〇、七六六、四〇一	九、七五五、〇一七
小包 引受	一三三、一六七	一三六、〇六二	一五八、一一九	五七、四九九	五九、六八〇	五九、九四八
小包 配達	一九二、四五七	二〇一、〇一〇	一三〇、二五三	二一七、四三五	二一九、〇三九	二〇八、八二五
電報 發信	一九一、〇七三	一九九、四〇三	一九四、九一八	一七四、二一八	一七三、六七五	一五三、八二六
電報 着信	二七五、二七〇	二〇九、六六九	二〇一、九〇四	二〇五、五一三	二〇三、七〇	一七九、〇九四

電話 札幌電話局旭川分室は新廳舍竣成と共に昭和六年六月全道に先驅して自動式を採用してゐる。

道外通話は青森、弘前、盛岡、仙臺、各市及昭和七年一月より東京、小田原、富山市と直通するに至つた。

現在電話加入	二、三三〇
加入者平均一日呼數	二五、〇二四回
市外通話區域數	三五四
市外一日平均通話數	三、〇七三回

ラヂオ 現在本市に於けるラヂオ聽取施設者數は七二五に及ぶ。本市放送局は經費三十五万圓を以て本年四月五條二十一丁目朝日小學校近傍一千坪に起工のことに決定し十一月には開局の豫定である。

電力

無限の電力 拓殖の進展に伴ひ人口稠密の度加ふると共に供給燈數逐年增加し農村電化に依る農業用電力事業興隆に因る作業電力の增量等將來愈々電力の需要の增大を來すべきも本道就中當地方は近く水量豐富の諸川水源を控へ無限の電力を藏し然も之は巨大の施設工費を礎石として全く整備せる本邦電業界有數の北海道電燈株式會社に依て無盡の動力となつて配電せられ伸脹の途にある本地方產

業を助長するのみならず本市を以て將來工業都市なるべしとなす主要因である。

北海道電燈株式會社旭川事務所

旭川市四條通十丁目右十號
電話 四一一五番

明治三十九年創立の旭川電氣株式會社を大正六年二月富士製紙株式會社に併せ會社の經營となし大正八年同社より富士電氣株式會社を分離創立し本社を東京に置き本市地方を旭川出張所の管轄とし爾來道内に散在せる諸電業會社を合併し大正十年十二月北海道電燈株式會社と改稱せるものである。現在資本金五千六百万圓で電力供給區域は道内七箇國に亘り昭和元年秋田水力電氣株式會社を合併しその事業網を更に東北地方に延長するに至つたのである。

本道産業の進展に伴ひ累年電力の供給を增加し業績逐年向上の一途を進みつゝあるが同社創立以來本道拓殖の振興並に産業開發に貢献するところ甚大なるものがある。同社及同社事業の本據とする旭川事務所の概容次の如くである。

事務所名及所在地

旭川事務所	旭川市四條通十丁目右十號
東部事務所	釧路市眞砂町一二九
岩見澤事務所	岩見澤六條西二丁目
秋田事務所	秋田市中谷地町五六

旭川事務所管内發電所發電力所在地

上川發電所	九、四〇〇KW	上川郡上川村三九線一二一八
安足間發電所	六、六〇〇KW	上川郡上川村字安足間一六七八
愛別發電所	五、一〇〇KW	上川郡愛別村原野二一九九
奔茂尻發電所	二、六〇〇KW	空知郡蘆別村字奔茂尻九三〇
野花南發電所	五、一〇〇KW	空知郡芦別村字野花南四八六ノ二
忠別川發電所	一、四二五KW	上川郡東川村字忠別原野一二九
志比内發電所	一、三〇〇KW	上川郡神樂村字上川御料上忠別
漁川發電所	八四七KW	千歳郡惠庭村字盤尻七四三
仁字布川發電所	五一三KW	上川郡美深字ビウカ原野九八九
香深散宿所	四五KW	禮文郡香深村字トンナト八四七
枝幸散宿所	二〇KW	枝幸郡枝幸村大字枝幸村字イノコタンポ

管内變電所

名寄變電所　瀧川變電所　栗山變電所　瀧ノ澤變電所
士別變電所　砂川變電所　由仁變電所　東川變電所
旭川變電所　奈井江變電所　夕張變電所　當麻變電所
三條變電所　美唄變電所　北村變電所　妹背牛變電所
富良野變電所　文珠變電所　幌向變電所　深川變電所
沼田變電所　岩見澤變電所　江別變電所　美深變電所
惠比島變電所　幾春別變電所　札幌變電所

管内送電線路亘長

七六二粁一七

旭川市内電氣需給狀況

	需要家數	燈數、台數	燭光數、馬力數、キロワット
電燈	一三、九〇一	六八、一五〇灯	一、三〇五、〇八八燭光
電力	六二〇	六七四台	二、一〇九馬力
電熱	一九二	四三〇台	四〇六、六五五キロワット

旭川驛　五〇K
旭川工場　一六〇K
旭川市街軌道株式會社　二五〇K

所長　堀內弟助

谷田部羊次郎　水上千濤　佐々木博
小田部毅　鈴木恒三　田代隆亮
小松重次郎　水本龍太郎

商業

概況　本市の商權範圍とするは本市を中心とせる本道東北部鐵道網の沿線を網羅す。即ち本市は北は宗谷線により稚内に至り、東は名寄線により網走に延び、南は富良野線を延びて帶廣、釧路に至り、東南は近く北見に達する石北線等と各線の中心地にしてその沿線六ヶ國に亘る地域は本市の商權圈内とするものである。之等本道の寶庫と稱せらるゝ地を背景とし消費地としその中心として天惠の地位を占むる本市の商業はその豐富なる天産資源に基く諸生産業即ち製材精米釀造業等の異常なる進展と共に内地府縣より仰ぐ加工製品たる飲食衣料雜貨肥料等の中部北海道に於ける中繼的供給地として累年取引殷賑に趨き歐州大戰時代をその頂點とし、本市の經濟機關の完整を見、中部北海道に於ける經濟的中心たるの體容はこの時全く整つたのである。然も廣汎なる商勢圈、その天産の無限、交通の要衝、動力の供給豐富等々將來の多望なること本道先進都市を凌ぎ之本市が工業都市としての生命躍動しつゝありとなすの所以の存する所である。

物資呑吐の狀況

年次	移出	移入	合計	移出	移入	合計
大正十四年	一六九、九〇六噸	三四〇、四一五噸	五一〇、三二一噸	四三、一五六、八五七円	五三、六三六、四七円	九六、七九三、三三四円
昭和元年	一六三、一五三	三三〇、八〇九	四九二、九六二	三七、六五四、三八二	四七、四二九、六八七	八五、〇八四、〇六九
昭和二年	一六四、五三四	三四八、五五三	五一三、〇八六	三五、一三九、五〇〇	五三、九〇一、二七一	八九、〇四〇、七七一
昭和三年	一七三、六四六	三五八、一三一	五三一、七七六	三七、七一五、一四二	四九、八七一、二三三	八七、五八六、三七五
昭和四年	一九九、一五四	三八六、六〇五	五八五、七九九	四二、一四四、七三五	四九、四二九、二三九	九一、五七三、九七四
昭和五年	一七二、三四一	四一三、二六九	五一二、六三〇	三三、〇九三、二六三	四四、四五九、九四七	七七、五五三、二一〇

主要商品消流狀況

米　本道第一の米産地たる上川平野に圍繞せらるゝ本市は上川米の集散市場として之を集中し殆ど本市に於て精白せられ各地方に仕向けるのである。從て米産の多寡、農村經濟狀態の良否が本市經濟狀態に影響し米が本市の經濟界の動向を決定する。その移出入は左の如く生産の大部は道内に於て消費せられるが品質の向上と共に内地市場に進出し東北各縣關西地方等に販路を擴張し將來需要を增大する趨勢にある。

年次	移出	移入 近村出廻	移入 驛着	移入 合計	通計
大正十四年	二九一、一四〇石	三一九、八七七石	一四一、五一六石	四六四、三九三石	七五五、五三三石
昭和元年	二六八、三九	二〇七、二八〇	一一三、五四四	三二九、八二四	五八八、〇五三
昭和二年	二三七、八三一	二三六、八六九	一五二、二二五	三八九、〇八四	六二六、九一五
昭和三年	三三三、五二七	三二六、七四〇	一二一、四八六	四四八、二二六	七八一、七五三
昭和四年	三二四、六五五	二八八、三一七	一一〇、七〇〇	三九九、〇一七	七二三、六七二
昭和五年	二八五、六五八	三〇一、〇一七	一三八、一四六	四三九、一六三	七二四、八二一

木　材　原材は蝦夷松、椴松最も多く楓、楢、栓が之に次ぎ石北線方面及北見十勝國より之を仰ぎ本市を中心に製材せられ集散し世界大戰を劃し異常の進展を見せ來りたる本市木材業は打續く不況に及ぼされたる影響少なからざるものありたるも近時内地市場或は濠、歐洲等に販路を開拓しつゝあり更に景氣の轉回と共に内外に各種建築工事其他起業せらるゝと共に最も活況を示すべき本市の重要商品である。

種別	昭和三年 移出	昭和三年 移入	昭和四年 移出	昭和四年 移入	昭和五年 移出	昭和五年 移入
角材	九三七噸	二五、一三七噸	二、三五一噸	一九、八四四噸	二、一一八噸	二三、五七六噸
丸太材	二、四二七	四五、八五八	一、六六六	四四、五〇四	四、三七三	四二、一八〇
挽材	二〇、〇五四	六、一三三	一五、一〇三	四、二六五	一五、六八四	四、九〇七
其他木材	一、一九三	二、二七六	三、〇一九	三、八四一	二、五七〇	五、一三六

清　酒　本市に於ける清酒釀造業は明治二十四年笠原氏釀造の銘酒笠の雪に始まり爾來氣候と水質が酒造に好適なる爲め逐年長足の發展を遂げ今日造石高に於てその芳醇に於て北海の灘として全道に冠たるに及んだのである。原料米は從來朝鮮、播洲、越中、越後米等が用ひられてゐたが近時上川米の品質向上に伴ひ同米を以て優良品を釀造し得る結果上川米を用ふる向多く名實共に旭川酒の聲譽を擧げてゐる。然も道産品愛用の經濟的觀念の發達と共に今日品質そのものを以て内地品の移入を抑壓し得るに至りたるはその益する所只に本市に止まらず酒造稅が本道拓殖財源の根幹をなすに思至らば本道の進展上又嘉すべき事である。

現在酒造戸數十一（別項參照）その釀造高年五万石に至り全道に比を見ない。

燒　酎　規模の大と設備の完整を誇る合同酒精株式會社の製産にして年造石高三万石に達せんとし製品の優良なるは内地品を品質的に壓倒しその移入を防遏し全道市場を獲得し更に道外に進出し

つゝある現況に依て明らかに立證せられる。

原料たる馬鈴薯、玉蜀黍等すべて近村に仰ぎ將來の發展を最も期待される。

年次	移出 清酒	移出 燒酎	移出 麥酒	移入 清酒	移入 燒酎	移入 麥酒
昭和元年	二九、〇〇〇石	一一、五二九石	九、六四一箱	三、五三五石	一、六五七石	二三、六一九箱
昭和二年	二七、七七四	五、四二三	七、三二二	四、一八七	三、三二七	二一、六二二
昭和三年	二五、〇〇〇	一八、〇〇〇	九、五二九	四、二八〇	二、〇〇〇	一九、九七一
昭和四年	二五、四二〇	二五、六八三	六、二〇二	三、二二二	二、七九二	一七、六二九
昭和五年	一九、九二五	二五、五五〇	六、三一五	二、五三七	二、四七六	二一、一六〇

味噌、醤油　明治二十五年下村長藏氏に依り同釀造を創始せられ爾後地の利によつて進展し現在製產者十戸を數へるに至り釀造高醤油にありては年二万石餘味噌に於て六十餘万貫に達す。

いづれも品質に於て何等內地品に遜色なきにも拘はらず年々移入量少なからず就中醤油に於て年五千石を下らざる移入を見るは遺憾に堪へないが消費者の經濟的自覺に依て近き將來に於て之が完全なる驅逐を見ん事を期待するものである。

年次	移出 味噌	移出 醤油	移入 味噌	移入 醤油
昭和元年	五二〇、三八〇貫	七、四八一石	一七〇、二二〇貫	四、四四七石
昭和二年	五〇一、五三〇	七、二六〇	一三〇、八六〇	四、六九九
昭和三年	六一〇、〇〇〇	八、〇〇〇	一二〇、〇〇〇	五、二〇〇
昭和四年	四九、二三〇	八、六四九	一五四、六九〇	五、二六八
昭和五年	三七八、三八〇	六、三七〇	二二三、五二〇	四、八三七

最近五ケ年間平均卸價格比較表

品名	銘柄	單位	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
玄米	旭川檢三等	一石	三三・六一円	二九・五四円	二五・二七円	二四・七七円	二三・〇三円
白米	同	同	三七・二四	三二・五八	二七・一一	二六・九八	二四・九四
裸麥	三等	百斤	七・四三	七・〇四	七・〇八	七・〇〇	六・一四
小麥	同	同	八・二九	七・五六	八・一七	七・二七	六・一〇
大豆	同	同	七・四四	七・二七	七・二七	七・五〇	五・二四
小豆	同	同	七・五七	八・二六	一〇・二七	一〇・二三	七・四一
燕麥	四等	一石	八・二四	六・七七	六・〇三	九・一五	六・五六

青豌豆	三等	百斤	一四・八三	一〇・二四	九・八五	七・六二	五・七二
長鶉豆	同	同	七・〇八	七・〇八	八・八四	一〇・六九	六・〇五
澱粉	精粉	百封度	八・二二	七・三〇	八・四一	八・六七	六・二四
菜種	洋三等	百斤	九・六六	八・一七	一〇・〇七	九・八六	六・六〇
亞麻種	三等	同	七・一八	六・七五	七・一八	八・一四	六・三七
玉蜀黍	同	同	五・三九	五・三三	五・二四	六・〇一	四・七七
馬鈴薯		十二貫	二・一三	二・三〇	二・〇九	一・九六	一・七三
清酒	地上古酒	百石	一〇七・三三	一一〇・二九	一一〇・〇〇	一一〇・〇〇	一一〇・〇〇
ビール	札幌	四打	一九・二五	一九・一七	一八・〇八	一八・三〇	一八・三〇
味噌	佐渡㊅	十貫一樽	七・四五	七・二〇	七・一三	七・五〇	七・一〇
醬油	龜甲萬	九升入一樽	五・九六	五・八六	五・八三	五・五九	四・九七
同	地大金印	一八升五合樽	五・七〇	五・四六	五・三九	五・三〇	五・一〇
砂糖	精糖BB	百斤	二六・一三	二五・九四	二三・七二	二四・二四	二一・六一
小麥粉	白星	一袋	五・〇〇	四・七〇	四・四九	四・五七	四・〇五
饂飩	地雪印	五十入一箱	四・二一	三・七八	三・四八	三・三七	二・九三
鹽鮭	北見	十貫	一四・七五	一四・六六	一六・〇一	一一・六五	八・九七
鹽鱒	樺太	同	八・〇三	七・二七	八・四七	七・三二	六・九二
開鱈	極上無頭	同	一六・一〇	一四・八二	一三・四八	一四・六三	一三・九三

鰹節	伊豆改良本節	同	一三八・四七	一二九・三四	一二六・五五	一三三・九二	八四・七九
黑胡麻		一斗	三・五三	三・三七	三・六八	三・六三	二・六六
福神漬	東京	十二貫一樽	七・九三	八・〇六	七・九五	七・三三	六・六三
石油	チヤスター	一函	八・一七	七・六三	七・三六	七・三五	七・五二
牛肉	牝骨付	十二貫	四二・七〇	三五・九四	三六・五六	三九・一七	三七・八七
豚肉	骨付	同	三三・一三	二八・五五	三三・二三	二六・四三	二七・四七
銘仙	秩父	一疋	一九・〇一	一六・九六	一七・三三	一四・七二	一〇・五九
モスリン	三十番薄色	七十二尺一反	一三・七〇	一四・一二	一四・一四	一五・〇一	一三・六五
製綿	判綿	十二貫	六三・二四	五三・一五	五四・八五	五四・二三	四〇・四六
松角	一等	百石	四七三・七五	四六〇・八三	四六三・七五	四八四・五八	四〇〇・四一
栓角	同	同	五六九・一七	六一五・六七	六〇七・〇八	六四二・九二	五四〇・〇〇
檜角	同	同	五一九・一七	五一三・五八	五三〇・四一	五五五・八三	四九七・五〇
挽材	松並四分	坪	一・二三	一・二五	一・二三	一・二六	一・〇五
下駄棒	栓一等	同	一、二三二・五〇	一、二七五・〇〇	一、四〇四・一七	一、五〇八・三三	一、三〇〇・〇〇
丸鐵	三分	十貫	四・七六	四・二二	五・二七	五・〇三	三・六七
胴鰊		百石	二、五八八・八三	二、一八〇・三三	二、二二四・四四	二、二三三・五〇	一、六六四・四五
笹目		同	二、三七一・八六	二、一〇九・一九	一、九六八・二七	二、〇六一・五〇	一、四六六・四〇
大豆粕		一枚	二・六三	二・三〇	二・四〇	二・三七	一・九八

木炭	檜特等	十貫一俵	一・八八	二・〇三	一・九一	一・八〇	二・〇〇
薪	檜	百本一敷	一〇・六五	一一・〇〇	一一・〇〇	一一・〇〇	一〇・九二
石炭	空知一等	一噸	一三・〇五	一三・〇六	一三・九七	一四・〇五	一二・五二
コークス	並	同	二五・四九	二七・二五	二七・七九	二六・五〇	二六・三八

最近五箇年卸賣物價指數比較表（指數換算基準ハ大正十二年一月）

品種平均	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
穀菽蔬菜類	一一三・九六	一〇六・一八	一〇九・五五	一一四・五六	八七・九〇
飲料調味料類	一〇〇・五四	九八・三五	九八・〇七	九六・〇七	九一・六四
肉類及魚類	九六・一三	九二・八三	九三・六〇	九二・八四	七九・九一
衣料品類	一〇五・一三	九二・〇四	九〇・八三	八二・六八	六五・三六
建築材料類	八七・六四	八三・四〇	八七・六一	八九・七八	七三・六五
肥料飼料類	一〇二・三三	八六・二七	八二・三〇	九二・〇九	六九・五八
雜品類	九五・六六	九一・三五	九一・五三	八九・九二	八二・七六
總平均	一〇〇・三六〇	九四・〇九〇	九四・八八〇	九五・二八	八〇・二三

商工業者業態別統計

營業別＼年次	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
物品販賣	二、三九三戸	二、二〇四戸	二、〇六八戸	二、一九四戸	一、九六四戸
金錢貸付	一〇一	七二	五九	五一	二四
運送	三八	五一	四五	四四	五二
請負	四六三	四〇二	四〇八	四〇五	三九九
代理	二三	一一	一四	二	一七
周旋	四二	二四	三九	五〇	五八
料理店	一〇二	一五五	二一二	一三二	一四一
飲食店	一三三	一三七	二二六	一二六	一八三
間屋	六七	一二	一三	一四	一四
質屋	三六	四二	三六	三六	三一
製造	三二	三六〇	三五一	三二一	三三六
銀行	八	七	六	六	七
旅人宿	一一	九三	一〇五	一〇二	九七
其他	二二七	五一九	六六	一三六	四三一
合計	四、〇六五	四、〇八九	三、七〇八	三、六一九	三、六五四

商工機關

旭川商工會議所

本市を中心とする地方の開發進捗と第七師團設置、鐵道開通等に依て誘致されたる本市商工業の進展に伴ひ之が指導統制機關として商工會議所の設立の要は早くより唱導せられ明治四十一年先づ之に代る旭川實業協會創立せらるゝや同協會は會議所設立の緊要なるを當路に向つて要望を續け大正八年八月六日に至り要請容れられ設立認可を得るに至つたのである。

爾來商工業の發展に資すべき諸問題に關して鋭意研究を怠らず、本市經濟界の機構愈殷賑複雜を告ぐるに至り、交通上、金融上、其他商工奬勵諸施設等本市經濟界を進展せしむべき積極的方策を講じ着々その實績を擧げ本市のみに止らず中部北海道の商工機關として存立の意義を高めてゐる。

現在役員(議員は別掲)及有權者竝に經費の概況次の如くである。

旭川商工會議所役員

會頭　野口合資會社代表者　岡田重次郎　　常議員　藤田猪三夫

副會頭　鶴間禮藏　　同　堀川太郎治

常議員　高山孝次　　同　成田篤次

同　西村末吉　　同　福居清兵工

同　松浦長藏

會議所選擧權者被選擧權者數及經費

年次	選擧權者	被選擧權者	一箇年經費
大正十三年度	六七三	四二六	二二、四九四円(豫算)
大正十四年度	六九七	四一三	二二、九二〇、〇〇
昭和元年度	六六八	四四二	二一、四〇五、五〇
昭和二年度	八三六	四三三	二〇、四七〇、〇〇
昭和三年度	九七五	八九一	二〇、五〇九、一三
昭和四年度	九八八	九一三	二一、二三一、〇〇
昭和五年度	九五八	八七〇	二五、九三八、七四
昭和六年度	八一七	七五二	二一、三〇〇、〇〇

旭川商工組合聯合會

商工業の進歩に伴ふ不當競爭を避け各自の利益を一致せしむると共に進展を狙害する商慣習を改善する等同業者間の向上發展を圖らんとする市内六十餘準則同業組合を聯合加盟せしめ本市商工業の振興を目的として大正六年設立せられたもので設立以來旭川商工會議所と提携し鋭意その目的達成に努めてゐる。

現在役員氏名左の如くである。

幹事長	下村正之助	同	西澤德彌
副幹事長	野島民助	同	薄島金次郎
幹事	岡田重次郎	同	塚本喜一郎
同	瀧波勘四郎	同	伊藤春吉
同	小松源吾	同	中島恒造
同	松浦長藏	同	福田秀吉
同	山田米太	同	廣瀬外吉
同	湊四郎	同	西田幸次郎
同	島垣松六		

準則同業組合（旭川商工組合聯合會加盟）

名稱	所在	組合長	組合員數	設立年月
旭川酒造組合	五ノ七右三	岡田重次郎	一九	明治三三・九
旭川旅館組合	宮ノ八右一	布目喜藏	五一	三二・一
旭川古物商組合	四ノ四右五	湊四郎	四五五	三三・一
旭川藥業組合	一ノ十八左九	前田和一	九一	三五・一
旭川菓子商組合	二ノ八右一	福田秀吉	一一八	三六・一
旭川組合銀行	二ノ八左四	拓殖銀行支店	五	三九・五
旭川市質屋業組合	中鳥常盤町	福井俊一郎	三一	三八・六
旭川木材業組合	四ノ十左一	瀧波勘四郎	三八	四一・一
旭川銅鐵商組合	一ノ十一右四	伊藤春吉	一九	四二・一
旭川醬油釀造組合	五ノ七右三	下村正之助	二一	四三・五
旭川擔小賣業組合	二ノ十六右七	笠井龜太	一〇三	四三・二
旭川薪炭商組合	一ノ十右七	佐々木八郎	六一	四四・一〇
旭川靴業互勵組合	一ノ七左六	澁谷又三郎	二一	四五・一
旭川大工組合	七ノ十三左三	平原榮作	一一五	大正二・一

旭川西洋洗濯業組合	二ノ十六左一	清水歡二	一三	大正三・一	
旭川建具指物親友會	一ノ十二右五	中島恒造	五〇	五・二	
旭川石炭商組合	宮ノ十三右一	塚本喜一郎	七〇	五・三	
旭川乾物商組合	三ノ七左十	島垣松六	六二	五・一	
旭川吳服太物商組合	二ノ八左一	松浦長藏	四二	四・二	
旭川履物商組合	三ノ八右七	大原正治	四七	六・二	
旭川洋服業組合	四ノ七右十	薄島金次郎	四三	六・二	
旭川染物業者組合	一ノ六左六	伊良原要	二〇	六・三	
旭川銅鐵板商工組合	一ノ六右五	藤川源平	二二	七・三	
旭川小間物化粧品卸商組合	二ノ十三右十	山本龜次郎	一一	七・六	
旭川肥料商組合	一ノ十右一	旭川肥料株式會社	二一	七・七	
旭川陶器商組合	一ノ十左三	小松源吾	九	七・一〇	
旭川人力車業組合	一ノ八右二	作田米松	三五	七・一	
旭川市飲食店營業組合	四ノ七左九	安江新平	一八六	八・九	
旭川自轉車業組合	一ノ五右五	佐藤音次	三八	九・一	
旭川製綿業組合	三ノ十三左五	旭川製綿株式會社	一八	九・二	
旭川鳶職組合	四ノ五右五	土田源次郎	二七	九・五	
旭川荒物雜貨商組合	四ノ十五左一	西田幸次郎	五五	九・七	

旭川精米業組合	一ノ十六左八	福居清兵工	三二	明治四〇・一	九・九
旭川米雜穀商組合	一ノ十二右八	野島民助	三〇		
旭川馬具商組合	五ノ七右十	河野有吉	一一	大正一〇・五	
旭川土木建築請負業組合	四ノ五左八	鶴間禮藏	四九	一〇・六	
旭川市公設市場販賣人組合	三ノ八右四	池田兼次郎	三六	一〇・一	
旭川市下駄製造業組合	一ノ五右一	品田熊吉	三四	八・九	
旭川鐵工業組合	三ノ十九左一	半田長右衞門	五三	一一・一	
旭川北部白米商組合	大町三丁目	今野富藏	一九	一一・五	
旭川印刷同業組合	一ノ六右十	西島太十	三一	一一・一	
旭川白米商組合	五ノ十四右八	廣瀨外吉	六七	一三・一	
旭川洋物商組合	四ノ八左一	大塚角太郎	二六	一三・一	
旭川海產果實商組合	二ノ七左十	笹森乙藏	二一三	一三・三	
旭川蔬菜果實商組合	四ノ八右二	清水芳一	一七	六・六	
旭川履物卸商組合	二ノ六右三	坪田與三吉	六	一一・二	
旭川營利職業紹介事業組合	五ノ九右二	長谷川德治	一三	昭和二・一	
旭川漆器家具商組合	一ノ十一右四	西澤德彌	二九	五・二	
旭川左官業組合	七ノ十三左一	福田喜一郎	二四	大正六・一	
旭川運搬業組合	八ノ九	前野與三吉	五〇	昭和二・一	

旭川牛乳販賣組合	九ノ十五右六	野川安治	五〇	二・六
旭川時計商組合	一ノ五左五	佐藤音次	二八	大正一二・一
旭川紙文具商組合	二ノ九右一	山田米太	二一	一二・一二
旭川茶商組合	一ノ八右二	齋藤仙次	一八	昭和四・一
旭川肉商組合	三ノ九右六	山下伊助	三六	大正元・一
旭川料理店組合	三ノ六右十(卅)見番	辻廣禎介	五五	明治三三・一
旭川家具製作組合	三ノ九右五	青山千次郎	一八	昭和二・三
旭川看板塗裝組合	三ノ十一右四	山崎勝美	二八	四・三
旭川浴場組合	五ノ八左二	橋本清藏	四五	明治四〇・一
旭川青果荷受組合	四ノ八右二	清水芳一	七	四・一
旭川農機具商組合	一ノ九左三	藤瀨清二	二〇	六・一

昭和七年二月末現在會社本店業態別調

業態別＼組織別	株式會社 社數	株式會社 總資本金	株式會社 拂込資本金	合名會社 社數	合名會社 資本金	合資會社 社數	合資會社 資本金	合計 社數	合計 總資本金	合計 拂込資本金
物品販賣業	九	二、七〇五、〇〇〇	八五九、〇〇〇	五	九八、〇〇〇	八三	三三八、五五〇	九七	三、一三一 五五〇	八五九、〇〇〇
金融仲介代辯證券賣買業	五	一、六三〇、〇〇〇	四一五、〇〇〇	三	九八、〇〇〇	一〇	二三九、三〇〇	一八	一、九六七、三〇〇	四一五、〇〇〇
製造業	一〇	三、一九三、〇〇〇	二、一三九、〇〇〇	—	—	一四	三九七、八〇〇	二四	三、五九〇、八〇〇	二、一三九、〇〇〇
無盡業	二	五〇〇、〇〇〇	九七、二五〇	—	—	—	—	二	五〇〇、〇〇〇	九七、二五〇
倉庫業	一	一〇〇、〇〇〇	七九、〇〇〇	一	六〇、〇〇〇	二	一五〇、〇〇〇	四	三一〇、〇〇〇	七九、〇〇〇
問屋業	一	六〇〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇	—	—	—	—	一	六〇〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇
農林業	三	八三、五〇〇	二三、五〇〇	四	三三三、五〇〇	四	三〇、五〇〇	一一	四四七、五〇〇	二三、五〇〇
請負業	一	五〇〇、〇〇〇	一七五、〇〇〇	一	一〇〇、〇〇〇	四	二一〇、五〇〇	六	八一〇、五〇〇	一七五、〇〇〇
印刷業	—	—	—	—	—	二	八、〇〇〇	二	八、〇〇〇	—
運送業	五	三、七二〇、〇〇〇	二、六六五、〇〇〇	—	—	九	八一、二〇〇	一四	三、八〇一、二〇〇	二、六六五、〇〇〇
木材業	三	一、四〇〇、〇〇〇	九二五、〇〇〇	—	—	七	二七六、〇〇〇	一〇	一、六七六、〇〇〇	九二五、〇〇〇
新聞業	—	—	—	—	—	二	六、〇〇〇	二	六、〇〇〇	—
旅人宿業	—	—	—	—	—	一	二、〇〇〇	一	二、〇〇〇	—
雜業	二	一五四、〇〇〇	三六、三五〇	三	一七、〇〇〇	七	二八、〇五〇	一三	一九〇、〇五〇	三六、三五〇
合計	四二	一四、五七六、五〇〇	七、五五四、一〇〇	一七	七〇六、五〇〇	一四五	一、七五七、九〇〇	二〇四	一七、〇四〇、九〇〇	七、五五四、一〇〇

昭和七年二月末現在會社支店業態別調

業態別＼組織別	株式會社 社數	株式會社 本店總資本金	株式會社 本店拂込資本金	合名會社 社數	合名會社 本店資本金	合資會社 社數	合資會社 本店資本金	合計 社數	合計 本店總資本金	合計 本店拂込資本金
物品販賣業	四	五、〇六〇、〇〇〇	三、五〇〇、〇〇〇	三	四〇四、〇〇〇	二	七七、〇〇〇	九	五、五四一、〇〇〇	三、五〇〇、〇〇〇

株式會社

商號	業種	資本金拂込額	設立と所在	社長	專務常務	電話
今井釀造株式會社	釀造業	一百万圓 三十六万圓	大正九年四月 四ノ二左十	今井雄七	今井久平	二、〇五四
博善株式會社	典禮儀式用裝飾貸付業	十二万圓 三万圓	大正十二年十二月 三ノ九左七	瀧波勘四郎	瀨古退助	三、五八六
北海化製株式會社	化製肥料製造業	五千圓 五千圓	昭和二年三月 南牛朱別	田邊安平		二、三四四
北海木材株式會社	木材製材販賣建築請負業	四十万圓 三十万圓	大正二年三月 一ノ西四	下村正之助		二、四五六
北海製藥株式會社	賣藥、藥品製造藥草栽培販賣業	十万圓 四万圓	大正九年二月 二ノ十三右八	能代慶治		三、五一七
中央運送株式會社	運送業	十万圓 二十万五千圓	昭和二年十月 一ノ八左六	松家圓次郎	信田重	三、一三二 三、一三三 二、〇三二 二、〇三三
株式會社井內醬油店	釀造業	十万圓 二十万六千圓	昭和五年十月 一ノ十三左一	井內カヨ		三、九九一
株式會社北信社	金融仲介代理業	二万圓 五千圓	昭和七年一月 四ノ七左二	浦本藤吉		二、三〇八
株式會社中央堂	物品販賣諸官廳用達	一万五千圓 一万五千圓	大正十五年一月 三ノ七右十	花輪武平		二、〇六二 三、六八二
株式會社大一花輪鐵店	金物、度量衡器販賣、官廳請負	六万圓 六万圓	昭和四和五月 二ノ八左十	花輪武平		二、〇六二 三、六八二
株式會社田中木工場	造材製材業	五十万圓 二十五万圓	大正七年十月 一ノ一右一	田中喜代松		二、三五〇
株式會社山田屋商會	金融仲介保險代理信託業	五十万圓 十二万五千圓	大正七年七月 四ノ九左十	山田新		二、九七七
株式會社山カ山本保壽堂	賣藥、藥品化粧品販賣業	二十万圓 五万圓	大正十年八月 三ノ八左一	山本龜次郎		二、一五四
株式會社丸カ三箇商店	荒物雜貨精米機械販賣業	百万圓 二十五万圓	大正九年二月 三ノ十右一	三箇元次郎	三箇勝次郎	二、〇一一 二、〇二二 二、〇二三
株式會社丸七煖爐製作所	各種ストーヴ製作業	五万圓 一万五千圓	大正十年十月 二ノ一右二		齋藤治郎作	三、六二四

金融仲介代辨證券賣買業	一	一	七	二〇四、六八二、五〇〇	一	一	一	三、〇〇〇	一	七	二〇四、六八二、五〇〇	三、〇〇〇
銀行業					二九、六〇二、五〇〇							二九、六〇二、五〇〇
製造業	二	四、二〇〇、〇〇〇			二、二五〇、〇〇〇	—	—	—	—	二	四、二〇〇、〇〇〇	二、二五〇、〇〇〇
旅人宿業	一	六〇、〇〇〇			六〇、〇〇〇	—	—	—	—	一	六〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇
電氣業	一	五五、三〇五、〇〇〇			三四、三九五、〇〇〇	—	—	—	—	一	五五、三〇五、〇〇〇	三四、三九五、〇〇〇
無盡業	一	二四〇、〇〇〇			六〇、〇〇〇	—	—	—	—	一	二四〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇
運送業	一	一、四五〇、〇〇〇			一、四五〇、〇〇〇	—	—	—	—	一	一、四五〇、〇〇〇	一、四五〇、〇〇〇
合計	一七	二七〇、九九七、五〇〇			一七一、三一七、五〇〇	三	四〇四、〇〇〇	三八〇、〇〇〇	二三	二七一、四八一、五〇〇		一七一、三一七、五〇〇

株式會社旭川便利社	勞力運搬請負修繕修理物品販賣	二万五千圓	六千三百五十圓	昭和六年五月五ノ十六右一	小國新吉	
株式會社旭川三條魚菜市場	魚菜販賣業	十万五千圓	二万五千圓	昭和四年八月三ノ十三左一	下村正之助	
株式會社三好屋呉服店	百貨店業	二十万四千圓	十万七千圓	昭和三年十月四ノ七右十	中村利三郎	
上川倉庫株式會社	倉庫業	十万七千九千圓	二十万二万三千三百五十圓	明治三十一年五月宮ノ十一	大谷岩太郎	松家圓次郎
拓殖無盡株式會社	無盡業	二十万二万三千三百五十圓	大正元年十月三ノ十左三	大正九年四月一ノ十右一	松岡陸三	佐野良造
丸肥旭川肥料株式會社	肥料加工販賣業	一百万圓二十五万圓	五十万圓三十七万五千圓	昭和五年一月六ノ十三左一	笠原定藏	世木澤藤三郎
松岡木材株式會社	木材製材販賣請負業	五十万圓三十七万五千圓	一百十一万圓一百十一万圓	大正十二年五月一ノ十一左七	松岡源之助	眞弓政一
合同酒精株式會社	酒精燒酎洋酒製造販賣業	一百十一万圓一百十一万圓	六十万圓十五万圓	大正十三年一月六ノ六	野口喜一郎	堀末治
旭川市場株式會社	魚菜販賣業	六十万圓十五万圓	六万五千圓	大正十二年五月南四ノ二十一	笠原定藏	島田守馬
旭川造林株式會社	造林業	六万五千圓	一百五十万圓一百五十万圓	昭和二年五月宮ノ九左五		武田貞平
旭川運送株式會社	運送業	一百五十万圓一百五十万圓	二十万七千圓	大正元年十月四ノ十左一		大島計太
旭川電氣軌道株式會社	運輸業	八十万四十七万圓	十万二万五千圓	大正十年一月四ノ十八右二		木島武司

旭川共榮株式會社	植樹造田	二万五千圓	一百三十万圓六十五万圓	大正三年二月一ノ十一左七	武田貞平	
旭川市街軌道株式會社	運輸業	一百三十万圓六十五万圓	二万圓	昭和四年一月四ノ一	寺田省歸	黑田岩吉
旭川自動車株式會社	運輸業	二万圓	一百万圓二十五万圓	大正三年七月四ノ一	岡田重次郎	小泉菊次郎
旭川商事株式會社	金融仲介代理保險業	一百万圓二十五万圓	三十万圓十二万圓	大正七年三月五ノ九右三	大谷岩太郎	石田常次郎
旭川酒造株式會社	釀造業	三十万圓十二万圓	十五万三千圓十五万三千圓	大正八年十月新旭川		大內清六
旭川木管株式會社	各種木管製造業	十五万三千圓十五万三千圓	五万万圓	昭和四年四月近文十九	山內榮	
旭川モータース株式會社	自動車並付屬品油類販賣業	五万万圓	十万五千圓	昭和六年四月四ノ十左一	成田篤次	
旭川製綿株式會社	製綿業	十万五千圓	八万五千圓	大正八年九月三ノ十三左六	松浦長藏	三輪喜一郎
旭精油商事株式會社	化粧品油製造販賣業	八万五千圓	一万圓	大正三年五月四ノ十四左三	田中藤五郎	東海林壽
北日本商事株式會社	物品販賣金融仲介代理業	一万圓	二十七万五千圓二十七万五千圓	昭和六年四月六ノ八右十	井上鹿藏	
北日本釀造株式會社	釀造業	二十七万五千圓二十七万五千圓	三千五百圓三千五百圓	大正八年六月六ノ十六左一	田中清輔	金坂作之助
記念造林株式會社	造林業	三千五百圓三千五百圓		大正十二年二月一ノ七左一	澤口善助	

株式會社（支店）

商號	業種	資本金拂込額	設立年月所在地	社長	支店長支配人	電話
三ツ山商事株式會社	運送、金融代辨、倉庫、保險業	十万二万五千圓	昭和二年四月一ノ九左十	成田篤次		二、三二六
日ノ出無盡株式會社	無盡業	三十万七万五千圓	昭和四年五月三ノ十一左一	本郷靜作	小原多十次	三、〇二一
株式合資會社西村組	土木建築請負業	五十万十七万五千圓	昭和二年二月二ノ四左十	西村玉吉		二、六五四
日本清酒株式會社支店	釀造業	四百二十五万圓	昭和三年四月一ノ西一	笠原定藏	杉本二男	二、五五一
株式會社今井商店支店	百貨店業	三百二百四十九万圓	大正八年二月一ノ七	今井雄七	今泉治平 能勢榮八	四、一五五 二、一五一
株式會社北海道拓殖銀行支店	銀行業	二千一千二百五十万圓	明治三十八年十月二ノ八	松本修	二宮重親	四、一三五
株式會社北海道運送社支店	運輸業	一百四十五万一百四十五万圓	昭和二年七月宮ノ九	大島計太	成田篤次	四、一六一
株式會社北海道銀行支店	銀行業	七百八十万五百四十四万五千圓	明治三十九年五月一ノ八	山口治作	太田一夫	四、一七一
株式會社北海ホテル支店	旅館飲食業	六万六万圓	大正九年十一月宮ノ三	野口喜一郎	茶屋豐彥	四、一四一
株式會社北海屋商店工場	清涼飲料水製造業	二十万二十万圓	明治四十三年宮ノ三	堀末治	佐野森三	二、一五〇
株式會社北門貯蓄銀行支店	貯蓄銀行業	五十万十二万五千圓	大正十一年三月四ノ八右四	板谷宮吉	櫻井貞一郎	二、四二三
株式會社北門銀行支店	銀行業	三千八万二千五百圓三千八万二千五百圓	大正十二年十二月四ノ七左六	壹岐隼太	吉川一郎	二、七一五
株式會社中越銀行支店	銀行業	五百万四百二十五万圓	大正十四年九月四ノ八左十	根尾宗四郎	伊藤豐二	二、三五三 二、三九三
株式會社山岡發動機工作所支店	各種機械類製作業	一百万十二万五千圓	昭和六年三月四ノ七左四	山岡孫吉	更谷眞清	二、二五〇
株式會社安田銀行支店	銀行業	一億五千万九千三百七十五万圓	昭和五年九月四ノ十左六	安田善次郎	井尻芳朗	二、六四〇 三、四三六
株式會社十二銀行支店	銀行業	二千百万一千三百十五万圓	大正元年九月三ノ十左一	中田清兵工	中島諭三郎	四、一一一
株式會社日ノ出軒支店	菓子原料販賣業	六万六万圓	昭和六年四月二ノ二左十	加藤佐太郎	加藤賢治	三、二四一
共成株式會社支店	精米、米雜穀海產物販賣業	一百萬八十二萬五千圓	明治三十二年七月宮ノ十六右一	塚島由太郎	宮下外吉	二、一〇四 二、二八一
北日本無盡株式會社支店	無盡業	二十四萬六萬圓	大正十一年十二月四ノ十左七	奥野小四郎	吉田延二	二、九六五

合資會社

商號	業種	資本金	設立年月	所在地	代表社員	電話
原合資會社	仲介代辨金融業	五萬圓	大正十一年十一月	四ノ十左九	原　琢磨	三、〇六八
林製靴合資會社	靴製造並附屬品販賣業	七千圓	昭和二年五月	二ノ九右四	林　林	三、五一九
西倉合資會社	倉庫、代辨、金融委托賣買業	五萬圓	昭和二年九月	五ノ十三右十	西倉重二郎	二、〇四八
北海農林合資會社	土地開墾、田畑經營造林除虫菊栽培	五千圓	和和六年三月	八ノ十右七	三谷貞彦	
北海興業合資會社	動產不動產賣買仲介業	五千圓	昭和六年一月	五ノ十左三	菅原愍三郎	
北海證券合資會社	動產不動產賣買業	一千八百圓	昭和五年八月	四ノ五右二	後藤多三郎	
北洋工業合資會社	土木建築請負業	一萬圓	昭和五年五月	三ノ七左四	的場仲太郎	
星久合資會社	建物建築貸家業	四千五百圓	昭和六年八月	二ノ八左八	菊田恒二郎	
虎屋合資會社	菓子商	三千圓	昭和六年二月	三ノ十四右九	山田常一	三、三八六

川田合資會社	木材製材販賣土木建築請負業	八千圓	昭和五年二月	八ノ八左十	川田政吉	三、五一六
曲森合資會社	金森運送店運送業	五萬圓	大正八年七月	宮ノ九左一	金森　貞	三、四四〇
花月堂合資會社	紙文房具商	二千圓	昭和四年十二月	旭町三丁目	岡部季男	
横山自動車合資會社	運送業	二千五百圓	昭和六年十一月	三ノ十六左十	横山久吉	三、一八三
園田合資會社	吳服太物商	二千圓	昭和五年三月	大町三壽市場內	前本清次郎	三、四一八
津田製繩合資會社	藁繩製造業	五千圓	大正十二年四月	四ノ十七右一	津田甚作	
梅田合資會社	土木建築請負砂礫販賣業	十萬圓	大正十二年五月	一ノ十三右五	梅田彌四郎	三、〇八八
野口合資會社	酒造業	三十一萬六千圓	明治四十四年九月	五ノ十五左十	岡田重次郎	二、〇三八
信木合資會社	物品販賣業	一千五百圓	昭和四年七月	二ノ十四左八	信本吉太郎	
八百吉印加藤合資會社	飲食料品商	二千圓	昭和六年六月	二ノ七左十	加藤吉五郎	三、七一三
山キ中桐合資會社	土木建築請負業	五百圓	昭和五年二月	四ノ二右一	中桐君太	
丸拓合資會社	土地開墾並賣買田畑經營	十萬圓	昭和二年七月	八ノ十右六	前川作次郎	

丸矢合資會社	矢野漆器店	漆器製造販賣業	三千圓	大正三年二月	五ノ八右八	矢野千代吉	四、二八六
丸三石原製繩合資會社	製繩業	三千圓	昭和五年十月	七ノ十九右一	石原三吉	二、七七三	
丸美鈴木合資會社	薪炭石炭商	二千五百圓	昭和六年十一月	三ノ二左十	鈴木彦次郎		
松井商事合資會社	質屋並金融業	二萬圓	昭和二年十二月	二ノ十三左三	松井寅二郎	二、〇四四	
松崎自動車合資會社	運輸業	二千五百圓	昭和六年十一月	二ノ七左一	松崎重明	二、三七三	
藤川合資會社	質屋業	一萬圓	昭和三年十月	常盤通中島	藤川茂		
合資會社一力社	金融並仲介業	一千圓	昭和六年一月	四ノ五左四	樋口彖次郎	三、八五八	
合資會社入ヵ星笹島商店	菓子商	四千圓	昭和四年六月	八ノ十五右一	笹島佐七		
合資會社井上富吉商店	荒物雜貨薪炭石炭商	五千圓	昭和三年二月	三ノ八右八	井上富吉		
合資會社橋本工場	割箸、折箱、經木柾製造販賣業	二千圓	昭和五年三月	三ノ二左一	橋本環		
合資會社西尾商店	菓子商	二千圓	大正五年五月	二ノ三左一	西尾政次郎	三、六六三	
合資會社細川商店	呉服太物商	一千圓	昭和六年八月	四ノ十九右五	細川清		

合資會社奉公社	荒物雜貨商	三千圓	昭和六年一月	旭町一	後藤彌三郎		
合資會社北都毎日新聞社	新聞經營及印刷業	三千圓	昭和二年三月	一ノ六左八	岩崎石夫		
合資會社北海製作所	家具指物製造販賣業	二千圓	昭和四年十月	六ノ八	石川長治		
合資會社巴硝子工業所	硝子製造販賣業	一千圓	昭和四年十月	五ノ十五左二	小塚龜次郎		
合資會社千葉商店	荒物雜貨商	二千圓	昭和四年二月	宮ノ二十一	千葉雄三郎		
合資會社留崩臨港倉庫	倉庫業	十萬圓	昭和三年一月	六ノ十三左一	松岡源之助	二、二五	
合資會社小田靴店	靴製造販賣業	四千圓	昭和三年一月	常盤通二	小田順	三、一五八	
合資會社渡邊洋服店	洋服業	一千七百五十圓	昭和六年二月	一ノ十右九	渡邊惠次郎		
合資會社和田商店	飲食料品販賣業	一千圓	昭和五年六月	二ノ八右六	和田宇吉郎		
合資會社河端商店	雜貨販賣業	五千圓	昭和四年三月	四ノ十四右七	河端清介	三、三七七	
合資會社河野商店	毛皮、馬具類販賣	一萬圓	大正五年十一月	五ノ七右十	河野有吉	四、〇七二	
合資會社川本商店	精米雜穀業	一千圓	昭和五年十二月	三ノ二右七	川本嘉七		

合資會社曲ヲ田中商店	指物業	二千圓	昭和六年二月	三ノ十二右二	田中一郎	
合資會社金久日ノ丸組	運送業	五千圓	昭和五年三月	一ノ九左一	今野直次郎 米澤秀三	二、一〇五
合資會社今野直次郎商店	米雜穀業	五千圓	昭和三年一月	一ノ九	今野直次郎	二、一〇五
合資會社角大河合商店	洋物小間物化粧品商	一萬五千圓	昭和七年一月	一ノ八右七	川合倉吉	二、七二九
合資會社吉住蓄音器店	樂器並附屬品販賣業	三千圓	大正十五年十一月	二ノ八右一	吉住沖	
合資會社四條市場	市場店舗貸並附帶事業	七千五百圓	昭和四年六月	四ノ二十三右八	寺田銀助	
合資會社第一タクシー	運送業	五千圓	昭和六年十一月	四ノ八左三	諏訪常次郎	三、四五四
合資會社大黑屋製油店	油、小間物化粧品商	六百圓	昭和二年十月	三ノ十二左一	馬場一郎	
合資會社田原商店	菓子商	三千圓	昭和五年八月	二ノ三左二	田原金藏	
合資會社タニヤ商店	吳服太物洋物商	三千圓	昭和六年七月	四ノ八右一	谷口敏次郎	三、二七七
合資會社谷川商店	豆腐蒟蒻製造販賣業	一千圓	昭和三年七月	五ノ八左九	吉川吉太郎	
合資會社高畑商店	吳服太物商	七千圓	昭和六年十月	三ノ十一右六	高畑由太郎	二、四二六

合資會社竹內木材店	木材製材販賣業	二千五百圓	昭和五年八月	二ノ十九右十	竹內久平	三、一一八
合資會社竹內木工場	木材製材販賣業	五千圓	大正十五年十一月	四ノ二十一左二	竹內宇一	四、三五四
合資會社瀧澤商店	吳服太物洋物商	三千圓	昭和六年三月	四ノ十九右九	瀧澤輝	二、一九六
合資會社永吉貴金屬商店	時計貴金屬商	三千圓	昭和四年六月	五ノ八右三	永吉喜代次	
合資會社成久式製作所	煖爐種蒔器製造販賣業	二千圓	昭和五年五月	一ノ十七右九	佐藤成久	三、一五〇
合資會社村上商店	精米雜穀商	三千圓	昭和二年四月	五ノ十八右八	村上五平	二、三六四
合資會社浦野工業所	板硝子加工販賣	一千圓	昭和五年十一月	二ノ十一左一	浦野鐵次郎	三、二七六
合資會社浦東商店	荒物雜貨商	一千圓	昭和五年十一月	五ノ十四右十	大江元三	
合資會社エビスチエンストアー	百貨店經營	一萬三千四百圓	昭和六年十一月	四ノ十五左十	藤田猪三夫 松浦長藏	二、三一八
合資會社野島商店	米雜穀販賣業	二萬圓	大正四年十二月	一ノ十二右九	野島民助	二、八三四
合資會社黑田商店	洋物吳服商	四千圓	昭和三年二月	六ノ十七左八	黑田源藏	
合資會社山カ中保商會	藥品、化粧品雜貨商	三千圓	昭和六年二月	一ノ七右十	中保ハツ	三、五一二

合資會社山五五十嵐商店	履物雨傘販賣業	一萬二千圓	昭和四年八月	二ノ八右一	五十嵐庄次郎	二、七〇五
合資會社山崎火藥銃砲店	鐵砲火藥、其他販賣業	七千圓	和和四年一月	一ノ九右二	山崎志摩津	二、〇七五
合資會社山崎製本印刷所	印刷物、帳簿類製本業	三千圓	昭和四年八月	三ノ九右二	山崎修治	三、四三七
合資會社山キ木下商會	自轉車並付屬品販賣修繕	五千圓	昭和五年十二月	三ノ九右三	木下重藏	三、四五二
合資會社山下商店	柳行李製造販賣業	三千五百圓	昭和五年五月	六ノ八左一	山下他三郎	三、三四〇
合資會社安井商店	足袋、洋服卸商	三千圓	昭和二年十一月	三ノ五右一	安井寅松	
合資會社丸一金子洋物店	毛織物並洋服販賣業	一千五百圓	昭和三年十二月	六ノ三	金子由藏	
合資會社丸一日ノ出屋商店	菓子商	二千五百圓	昭和五年八月	三ノ十左四	石橋德松	三、七四六
合資會社丸八坂東商店	馬糧薪炭商	二千圓	昭和六年九月	宮ノ十一右一	板東ひさし	二、七二四
合資會社丸兵藤澤商店	陶器漆器販賣業	三千圓	昭和三年十二月	旭町三	藤澤佐一郎	三、二三二
合資會社丸と安心堂	洋物雜貨商	三千五百圓	昭和四年三月	三ノ七右十	吉田義治	
合資會社丸長長谷精米所	精米業	二千五百圓	昭和二年九月	宮ノ十九左七	長谷德次郎	

合資會社丸尾深尾喜一商店	菓子商	一千五百圓	昭和六年十一月	三ノ十二右四	深尾喜一	三、八三七
合資會社丸和佐治商店	洋物卸商	一千九百圓	昭和三年十二月	一ノ九左一	佐治和泉	三、五四五
合資會社丸カ栗田商店	古物商	五千圓	昭和六年二月	二ノ十一左三	栗田嘉吉	二、八三一
合資會社丸ヨ吉川商店	米糠肥料販賣業	三千圓	昭和五年八月	宮ノ十六右八	吉川龍吉	三、九六〇
合資會社丸ヨ吉田商店	洋物雜貨卸商	三千圓	大正十五年八月	四ノ十左六	吉田八郎	二、一五六
合資會社丸九石田商店	洋物、小間物、化粧品雜貨商	一萬圓	昭和三年十二月	一ノ七右十	石田浩治	二、一一九
合資會社丸ヤ直江商店	化粧品、小間物、文房具卸商	五千圓	昭和二年十二月	一ノ十一左四	直江慎	
合資會社丸山山內商店	ボタン並洋服付屬品商	三千圓	大正十五年十月	二ノ八右七	山內英二	四、〇九七
合資會社丸山山本商店	洋品雜貨商	六千圓	昭和三年十一月	二ノ九右八	山本仁郎	
合資會社丸政岩田商店	吳服太物商	三千圓	昭和五年十二月	三ノ五右十	岩田政次郎	
合資會社丸越洋服店	洋服商	二千圓	昭年六年二月	一ノ六右二	吉田捨吉	
合資會社丸三三野田菓子舗	菓子商	七百圓	昭和五年十月	四ノ十六左八	三野田節	

合資會社丸吉吉田商店	製繩業	二千圓	昭和五年十月	六ノ十八左十	吉田政治	三、〇六六
合資會社丸吉佐賀商店	飲食料品販賣業	一萬圓	昭和三年三月	大町三	佐賀宏平	二、四三三
合資會社丸吉藤田商店	洋物小間物化粧品商	八千圓	昭和六年二月	一ノ九左七	藤田吉左工門	三、一三九
合資會社丸セ瀨口商店	製菓問屋業	二千圓	昭和四年二月	一ノ二十二左八	瀨口末吉	
合資會社松村商店	軍隊諸官廳拂下品販賣業	三千圓	大正十四年八月	六ノ七左十	松村幸次郎	二、五四六
合資會社眞鍋商店	下駄製造販賣業	三千圓	昭和五年五月	一ノ八左六	眞鍋儀一	三、一七三
合資會社万星美吉屋	飲食料品販賣商	一千圓	昭和六年三月	旭町三丁目	高橋正吉	
合資會社福井木材商店	木材製材販賣業	五千圓	大正十五年六月	宮ノ十三左七	福井榮太郎	四、二〇二
合資會社フジヤ洋品店	洋物雜貨商	一千五百圓	昭和四年三月	五ノ八右一	佐藤省兒	
合資會社藤瀨農具製作所	農具製作販賣業	二千圓	昭和五年九月	一ノ九左四	藤瀨清二	三、二四三
合資會社文紙堂	紙文房具商	五千圓	昭和三年五月	六ノ七右十	佐々木一二三	三、八四二
合資會社小出商店	精米雜穀商	五千圓	昭和六年十二月	一ノ四左七	小出修平	二、六四八

合資會社興農社	土地水田ノ開墾不動產賣買業	五万圓	昭和四年三月	九ノ十一右三	萩原芳太郎	二、一一三
合資會社小寺印刷所	印刷業	五千圓	昭和四年八月	一ノ九左八	小寺正治	三、二三六
合資會社旭川度量衡修覆所	度量衡器修覆	五千圓	大正十二年六月	一ノ十一左一	福西與四郎	二、七八三
合資會社旭川ライオン	飲食店業	四千圓	昭和六年五月	三ノ七左四	武田佐太郎	三、五八五
合資會社旭川運搬社	運送業	一万圓	昭和二年九月	宮ノ二右一	金澤定治	
合資會社旭川青山洋家具店	和洋家具製造販賣業	五千八百圓	昭和六年三月	三ノ九右五	福村與青山千次郎	三、四六五
合資會社旭川賣流品共同販賣所	賣流品委托販賣業	六百圓	昭和六月十月	二ノ九右二	藤川茂	三、六七二
合資會社旭川每日新聞社	新聞經營及印刷業	三千圓	昭和三年九月	三ノ二十一右一	五十嵐兵五郎	四、〇〇七
合資會社秋田木材店	木材製材販賣業	三千圓	昭和三年九月	二ノ十一右三	秋田德治	三、九一七
合資會社ザロン旭川	飲食店業	二千圓	昭和七年一月	五ノ七右四	安藤はつ	二、三七九
合資會社三光舍	肉類其他食料品販賣、飲食店業	二千五百圓	大正六年十月	四ノ七左九	安江新平	二、三〇九
合資會社北野電氣商會	電氣器具機械販賣業	三千圓	昭和四年十一月	五ノ十左九	北野與吉	二、〇七六

合資會社紀ノ國屋旅館	旅人宿業	二千圓	昭和六年十一月	宮ノ八左一	桑瀨森之助
合資會社名成社	不動產賣買	五万圓	昭和四年四月	五ノ十左五	山田新
合資會社美吉野商店	菓子商	五千圓	昭和六年十一月	九ノ十三左十	山村豐朔
合資會社宮崎商店	洋物、小間物文房具商	六百圓	昭和六年十月	宮ノ十九左一	宮崎作次郎
合資會社水口商店	木材、藁販賣業	二千五百圓	昭和五年十二月	一ノ十五右一	水口二郎
合資會社篠原商店	洋物類販賣業	五千圓	昭和七年一月	二ノ九左九	篠原榮吉
合資會社篠田商店	飲食料品商	三千五百圓	昭和五年十二月	五ノ八右一	篠田初三郎
合資會社新英商店	呉服太物商	二千圓	昭和五年十月	一ノ一左七	新鞍駒吉
合資會社廣海商店	洋服商	一千圓	昭和六年二月	四ノ十二右九	廣海喜政
合資會社廣瀨商店	諸官廳御用達物品販賣業	一千五百圓	昭和五年十二月	一ノ十一右三	廣瀨善八
合資ヒシエチ會社林愛輪社	自轉車、自動車並付屬品販賣業	二千圓	昭和四年五月	一ノ三左三	林正一
合資ヒシエス會社寺尾時計店	時計諸樂器販賣業	二千五百圓	昭和五年九月	二ノ十四右五	寺尾盛一
合資會社仙掌堂治療院	整骨治療	一千圓	昭和六年六月	五ノ三左九	吉田常吉
合資會社杉山商店	農具機械販賣業	一万圓	昭和五年四月	一ノ五右七	椎名和一郎
合資會社鈴木營業所	煉瓦土管製造販賣業	三万圓	昭和五年五月	五ノ五左八	鈴木新太郎
幌都開發合資會社	幌加內沿線市街開發事業	一万圓	大正十五年六月	四ノ十左八	解良平太郎
興益合資會社	動產不動產賣買並仲介業	五千圓	昭和六年二月	三ノ六右五	伊藤隆文
旭川四條運送合資會社	運送業	三千二百圓	昭和四年八月	四ノ二十二	佐藤勇一郎
旭川燻炭製造合資會社	燻炭製造業	二万圓	昭和六年九月	一ノ三右八	川口藤一善浪重雄
旭川證券合資會社	證券賣買金融仲介業	三千圓	昭和六年九月	錦町一丁目	玉村由太郎
旭川木材加工合資會社	木材加工品製造販賣業	六千圓	昭和五年五月	五ノ十六左一	白川五一
旭工業合資會社	土木建築請負工業用品製造販賣	十万圓	大正十三年十二月	六ノ十三	松岡源之助
旭整產合資會社	金融仲介業	三千五百圓	大正七年十月	五ノ十右十	塚田富次
齋藤合資會社	木材製材販賣業土木建築請負業	二十五万圓	明治四十四年九月	宮ノ九左八	齋藤彌三郎

合資會社（支店）

商號	業種	資本金	設立年月	所在地	代表社員	電話
志賀畜産合資會社	家畜飼養販賣業	一千五百十圓	昭和三年四月	三ノ八右二	志賀孝一	
昭和合資會社	經木製造販賣業	一千圓	昭和五年四月	一ノ十七左二	大坪石太郎	
澁谷合資會社	家具販賣業	三千圓	昭和六年三月	二ノ十右三	澁谷孫一	
霜鳥興業合資會社	信托金融業	十万圓	大正六年四月	四ノ十左七	霜鳥直解	二、二六〇
下村山林合資會社	森林經營、植樹並付帶事業	十五万圓	昭和二年七月	五ノ六左十	下村正之助	二、三三五
合資會社橋本商店支店	飲食料品販賣業	四万七千圓	昭和六年七月	三ノ十右二	橋本しゆう	二、二〇四
合資會社香村商店支店	海産雜穀販賣業	三万圓	昭和五年二月	四ノ十六左三	西田他吉	二、八三〇
合資會社北日本調査會支店	金融仲介其他	三千圓	昭和五年一月	四ノ五右十	東志舜三郎	

合名會社

商號	業種	資本金	設立年月	所在地	代表社員	電話
石黑合名會社	賣藥々品販賣業	八千五百圓	昭和六年八月	四ノ十九右一	石黑仁一	三、二四五
竹內合名會社	質屋業	一万五千圓	昭和二年一月	六ノ八右四	竹內勘治郎	二、一三四
上森合名會社	ゴム靴商	四千五百圓	昭和二年二月	一ノ十一右一	上森長三郎	四、一三〇
合名會社西村商會	諸官廳用達業	三千圓	昭和二年六月	四ノ十三左十	西村千太郎	二、二六一
合名會社堀慶商店	飲食料品販賣業	五千圓	大正十四年九月	三ノ十一公設市場內	堀慶作	三、二二〇
合名會社富山眼科病院	病院經營	一万圓	大正十一年九月	四ノ九右四	富山清明	二、四五〇
合名會社大久保病院	病院經營	四千圓	大正十五年十一月	三ノ九右十	大久保武次	二、九五五
合名會社館脇倉庫	倉庫業	六万圓	大正十五年四月	宮ノ九左十	宇垣亥三郎	二、三五五
合名會社丸三三森商店	吳服太物商	一万圓	昭和五年一月	一ノ十一左四	森甚市	
合名會社三益商會	金融仲介業	三千圓	昭和五年二月	三ノ四右六	梶原景祐	
荒井合名會社	土木建築請負業諸機械木材販賣	十万圓	大正十年七月	一ノ六右四	荒井初太郎	二、二三五
旭川鹽元賣捌合名會社	鹽元賣捌業	七万圓	大正十二年三月	一ノ九左三	野崎小三郎	二、一三三

合名會社（支店）

商號	業種	資本金	設立年月	所在地	代表社員	電話
旭農園アサヒ種苗合名會社	造林種苗養成販賣土地開墾田畑賣買	一万圓	大正十年十一月	二ノ十四左十	澤口三郎	二〇四〇
三拓合名會社	開墾業	四万八千五百圓	昭和二年十二月	九ノ十一右六	保喜元四郎	
木下合名會社	金融業	八万圓	大正八年三月	七ノ十三左三	木下忠雄	四、三五五
三谷合名會社	土地開墾賣買業	二十万圓	大正九年一月	八ノ十右六	三谷喜三郎	二、〇九五 二、〇九六
杉本合名會社	農	七万五千圓	大正八年二月	三ノ十二右五	杉本勇治	二、九六八
合名會社山田電氣商會支店	電氣器具修繕販賣業	四千圓	昭和六年三月	七ノ八右一	長崎逸郎	三、一二三
合名會社富貴堂支店	書籍文房具學用品販賣業	十五万圓	昭和六年五月	三ノ八右二	中村信以	二、三五四
林屋製茶合名會社支店	茶商	二十五万圓	大正七年九月	二ノ八	林屋新兵衛	二、六〇五

銀行と金融

附近農村の開發進み漸くその生産額を増加し、その中心として本市亦既に草創時代を終へ各般の事象等しく殷賑に趨き諸企業相踵いて勃興するに及び物資の動き從て活潑となり取引愈々複雜性を帶ぶるに從ひ資金の需要並に出入流動活潑となるに及び金融機關の設置緊要となり明治三十二年十月本田親美氏先づ札幌貯蓄銀行支店を一條通八丁目に創設し只管金融の圓滑を圖つたのである。之れ本市に於ける銀行の濫觴である。

當時本道經濟界は明治二十七、八年戰役の經濟界好調裡に進展し諸企業相次いで興り資金の需要逐日增加し本道の將來内外に有望視せらるゝに及んで銀行增設資本增加等相續いて行はれ加之官廳工を起し鐵道に港灣に道路に意を注ぎ本道の事業界益々多事ならんとし相伴ひて本道金融界亦愈々繁忙を極めたのである。

全道の趨勢如斯本市は鐵道開通、第七師團設置、諸企業興隆、地方の開發等日に月に經濟力充實せんとする時にして本田氏による該銀行の創設は本市の發展に利する所甚大なるものがあつた。

越えて明治三十四年山本新助氏は本市が農村中心都市として有望なるに着眼し農産金融の圓滑を目的として絲屋銀行を二條通七丁目に新設し同三十七年には北海道拓殖銀行支店及北海道拓殖貯金銀行を、三十九年には北海道銀行支店の設置を見、金融機關整備し商工業の發展爲めに促進せられ其後北門銀行（北海道拓殖貯金銀行改稱）北門貯蓄銀行、十二銀行、百十三銀行、中越銀行、共榮貯蓄銀行等各支店の設置あり、發展途上の本市商工業並に農村開發に寄與する處尠なからざりしも歐洲大戰以後の不況に善處し得ず昭和二年絲屋銀行、共榮貯蓄銀行、百十三銀行等を失ひたるも昭和五年九月市民の翹望止まざりし安田銀行の旭川支店の設置を見現在普通銀行六貯蓄銀行一を數ふるに至つたのである。

旭川組合銀行

北海道拓殖銀行旭川支店内に設けられ加入銀行は別掲六銀行（外旭川局爲替を含む）にして營業進展に關し取引上の慣習其他事項又は經濟上の諸問題を考究すると共に毎月組合銀行報告として預金、貸出其他營業各種の總殘高を發表し本市金融界の推移動向を明らかにし本市經濟界に寄與する處寔に多い。

旭川組合銀行加盟

銀行名	資本金	設立年月	所在	支店長	同代理	電話
株式會社北海道拓殖銀行旭川支店	二千万圓	明治三十八年十月	二條通八丁目左五號	二宮重親	岡村政則	四、一三五
株式會社北海道銀行旭川支店	七百八十万圓	明治三十九年五月	一條通八丁目右四號	太田一夫	深谷戒三	四、一七一
株式會社北門銀行旭川支店	二百万圓	大正十二年十二月	四條通七丁目左六號	吉川一郎	山川憲郎	二、七一五
株式會社十二銀行旭川支店	二千百万圓	大正元年九月	三條通十丁目左一號	中島諭三郎	小松宜賢	四、一二一
株式會社中越銀行旭川支店	五百万圓	大正十四年九月	四條通八丁目左十號	伊藤豐二	村上義雄	二、三五三 二、三九三
株式會社安田銀行旭川支店	一億五千万圓	昭和五年九月	四條通十丁目左六號	井尻芳郎	加藤隆幸	二、六四〇 三、四三六
其他						
株式會社北門貯蓄銀行旭川支店	一五十万圓	大正十一年三月	四條通八丁目右四號	櫻井貞一郎	服部嵓	二、四三二

組合銀行預金殘高比較

年次＼種別	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
本店行數	一	一	一	〇	〇
支店行數	七	七	六	六	七
公金預金	一、九〇〇	二、五五、六三	二、三五、七七	—	—
定期預金	六、四九五、七四七	六、一〇四、七三六	五、四六〇、七一〇	五、八二一、六二四	六、〇九六、八七五
當座預金	二、五四六、四二九	一、九〇六、四二九	二、二一〇、九、三三	二、二一〇、六、五五二	一、四七八、四三〇
特別當座貯蓄	五、一六一、三七八	四、五六六、七三二	四、九三七、一八二	五、七五三、〇二四	五、〇九九、八二九
諸預金	一、一二八、八三二	一、八一、二四九	一、八〇、七〇二	一、七八、二二四	二〇二、七三九
合計	一五、五三〇、三六六	二、九九、九、二六六	二、七七、九〇六	一、九四九、四二三	二、八七、六六三

組合銀行貸付及金銀在高比較

年次＼種別	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
證書貸付	四、四四八、九二	一、〇五六、七五二	二、三五六、〇五四	二、〇九五、四二五	二、〇四六、七九八
手形貸付	二、二八、四四四	二、八七二、九三	三、〇九八、〇八五	二、九五六、四二〇	三、〇六三、四九八
貸越	一、〇一六、〇〇一	一、二二、六六三	一、二四二、七九二	一、三九六、七二八	一、三一〇、一〇二
割引手形	二、四二、〇三九	三、四五七、四六九	二、七三六、〇〇七	二、六四九、四七	二、六七八、一九七
荷爲替	四〇五、五一七	五九、七六九	六七七、三二四	四七七、八九四	一七〇、八四七
合計	一〇、五六二、九九二	九、〇二九、五八四	一九、〇二〇、一九八	一八、四二九、〇六五	一九、二六〇、三五二
金銀在高	一、三四五、五一九	一、四六三、二六九	一、五六七、九八〇	一、九三〇、四〇六	一、三二二、九六五

最近五箇年金利比較

年次＼種別	證書 最高	證書 最低	貸越 最高	貸越 最低	割引 最高	割引 最低	荷爲替 最高	荷爲替 最低	手形 最高	手形 最低	個人擔保 最高	個人擔保 最低	金融會社 最高	金融會社 最低
昭和元年	三、五〇	二、四〇	三、五〇	二、八〇	三、五〇	二、六〇	三、三〇	二、七〇	三、〇〇	二、〇〇	二、〇〇	一、五〇	六、〇〇	五、〇〇
昭和二年	三、五〇	一、九〇	三、五〇	二、五〇	三、五〇	二、四〇	三、五〇	二、六〇	三、〇〇	一、八〇	二、〇〇	一、二〇	六、〇〇	五、〇〇
昭和三年	三、五〇	二、三〇	三、五〇	二、四〇	三、一〇	二、二〇	三、三〇	二、五〇	三、一〇	二、〇〇	二、〇〇	一、二〇	六、〇〇	五、〇〇
昭和四年	三、五〇	二、二〇	三、二〇	二、二〇	二、九〇	二、〇〇	三、五〇	二、二〇	三、一〇	二、〇〇	一、八〇	一、二〇	六、五〇	四、五〇
昭和五年	二、九〇	二、三〇	三、〇〇	二、一〇	二、八〇	一、八〇	二、九〇	一、九〇	二、九〇	二、九〇	二、二〇	一、二〇	六、九〇	四、九〇

旭川組合銀行手形交換高比較

年次＼種別	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
交換高 枚數	九七、六四七	九七、六四七	二三、九七九	三五、〇五六	三〇、〇四四
交換高 金額	四八〇、五六三	四四、七一、九五六	五六、八四六、〇八四	六六、六六、七四五	六五、四七、二四

對各地出入金高比較

區別		送金及當座振込	荷爲替及割引代手	合計
旭川市ヨリ出金	昭和元年	三八、八〇九、七四四	一九、八九〇、九〇二	五八、七〇〇、六四六
	昭和二年	四六、八六一、七七六	二三、〇九四、〇九七	六九、九五五、八七三
	昭和三年	四四、四六七、八八七	二一、九六五、〇八三	六六、四三二、九七〇
	昭和四年	四四、三九五、二四二	二一、九五九、五三七	六六、三五四、七九九
	昭和五年	三四、一七〇、三二〇	一三、九九三、二三二	四八、一六三、五五二
旭川市ヘ入金	昭和元年	二七、七一五、〇八八	一八、五六三、三五七	四六、二七八、四四五
	昭和二年	三二、〇五九、五一二	一九、四五九、九四九	五〇、五一九、四六一
	昭和三年	三二、一九九、四〇五	二三、二五九、九〇九	五五、四五九、三一四
	昭和四年	二八、三七八、五一二	二八、六四一、六七四	五七、〇二〇、一八五
	昭和五年	二〇、〇九七、三二一	二四、五八二、一三九	四四、六七九、三六〇

組合銀行爲替取組支拂高

年次＼種別	送金 取組高	送金 支拂高	荷爲替 取組高	荷爲替 取立高	他所割引及代金取立 取組高	他所割引及代金取立 取立高
昭和元年	三九、五二九、二七七	三〇、〇〇〇、〇三九	一一、七〇一、〇〇七	五、七三九、七八一	七、七九六、〇六二	一五、三二一、五一二
昭和二年	四〇、三〇二、〇八一	二七、一五二、一九二	九、一六五、一六八	五、一六〇、〇六一	六、九八三、五三三	一五、五二一、三八六
昭和三年	四六、〇二三、八五〇	二七、八九六、七三八	一四、一五八、二六二	五、二七六、四〇七	八、二七六、三六二	一七、九二六、七一五
昭和四年	四三、八七六、八六〇	二八、九二五、二七三	一四、六〇二、一四五	四、九九九、三九四	九、一八六、五八六	一九、六七一、二七五
昭和五年	三五、九六五、二八一	二三、三三八、四六七	九、〇六八、〇六七	三、八一二、九四六	七、五一三、九九二	一五、二〇一、三七九

旭川組合銀行荷爲替取組高（地方別）比較

年次＼種別	本州 農産物	本州 海産物	本州 其他	本道 農産物	本道 海産物	本道 其他	樺太 農産物	樺太 其他	合計 農産物	合計 海産物	合計 其他	合計 計
昭和元年	五三、〇七〇	八〇〇	三四、二一六	九、九一九、三〇四	二三、三六九	三五、一九九	八五五、四五九	—	一一、二九二、八三三	二三、一六八	三五九、四一五	一一、六七五、四一七
昭和二年	七五九、六九七	六五七	二一〇、二〇〇	七、三九九、四〇一	八、四六三	二、七九五	一、〇五三、六一〇	—	九、一五二、八三二	九、一二〇	二三三、二二四	九、三九四、〇三四
昭和三年	二、〇六七、八三〇	—	二七、九六七	九、八六八、一二三	七三、八一一	二〇、二八八	一、八八七、四四九	—	一三、八二三、四〇一	七三、八一一	二三八、二五五	一四、一三五、四六七

昭和四年	二、七七八、四六八	—	三一九、三九一	一〇、三三三、〇六八	七三、三六五、三七、二七〇	一〇六九、八七一	七三八	一四、一八一、四〇七	八、六二〇、二四一	七三、三六五	一〇一、〇六〇	三四七、三八九	二九四、六〇七	一四、六〇二、一六一	九、〇一五、九〇八
昭和五年	四四四、八九〇	—	二六八、二〇四	七、三八二、六九四	一〇一、〇六〇	二六、四〇三	九九二、六五七	—							

旭川組合銀行對商品別貸出殘高比較

年次＼種目	米 倉荷證券擔保付	米 荷爲替	米 合計	豆類 倉荷證券擔保付	豆類 荷爲替	豆類 合計	合計 倉荷證券擔保付	合計 荷爲替	合計 合計
昭和元年	一八八、〇六九	三三〇、七七二	五一八、八四一	七八、九一三	五五、四〇一	一三四、三一三	一三〇、三四八	一一、六九五	一四二、〇七九
昭和二年	五八四、一六九	四五一、〇三七	一、〇三五、一〇六	五二、五六八	四五、三九六	九七、九六四	五三、四八九	一三、五八一	六七、〇七〇
昭和三年	七〇六、一六三	一、〇八七、六五二	一、七九三、八二〇	六八、八三〇	一〇一、二四八	一七〇、〇七八	一二九、四三四	三〇、五一一	五九、九三五
昭和四年	三三、三三三	四三九、一〇九	七五二、五三一	四九、六〇五	一五、三三二	六四、九三七	五五、三五七	六、四六四	六一、八二二
昭和五年	三三八、一五一	一五七、三四九	四八五、五〇〇	三七、九〇八	六、二九四	四四、二〇三	一四、四六〇	九六七	一五、四二七

旭川組合銀行對商品別貸出殘高比較

年次＼種目	海産物 倉荷證券擔保付	海産物 荷爲替	海産物 合計	雜貨 倉荷證券擔保付	雜貨 荷爲替	雜貨 合計	合計 倉荷證券擔保付	合計 荷爲替	合計 合計
昭和元年	四三、〇七七	—	四三、〇五七	九三、〇五〇	五、六六四	一〇四、七一四	五三九、四七二	四〇三、五三二	九四三、〇〇四

年次＼種目	年賦貸付金殘高
昭和二年	九六、一八九
昭和三年	六七、〇三六
昭和四年	八四、三〇三
昭和五年	五八、一一五
昭和元年	
昭和二年	
昭和三年	

北海道拓殖銀行年賦貸附金殘高

年次＼種目	年賦貸付金殘高
昭和元年	二、一七四、一四五
昭和二年	二、三八〇、〇九五
昭和三年	一〇、七〇七、七九七
昭和四年	
昭和五年	

昭和二年	九五一	九七、一四〇	一四、四〇九	—	六五	八〇、八二四	五一〇、九六五	一、三一一、七八九	二、一一八、五三五	一〇、四六七、六五八	一一、二七四、一三八
昭和三年	五、三九二	七三、四一七	一三、八〇五	八、三八〇	二三、二八五	八八五、三四八	一、一三三、一八七	四八五、三八六	九八八、九五六		
昭和四年	四、一五六	八八、四五八	一、〇九〇	二〇、一一九	二一、二〇九	五〇三、五七六	四八五、三八六	一六四、六一〇	六〇三、四一九		
昭和五年	—	五八、一一五	一七五	—	一七五	四三八、八〇九	一六四、六一〇				

産業組合と無盡業

産業組合

組合名	所在地	組合長名	組合員數	電話
有限責任旭川信用組合	四ノ八	別府賢吉	一、二一一名	四〇〇三
有限責任旭川木工品購買販賣組合	二ノ十二右九	松本清藏	二五名	三〇九一

有限責任 **旭川信用組合**

組合員の組合として融資に、貯金に組合員の利益增進を本旨として進む同組合の努力は經濟界の反動少なからざりしに拘はらずよく之に善處別掲業績表に見る如き進展の歩足を續け庶民銀行として使命を達成し本市金融界に献ぐる所又少なからざりしものがある。

旭川信用組合最近事業成績表

年次／種別	組合員數	出資金	積立金	貸付金	貯金
昭和二年	六五七	二七、一〇〇円	一、二一〇円	四四、一五五円	二七、六九七円
昭和三年	八八一	四一、三一〇	一八、五五五	八七、八一九	五五、八四〇
昭和四年	九五二	四九、九四〇	二、三〇二	一七〇、一六〇	一二四、一〇一
昭和五年	一、一〇二	六〇、九六〇	四、七六八	二三一、六七二	一五二、三四〇
昭和六年	一、二一二	六七、五〇〇	八、三八六	二九〇、八〇九	二〇〇、九九二

無盡業

本市に於ける無盡業は昭和五年三月全道に先驅して免許せられたる上川無盡株式會社（現拓殖無盡株式會社）を嚆矢とし現在別記の三社を數ふるに至り庶民金融機關として商工業の圓滑なる進捗に資する所多い。

社名	設立年月	資本金	總口數	給付金	所在	電話
拓殖無盡株式會社	大正元年十月	二〇〇、〇〇〇	二、九〇一	一、九八九、〇〇〇	三ノ十左三	二、〇八一
日ノ出無盡株式會社	昭和四年五月	三〇〇、〇〇〇	二、一〇九	一、一五一、一〇〇	三ノ十一左一	二、八一六
北日本無盡株式會社支店	大正十一年十二月	二四〇、〇〇〇	二、六七〇	一、七四五、〇〇〇	四ノ十左七	三、〇一一
						二、九六五

倉庫業と運送業

倉庫業 明治三十一年五月本田親美氏に依て設立せられたる上川倉庫株式會社を本市倉庫業の嚆矢となし本市並に本市を中心とする各地方の開發と事業勃興に從ひ財貨の集散旺盛となるに伴ふ必然之が貯藏保管の任に當るべき倉庫業の發達を促し現在別掲四倉庫を數ふるに至りその總坪數二八棟三千坪に及び物資の集散に聊かの不自由なからしめてゐる。

出入貨物は農産物を首位とし從て新物出廻期に於ける荷動き最も頻繁にして一月以降漸減する。その趨勢は別に之を掲ぐ。

名稱	創立年月	經營者	構造棟數	坪數	收容力	所在	電話
上川倉庫	明治三十一年	上川倉庫株式會社	煉瓦木造十二	一、一九〇	三〇、〇〇〇俵	宮下通十一丁目	二、一六八
館脇倉庫	大正三年五月	合資會社館脇倉庫	煉瓦五	八一七	九七、八五〇	宮下通九丁目	二、三五五
三ツ山倉庫	昭和二年四月	三ツ山商事株式會社	木造、土造三	三三一	一九、〇〇〇	一條通九丁目	二、二二六
西倉庫	昭和二年十月	西倉重二郎	石造四	五六	四五、〇〇〇	五條通十三丁目	二、〇四八

昭和四年度

月別	入庫數	出庫數	殘荷數	月別	入庫數	出庫數	殘荷數
一	二九、〇〇三	四九、四五一	二四九、六九七	七	四〇、八六六	七二、一三四	一五六、六〇八
二	二六、二九二	五四、三二八	二三三、六六〇	八	五五、七三〇	五七、九一五	一五四、四一
三	三一、二二七	五五、〇三八	一九、七四九	九	四六、〇七三	六四、九七三	一五六、五七
四	五九、〇八二	八〇、八三三	一七、九四五	十	四一、九五九	五九、三八四	一一七、三二五
五	五七、五四四	七六、三二六	一五九、一四五	十一	八三、七三〇	四八、八六二	一五一、五八三
六	六七、〇三三	五八、三五六	一六七、八七七	十二	六六、六四四	四三、九四二	一九二、一七五
				合計	六六七、〇六一	七四一、五三三	

昭和五年度

月別	入庫數	出庫數	殘荷數	月別	入庫數	出庫數	殘荷數
一	三、二五	五九、八二	一六六、五九	七	五六、二九	五一、三三	一五五、〇八四
二	三五、四三	三八、四五	一八一、六七	八	四七、七四一	七六、七四一	二六六、二五四
三	二四、二四	四二、九四八	一六二、九三	九	六九、九〇二	五八、六九四	一三七、四六二
四	五一、七九	六四、二三	一五〇、五〇	十	六二、二六六	五八、二〇五	一四二、五四三
五	三一、〇〇七	四五、二九〇	一二七、六七	十一	七一、〇六〇	四八、一六九	一六五、四四四
六	六一、七五九	三八、四九	一五〇、一七	十二	一〇〇、六六	三六、四七六	一九九、六二
				合計	六三、三七二	五九、一九三	

昭和六年度

月別	入庫數	出庫數	殘荷數	月別	入庫數	出庫數	殘荷數
一	二〇、九六〇	三二、七九	二一七、八三七	五	五一、七四九	五八、八八三	一七五、八二
二	一九、二三三	二六、五四五	二二〇、五二五	六	四三、九四五	二四、九〇四	一八四、八五四
三	二九、二五九	五二、六九七	一六七、九五七	七	二九、六六七	四六、七二〇	一六七、八二二
四	二二、五六九	二七、七五九	一八二、九四七	八	五三、一三	四九、〇九二	一七一、八五二

九	三九、〇〇七	五三、八五六	一五七、〇〇三	十一	二四、九四五
十	五一、五一八	四九、六三二	一五八、八八九	十二	九、五六二
合計	五五五、四四六				四七、三二〇
	五三、〇五〇				四三、〇三四

運送業 本市は四通八達の交通の要衝を占め物資の集散年と共に繁く從て之に伴ふ運送業は逐年發展を續け昭和二年に於ては運送店十數を數へたるが鐵道省の慫慂せる一驛一店主義により同年五月當時現存せる國際運送社旭川支店外八店を合同して一印旭川運送店を創立したるも同社は昭和四年七月株式會社手宮運送社と合併し總額を百四十五万圓に增額し株式會社北海道運送社旭川支店と改稱更に昭和六年小樽、南小樽、留萠、新旭川、近文の各驛運送店を合併又は買收し本社を小樽市手宮に置き新旭川及近文の各樞要驛に支店出張所を設置し資本金百八十八万圓を擁する本道屈指の鐵道省指定運送店となり現本市支店長は同社常務取締役成田篤次氏である。

此外昭和二年創立せられ松家圓次郎氏を社長とし信田重氏を支配人とし常に一驛一店の欠を補ひ本市の物資移出入に萬遺憾なきを期し累年その業績を擧げつゝある大印中央運送株式會社あり。金森、共同運送店あり、石北線の開通を眼前に、留萠港の利用愈々繁からんとする時本市の商勢の伸張ともに同業の進展は正に刮目して待つべきものあらん。

市場

旭川市立公設市場

旭川市三條通十一丁目
電話 三九一〇番

大正八年十二月二十五日當時財界の好調に伴ひ物價の奔騰止まる所を知らず遂に市民の生活に脅威を感ずるに至り之を牽制し物價の調節を圖らんとの目的を以て現地點二百坪に一萬餘圓を投じて本市場を建築せるもので爾後市民の利用と相俟つて小賣物價統制上資する所が多い。

最近五ヶ年間賣上其他統計

市立公設市場

年次＼區別	店數	職員	開場日數	總賣上高	總入場人員	一日平均賣上金額	一日平均入場人員
昭和二年	三五	二	三五〇	二三九、四五二円	六三二、二三八円	六八四、〇〇円	一、八〇六人
昭和三年	三五	二	三五〇	二六二、五一六	七五六、六四三	七四八、〇〇	二、〇六七
昭和四年	三五	一	三五〇	二三八、三九六	五六六、七二九	六五二、五六	一、六一九
昭和五年	三五	一	三五〇	二〇四、〇八四	五一三、六三八	五八三、〇九	一、四九六
昭和六年	三五	一	三五〇	一五三、二七五	四四二、〇八七	四三七、九二	一、二六三

私設日用品市場

私設市場は大正七年十一月設立の第一市場を嚆矢とし市勢發展に伴ふ市場利用者の増加はその増設を促し現在三十六市場を數ふるに至り猶建設中のもの二三を見る狀況である。

市場名	設立年月	所在地	電話
第一市場	大正七年十一月	三條通十五丁目	二〇七一
中央市場	同九年七月	五條通七丁目	三六六二
巴市場	同年九月	三條通三丁目	二六九二
東市場	同	三條通十七丁目	三三七九
近交市場	同十年十二月	旭町二丁目	四三一四
旭東市場	同十四年十一月	六條通十七丁目	二五四八
七福市場	同年六月	七條通七丁目	二六二七
文化市場	同	四條通十一丁目	二九四九
七條市場	昭和元年十月	七條通十五丁目	二七六九
東二條市場	同	二條通十九丁目	三一三七
第二文化市場	同年五月	二條通四丁目	三七六〇
都市場	同年六月	三條通八丁目	四三二三
錦市場	同	四條通十五丁目	二六二五
日ノ出市場	同年九月	四條通二十一丁目	二三五二
宮下市場	同年十二月	宮下十九丁目	三三六九
旭市場	昭和二年六月	三條通十一丁目	二六八九
日ノ出市場	同	日ノ出町三丁目	三一五〇
二條市場	同	二條通十一丁目	三三四七
榮市場	同年七月	三條通二丁目	三六五九
昭和市場	同	宮下二十一丁目	三九八八
一條市場	同年九月	一條通一丁目	二二二九
福一市場	同年十一月	一條通十四丁目	三一二三
北星市場	昭和三年七月	旭町三丁目	三九六九
五條市場	同年十月	五條通十五丁目	四〇一七
壽市場	同年十一月	大町三丁目	三四一八
北都市場	昭和四年六月	四條通十六丁目	三一四〇
平和市場	同年七月	四條通十九丁目	二五一六
拓殖市場	昭和五年十月	二條通八丁目	三七四〇
旭一市場	同年九月	二條通七丁目	三〇八六

大黑市場	昭和六年六月	九條通十三丁目	四二五六	
蓬萊市場	同	六條通十九丁目	三六五三	
キング市場	同 七年七月	五條通八丁目	二三四一	
八條市場	同	八條通十丁目	三五六五	
三六市場	同 八年八月	三條通六丁目	三四七七	
新町市場	同	新町	三五三四	
寶市場	同 十年十月	一條通五丁目	三五〇二	
三越市場	昭和七年二月	三條通十六丁目	四三三七	
北都市場	同 年六月	五條通十丁目		

旭川市場株式會社

旭川市六條通六丁目
電話二〇一五番(本　社)
二二七〇番(五條市場)
三三八〇番(三條市場)

從來本市に盛有、上川、旭川の三市場株式會社存せるを大正十二年十一月の改正市場規則「市場は吾人日常の生活必需品たる魚菜類の取引場で且社會經濟上の公益的機關であるから個人の利益に供し又は競爭の對象として價格の高下を左右すべからざるものなれば原則として一市街地一箇所制に據る

特約店

大日本精糖株式會社
明治精糖株式會社
台灣製糖株式會社
日本製粉株式會社
日本石油株式會社
野田醬油株式會社
櫻ビール株式會社
豐年製油株式會社
株式會社北海屋商店
大同マツチ株式會社
北海道製酪聯合販賣組合
明治製菓株式會社

代理店

合同油脂グリセリン株式會社
合同酒精株式會社
寶酒造株式會社
江井ヶ島酒造株式會社
大阪造酢株式會社
西の宮酒造株式會社
㊫安田醬油株式會社
㊫清水醬油株式會社
大同生命保險株式會社旭川代理店
大北火災保險株式會社旭川代理店

砂糖麥粉石油
食料品雜貨
問屋
旭川市二條通九丁目
西村末吉商店
出張所 札幌市南二條東二丁目
電話 四五四一番
電話特長 三一二八番
電話 三六一七番
振替小樽 九九二三番

も市及び市に準ずべき土地に於ては必要により二市場を認むべし」との趣旨に基き前記三市場を合併し同社の設立となつたもので以來所期の効果を擧げて發展しつゝあるは喜こぶべきである。

旭川市場株式會社

年次＼區別	鮮魚	鹽千魚	蔬菜果實	合計
昭和二年	八九九、〇二九、六一	三二一、三六三、二七	四二一、七三四、三〇	一、六二三、一二七、一八
昭和三年	八九八、九四七、一〇	二六六、六七七、三七	四四九、二九九、二五	一、六二四、九二三、七三
昭和四年	七〇九、三九七、八四	二三七、五〇二、一七	二九六、一七四、四七	一、二四三、〇七四、四八
昭和五年	六四三、九二六、九四	二二七、五二七、一〇	二七四、二六七、〇三	一、二五六、七二一、〇七
昭和六年	四九二、四二六、八四	一六八、八五一、一三	二三三、五三三、一〇	九〇四、八一〇、〇七

旭川正米市場

旭川市宮下通十一丁目
電話 三六八五番

本道第一の米穀生産地の中心にありその集散の衝を占むる本市に於て米穀標準價格の公正を期し之が賣買の圓滑に資せんが爲め大正三年以來當市商工會議所がその取引機關たる正米市場設置を當路に要望を續けたるを昭和五年十月十八日に至り全國に先驅して設立認可を得同年十一月十一日より開場

爾來米雜穀の集散機關としてその機能を發揚し米雜穀の取引の進捗に資し米産地中心都市として地方産業界を稗益するところ寔に多い。

旭川正米市場の内容

一、組合員の資格　旭川市又は接續町村に於て店舗を設け米雜穀又は肥料の賣買或は仲立を業とする者。

一、業務規定

イ、賣買物件　米雜穀及肥料

ロ、米及雜穀については賣方は組合員以外は何人たるを問はざるも買方は組合員に限る。

ハ、肥料については買方は組合員以外は何人たるを問はざるも賣方は組合員に限る。

ニ、賣買方法　米及雜穀は現品に依り競賣、肥料は現品又は見本に依り相對賣買受渡は即日終了

賣買數量制限なし。

ホ、市場手數料　米及雜穀については買方より一俵につき貳錢肥料は賣方より海産肥料拾圓につき四錢人造肥料豆粕及米糠壹個につき六厘

ヘ、委托手數料　米及雜穀―一俵につき五錢、肥料、海産肥料拾圓につき拾錢、人造肥料豆粕及米糠壹個につき壹錢五厘

ト、玄米標準値段　旭川四等米當日の出來値段を平均して算出。

旭川中央卸賣市場

「地方公共團體又は公益法人が魚類、肉類、鳥類、卵、蔬菜及果實の卸賣をなす爲め主務大臣の指定する都市及其の隣接地に於て開設する市場」なる中央卸賣市場法第一條の規定に基き都市食料品の需給を圓滑にし公正なる價格を決定する等公設小賣市場に對し公設卸賣市場として機能を發揮するものにして本市もその設立指定區域となり經營主體たる市當局に於て之が開設に關し諸般の準備折衝を重ねつつゝあり近く開場を見る筈である。

本市場の市場區域と指定せられたるもの次の如くである。

（旭川市、東旭川村、東川村、鷹栖村、東鷹栖村、江丹別村、神居村、神樂村、比布村、當麻村）

工業

概況

本市は開發の端緒につきたると同時に工業都市としての萠芽を有してゐた。即ち地理的に日用品の供給は遠く港灣を隔てゝ他地方より仰がざるべからざる位置にあり自然自足の途を講ずる必要生じ先づ酒造業が興り次に豐富なる農林産に基礎を置く精米製材業が續いて興つたのである。爾來地方の開發と交通網の分布は愈々物資の需要を喚起しその流動旺盛となり叙上製造業の繁榮を促進せるのみならず更に本市の天惠的好位置は物資供給上の中心地となり商業の發展と相俟つて日露戰役を劃し諸種製造業後を踵いで勃興し工業的躍進めざましきものあり大正八年には工産額實に二千五百萬圓に及ぶ盛況を齎らしたのである。

然し大正九年に兆す財界反動は物資の需要を減殺し企業熱從て抑制される所あつたが堅實なる當市工業は順調に推移し昭和五年中工産は二千万圓を越えてゐる。

現在主なるものは釀造、精米、製材業であるが工産品は百餘種に及び清酒、燒酎、味噌、醬油、精米、製材、木工品、菓子類等數量に品質に全道第一と推賞せらるゝもの數十種を數ふるに至つたのである。

斯く本市は地位、交通、工業的資源、商事的勢力に於て工業地として最適地なるもその上伸勢を殺ぐもの憾むらくは事業資金の圓滑を欠くにあり。茲に一段企業資金の充實あらば數年來高唱の高等工業教育機關設置の實現と相俟つて本市が工業都市として全道に臨む日の來るべきを期して疑はぬものである。

工場

（使用職工五人以上）

工場種別	工場數	工場種別	工場數	工場種別	工場數
酒類釀造場	一五	鐵其他機械類工場	二三	食料品工場	三〇
味噌醬油釀造場	一〇	鑄物工場	五	煉瓦工場	一
製麵工場	一〇	印刷工場	一八	疊工場	一
製粉工場	六	製綿工場	一六	洗濯工場	六
製菓工場	二六	製材工場	二三	硝子工場	六
精米工場	一四三	薄板工場	五	石鹼工場	一
革製品工場	三	管工場	一	メリヤス工場	一
製繩莚工場	一八	鉛筆工場	二	雜工場	三〇
製紙工場	一	家具指物及木製品工場	三一		
農具工場	一五	再製砂糖工場	一	合計	四四八

最近八箇年重要工産品産額（單位圓）

品名	大正十二年	大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
酒精	二二五、〇七〇円	二二五、〇七〇円	五〇、〇三二円	一円	二五、〇〇〇円	七五、六〇〇円	六〇、七五八円	七六、三三四
清酒	三、六二九、〇七五	三、六二九、〇七五	四、〇八二、五〇〇	四〇、三五四、四〇〇	三、四八、二三〇	三、七五五、五三〇	三、二五五、八五〇	三、二〇七、九六六
燒酎	六九、〇八五	八九、四七二	六二、七〇〇	一、二二〇、七〇〇	四六、六二六	二、八二一、五二〇	二、〇六六、一六〇	三、〇四〇、〇八〇
味淋	一	四四、二五八	一	一	一	一	三四、四三	一
酒粕	一〇四、九八	一四三、三二〇	一一六、三九	一四六、三六〇	一三六、六七	一八、七三	一〇四、〇三七	九、〇一五
ウオツカ及ウイスキー	三、六〇〇	三七、三七三	三、三〇二	一	一	一	一	一
ポートワイン	二〇、〇二五	八〇、八〇八	一九、三五	三〇、六八	八〇、〇〇〇	五八、四〇〇	五三、五二九	三九、四六八
混成酒	二五、九六	六、五八三	二、六〇七	六、〇二九	一四、四〇	一	一	一
醋	二、六三〇	二、六四〇	八、二二〇	九、四〇〇	一、八〇〇	四、五〇〇	九、九二九	八、四五九
醬油	八四〇、二二〇	七七、七八四	七九、九〇〇	五四〇、五五〇	六四五、七〇〇	六九二、九五〇	八一〇、四六四	四二一、〇八〇
味噌	二五〇、七三四	二六三、三六七	二七四、四二二	二三六、六〇二	二五〇、九三二	三三六、二九〇	二九〇、二二五	一四九、七六〇
清涼飲料水	九六、〇〇〇	六二、四五八	九六、五九二	一〇七、二五二	六三、七六七	一四二、〇二二	一四一、四九七	二二、四五九
氷	一〇、一五〇	八、二三五	四、〇二五	四、〇〇〇	一、八〇〇	九、七八八	六、九〇〇	二、五六六
鹽	一五五、二二七	一九九、九九三	一六九、六四三	一七一、二二八	一五二、四〇〇	一六七、四四八	二三二、六六四	三二二、五二九
素麺	五、三五五	二二、六九八	二〇、二六八	九、三七二	三二、四六七	三〇、三六六	三〇、五二六	一
冷麦	二七、四六〇	八七、六二七	九二、三二二	七四、一八三	一六二、〇九七	九一、〇七七	二二一、七三八	一
蕎麦	二、九二六	一、三五八	四、〇〇五	一、四五四	二五、九七〇	九、五三二	二二、九七八	一
澱粉及製粉類	九二、三三三	六二、三二一	四六、二六三	六五、六三三	五九、六四三	九一、〇二九	九〇、五七五	四一、四六〇
豆腐	三二二、〇〇〇	二六、九九〇	六七、一五〇	六八、七〇〇	七八、八〇〇	五七、六〇〇	八二、七五四	六八、九五七
其他菓子	六四九、一〇〇	六二七、一〇〇	五二四、四〇〇	四七一、九〇〇	一、五七一、九八〇	一、二四一、二六五	一、一〇五、六四八	四八、四七七
其他菓子	一一一、七〇〇	九五、二六六	八四、七八〇	八一、六〇〇	六五、六〇〇	五九、九七七	五二、七四四	八八、二一六
白米	七四六、〇二八	九五九、八三八	一三、二四四、六〇二	八、七二六、一一七	八、一六四、〇二六	八、三〇八、〇四一	七、七三一、九八〇	七、八五二、一〇二
精麥	二五五、一〇〇	二六八、九二	二一八、二九九	一四五、七八一	一三八、六三〇	九三、九二七	九六、三〇六	九六、六三三
精米	一四、四六〇	五七、七九二	二九、四〇八	三九、一九一	三七、八九〇	二九、三九七	三一、九一八	二七、九八四
粺米	九七、八四七	八四、〇九八	一一、三一四	五七、八九四	六三、一六八	一五八、〇四一	一一六、七五七	一五五、四五五
土木建築用材	一、二二九、一〇〇	八四〇、八三五	八〇一、二二八	九一〇、二四一	一、〇〇一、二六五	八二一、七八五	九四八、六一五	一一〇、〇六七
木工下駄材	三四八、〇〇〇	三六九、五〇五	三四五、三六〇	四〇八、九五四	三五七、一一一	四五九、一七〇	八三、七〇〇	一
木工品	一、二五五、三六〇	一、〇八八、一〇〇	七三三、二六〇	七四一、五四〇	六〇七、四一四	一、五九二、九五九	一、五四一、三八四	九六、三九九
鉛筆軸板	九六、〇〇〇	七五、〇〇〇	七七、六一〇	六二、二六〇	二九五、〇〇〇	五五、一〇〇	二一、〇〇〇	九、〇〇八
鉛筆	二四、〇〇〇	二四、〇〇〇	一六、二四〇	一	一	一	七〇、〇〇〇	三四、七六〇
下駄	一	一	一六、五〇〇	一七、三一〇	一〇、三九二	一一、二七〇	五、三一〇	一
煉瓦及土管	三〇、二二	一七、六六〇	一九、四六〇	三、三五五	四、〇〇〇	五、八八〇	三、〇〇〇	一
繩	一四、三六八	一五六、六七七	一三二、九〇一	七〇、五三三	一九八、〇〇〇	九、二七七	五七、三五七	一一、三〇〇

總額	其他	玩具	乳製品	染物	金銀細工	香油	獸脂	石製品	洋服	硝子製品	其他雜品
九一四三七四〇	八八一九〇	—	—	—	—	—	—	五一三五	一四九九〇	四七七九〇	四八五五七
六五七四九一〇	三四〇〇〇	—	—	三七五七	三九一〇七	三六四〇〇	六〇四〇〇	九六四四	八五五九	四八五五七	四七一八四
三四六一四九八〇	五六〇〇〇	一四三〇〇	三〇一〇〇	三四二〇〇	三六九〇七	三九五七	六〇四〇〇	九七九五	一五四六〇〇	八五五九	一四〇七九二
一〇一三八四九八〇	一〇九六〇〇	四六〇〇	六九二一	八一六五	六三一三	三五〇〇〇	八一六〇〇	九八一五	三三六〇〇	九〇〇〇	四〇一六七
二九七〇〇三四〇	八四〇九〇	八八六五	八八二八	三〇三二	—	三五四六〇	六六四一	六六四三	一四八八〇	四七〇〇	四三一九五
四九五五三二	三三七五七	三七五七	七五九〇〇	四六〇五四	四六〇四五	六六〇〇	四六六七	三〇一八五〇	三七五七五〇	五八〇〇	五八五五七
二六六〇〇	五四一五〇	七一六一	二三一〇〇	一五一六〇	五一九五	一五九〇	八八六五	五七七〇〇	五四八五	二三八〇	二三八〇
六六七四四四〇	一九六六〇〇	一八〇	一九七九四	二九三四五	一九七五	一	三七六四	一	一	一	一

種別 — 仕旋職

種別	職業	給別	給日	給銀
仕旋職	盤上業	昭和元年	二〇〇〇〇	二〇〇〇〇
		昭和二年	二〇〇〇〇	二〇〇〇〇
		昭和三年	二〇〇〇〇	二〇〇〇〇
		昭和四年	一八〇〇〇	一八〇〇〇
		昭和五年	一八二〇〇	一八二〇〇

總額	其他	玩具	乳製品	染物	金銀細工	香油	獸脂	石製品	洋服	硝子製品	其他雜品
九七三六〇	三七七五〇〇〇	三五〇〇〇	三〇一五〇〇〇	三六八〇〇〇	三九二四六三	三四八四三	五七九六四	三三〇〇〇	一四一九六〇	八九六五〇	九〇六五七
八九七三六〇	三七五七〇〇〇	三〇一五〇〇〇	三〇一四〇〇〇	三一八〇〇〇	四〇九九三〇〇〇	三七九四〇〇〇	七九八四九	三六六〇〇	八五六四〇	三四六四〇	三四六四〇
八九七三六〇	三七五七〇〇〇	三〇一五〇〇〇	三〇一四〇〇〇	三一八〇〇〇	四〇九九三〇〇〇	三七九四〇〇〇	七九八四九	三六六〇〇	八五六四〇	三四六四〇	三四六四〇
三七五七〇〇〇	三七五七〇〇〇	三〇一五〇〇〇	三〇一四〇〇〇	三一八〇〇〇	四〇九九三〇〇〇	三七九四〇〇〇	七九八四九	三六六〇〇	八五六四〇	三四六四〇	三四六四〇
五九七五〇〇〇	五七七五〇〇〇	五〇一五〇〇〇	五〇一四〇〇〇	五一八〇〇〇	四〇九九三〇〇〇	五七九四〇〇〇	七九八四九	三六六〇〇	八五六四〇	三四六四〇	三四六四〇
二九一四四	一四九四四	一四九四四	一四九四四	一四九四四	四〇九九三〇〇〇	五七九四〇〇〇	七九八四九	三六六〇〇	八五六四〇	三四六四〇	三四六四〇
九八八四三	一四三四〇	一四三四〇	一四三四〇	一四三四〇	四〇九九三〇〇〇	五七九四〇〇〇	七九八四九	三六六〇〇	八五六四〇	三四六四〇	三四六四〇
一〇八〇〇	一四九六七	一四九六七	一四九六七	一四九六七	四〇九九三〇〇〇	五七九四〇〇〇	七九八四九	三六六〇〇	八五六四〇	三四六四〇	三四六四〇
一九七四	一九七四	一九七四	一九七四	一九七四	四〇九九三〇〇〇	五七九四〇〇〇	七九八四九	三六六〇〇	八五六四〇	三四六四〇	三四六四〇

工業	木型	〃	二、三〇	二、五〇	二、五〇
	鋲力	〃	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇
	蹄鐵	〃	一、一三	一、〇〇	一、〇〇
	活版植字工	〃	二、二〇	二、二〇	二、二〇
	印刷工	〃	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇
	製本工	〃	一、七〇	一、七〇	一、五〇
	製繩女工	〃	八〇	六三	七一
	紙函製造女工	〃	五〇	五〇	五〇
	鍛職	〃	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇
	硝子製造	〃	二、〇二	二、〇二	一、六〇
化學工業	石鹼製造男工	〃	一、五〇	一、五〇	一、五〇
	同女工	〃	七〇	七〇	七〇
	煉瓦製造	〃	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇
	洋服裁縫	〃	二、二一	二、二三	二、二三
	和服仕立	〃	一、八〇	一、八〇	一、八〇
	靴	〃	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇
雜	馬具	〃	一、九〇	一、八八	二、〇〇
	疊刺	〃	一、七四	一、八九	二、〇九
	庭師	〃	三、一〇	三、〇〇	三、〇〇
	經師	〃	二、五〇	二、五〇	二、五〇
	電信工	〃	一、六〇	一、五五	一、五六
	電燈工	〃	一、三五	一、三六	一、三七
	倉庫人夫	〃	一、五二	一、六六	一、五六
其他	鐵道積卸人夫	〃	二、一三	二、四一	一、九六
	荷馬車夫	〃	二、七七	三、四四	三、二〇
	柾夫	〃	一、五五	一、七〇	一、七〇
	日雇男	〃	一、六〇	一、七六	一、六八
	同女	〃	八九	八四	八六
	下男	〃賄付	一、五〇	一、一七	一、一七
	下女	〃	五〇	六〇	六〇

工業	木型	〃	二、五〇	二、三八	一、九七
	鋲力	〃	三、〇〇	二、五〇	二、五〇
	蹄鐵	〃	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇
	活版植字工	〃	二、二〇	二、二〇	二、二〇
	印刷工	〃	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇
	製本工	〃	一、七〇	一、五〇	一、五〇
	製繩女工	〃	六三	七〇	六二
	紙函製造女工	〃	五〇	五〇	五〇
	鍛職	〃	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇
	硝子製造	〃	二、〇二	一、六〇	一、三三
化學工業	石鹼製造男工	〃	一、五〇	一、五〇	一、四二
	同女工	〃	七〇	七〇	六三
	煉瓦製造	〃	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇
	洋服裁縫	〃	二、二三	二、二三	二、二三
	和服仕立	〃	一、八〇	一、八〇	一、八〇
	靴	〃	二、〇〇	二、〇〇	二、四二
雜	馬具	〃	一、八九	二、〇〇	一、八一
	疊刺	〃	二、〇九	二、四八	一、五四
	庭師	〃	三、〇〇	三、〇〇	二、五〇
	經師	〃	二、五〇	二、五八	二、五四
	電信工	〃	一、五六	一、六四	二、五六
	電燈工	〃	一、三七	一、三六	一、七二
	倉庫人夫	〃	一、五六	一、五六	一、五六
其他	鐵道積卸人夫	〃	一、九六	二、〇七	一、九五
	荷馬車夫	〃	三、二〇	三、二七	二、八二
	柾夫	〃	一、七〇	一、六〇	一、四九
	日雇男	〃	一、六八	一、七五	一、六三
	同女	〃	八六	九三	八一
	下男	〃賄付	一、一七	一、一七	八〇
	下女	〃	六〇	六〇	四〇

主なる工業會社と工場

合同酒精株式會社

旭川市南三條二十丁目
電話 四二三一番

明治三十三年神谷傳兵衛創設の本邦酒精工業の先驅たる神谷酒造株式會社を同社の前身とし原料を北海道特産物たる馬鈴薯に求め純道産品として本道の開發に伴れ逐次進展し、大正十三年十月名寄町舊東洋酒精釀造株式會社、士別舊北海道酒類株式會社及び倶知安舊北海酒精株式會社の三社を合併し組織を資本金壹百拾壹萬圓全額拂込濟となし現合同酒精株式會社と改稱するに至れり。爾來財界不振の影響を受け經營上幾多の變遷ありと雖も能く時流に順ぐ今日の進展を致し、現在製品酒精及ゴードー燒酎は道内樺太に販路を有するに止まらず更に内地市場に進出し移入を防遏すべき優良道産品である。

營業品目

酒精　熊印　局方酒精
燒酎　代表商標ゴードー

合同酒精株式會社

社員氏名		工場	
本社	中村富藏	〃	高野賢次
〃	牧浦好之助	〃	小林一馬
〃	土肥祐奇知	〃	崎谷勝次郎
〃	入江壽雄	〃	羽生侃二
〃	河井太一郎	〃	舛田武
〃	小林孝平	〃	松木喜一
〃	熊川貞雄		
〃	石橋武千代		
〃	山木正司		

野口合資會社酒造場

旭川市五條通十五丁目
電話 二〇三八番

明治四十四年五條通十五丁目に於て創業爾來岡田重次郎氏經營の衝に當り工場敷地は二千五百坪の廣きに亘り酒造機械は汽罐、電動機、水壓機、蒸氣火當釜、輸送ポンプ等すべて最新機を具へ製品北の譽、北の一、旭養老を市場に出し就中北の譽の聲價に至りては本道全圓に認知せらるゝものである

製品名　**北の譽**　北の一　旭養老

日本精酒株式會社旭川支店　旭川一條通西一丁目　電話二〇三五・二五五一番

昭和三年笠原、田中、秋山、荒井、藤田の本市有數の五酒造場の合同に依て成り本社を札幌市に設け本市に第一、第二、第三の三工場を有し現在專ら釀造機器の完備せる第一工場に於て別掲銘酒を擧げてゐるが代表酒千歳鶴、常磐泉は道産優良酒として既に一般愛酒家の認むるところである。

製品名　**千歳鶴**　**常盤泉**　不二波　若泉

野崎酒造場　旭川市四條通十七丁目左九號　電話二二一二番

大正四年七月野崎小三郎氏同場を創立し四條通十七丁目に工場を設け精米、洗米、壓搾等諸酒造機關完く備ひ製品花の友、北海灘、旭成を出し代表酒花の友は優良酒として全道各地方に好評を博してゐる。

製品名　**花の友**　北海灘　旭成

銘酒

亀甲長

醸造元

旭川市六條通七丁目

与山崎與吉

電話二、〇六六番
振替小樽二、四三五番

肥料用
工業用

福印石灰

旭川市

製造
營業所 与山崎石灰部
工場 比布石灰山
荷扱所 宗谷線比布駅

發賣元

商標 登録

保萬齡

銘酒

旭高砂

旭川

醸 上 小檜山吟醸

電話二二五一番
振替小樽八四四番

小檜山酒造場

旭川市宮下通十七丁目
電話 二二五一番

明治三十二年小檜山鐵三郎氏が宮下通十七丁目に工場を設立し酒造業を開始し昭和三年現工場を竣成し工場の廣大並に釀造機器の完備せるは全國稀に見るところにして製品旭高砂を出し其他いづれも銘酒として市場に好人氣である。

製品名　旭高砂　北の都正宗　旭福泉　旭福壽

世木澤酒造場

旭川市三條通十八丁目
電話 二〇七〇番

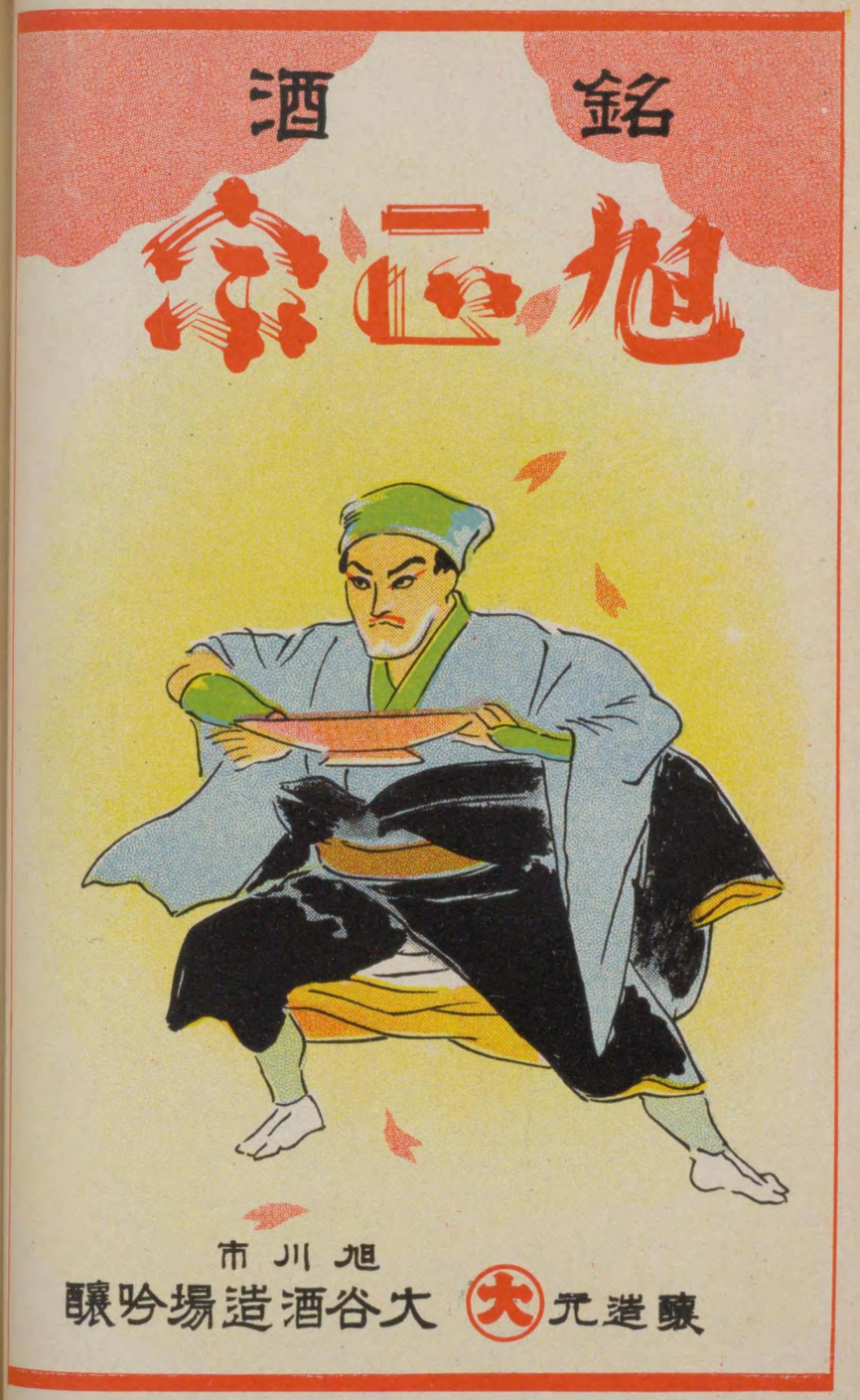
大正三年世木澤藤三郎氏の創業するところ、三條十八丁目に整備せる現工場を設け製品千代の澤、登鶴、登龜、銀の友は本道優等清酒として其盛名を謳はれてゐる。

製品名　登鶴　千代の澤　登龜　銀の友

大谷酒造場

旭川市六條通六丁目
電話 二〇五六番

明治四十三年大谷岩太郎氏に依て設立せられ釀造機關完備し製品旭正宗は昭和六年九月全道優等賞



を得る等芳醇を以て鳴り全道にその聲價を馳せてゐる。

製品名　旭正宗　旭自慢　北の薫　平和

山崎酒造場

旭川市六條通七丁目
電話　二〇六六番

明治三十二年山崎與吉氏の創立にかゝり工場敷地一千百餘坪の廣大を有し製品は龜甲長以下いづれも本道各地に好評を博し同場醸造龜甲長及特製男山は古くよりその芳醇を賞讃せられてゐる。

製品名　龜甲長　男山　龜代旭　花王正宗　今泉

旭川酒造株式會社

新旭川
電話　二一四八番

大正八年十月淺川浩氏を社長として創立せられ現在大内清六氏專ら業に當り工場敷地三千餘坪に及び醸造設備完整し製品旭の花は既に愛酒家の認むるところにして販路は全道一圓に亘り就中北見、十勝方面を主なるものとしてゐる。

製品名　旭の花　雪の司　登月

（其の他）

店名	製品名		
石崎酒造場	旭錦澤の雪	旭川市一條通十五丁目	電話二〇八〇番
鹽野谷合名會社	旭野天界鶴	同　大町三丁目	電話二二四八番

下村釀造工場　旭川市五條通六丁目左十號　電話二三二五番

明治二十五年下村長藏氏同工場を創立し本市に於ける最古の歴史と共に製品に信用を有し現在下村正之助氏の經營になり工場及諸機關完備し製品は醤油味噌共に丸丁下村製の名に依て優良品として既に市場に定評を有してゐる。

北日本釀造株式會社　旭川市六條通十六丁目左一號　電話　二六三一・二八一四番

大正八年六月旭川釀造株式會社（明治四十三年七月創立）を併せて同社を創業し現在資本金廿七万五千圓（全額拂込）とし敷地一千六百餘坪及其他建物八百餘坪に亘り夙に工場諸施設の完整を計り釀造用諸機器完備の域に達し商標ヤマアサヒは醤油味噌共に優良道産品として全道に知られ内地品の移入を

防過し販路を全道に占め更に樺太に逐年伸張しつゝあり。

今井釀造株式會社

旭川市四條通二丁目左十號
電話 二〇五四番

明治三十二年九月今井合名會社が現位置に釀造場を設置したるに始まり大正九年資本金一百万圓となし今井釀造株式會社と改め敷地坪數七千餘建物坪數二千餘に廣め大正十五年來工場の機械工業化につとめその完備せるは全道隨一と稱せられ鋭意生産能率の增進を計り製品醬油及味噌は商標キツコーマルヰを冠し全道各地に廣く販賣網を布き製品の優良を認められてゐる。

其他主なる醬油味噌釀造工場

商標	店名	所在	營業者名	電話
福印、龜甲福、一羽鶴	石崎釀造店	一ノ十五左六	石崎鶴吉	二、〇八〇
龜甲野崎	野崎商店釀造部	四ノ十七左九	野崎小三郎	二、二一二
富士譽	藤田商店	四ノ十五左十	藤田猪三夫	二、三一八
ホクオー	川島醬油店	大町十一丁目	川島清夫	二、五三〇
ダイマル	井内醬油店	一ノ十三左一	株式會社井内醬油店	二、〇三二 二、〇三三
ヒシマルキチ印	堀川釀造場	四ノ十五左六	堀川太郎治	三、〇〇九
角甚印	谷口釀造店	一ノ二右一	谷口甚角	二、三五九

齋藤合資會社

旭川市宮下通九丁目
電話 二〇八二番

明治四十四年九月齋藤彌三郎氏之を創立し業務の發展に伴ひ增資を行ひ現在資本金二十五万圓となし製材販賣、土木建築請負業を營み製材工場を野付牛、下富良野、一の橋及遠輕の五箇所に有し工場の規模の大なる及製材機關の整備せるは全道稀に見るものにして原材の消費年四万石の多きに達し製産材は丸サの商標を刻せられ道内の各地に仕向けられる外東京支店を通じ内地市場に進出し年々その移出量を增大してゐる。

昭和六年七月本市に製材販賣部を設け不況に因り需要減退の際に拘はらず着々その業績は向上の趨勢を示してゐる。

松岡木材部本店

旭川市六條通十三丁目
電話 二九三八番

松岡源之助氏の經營に係り製材工場を安足間、愛別、上川の數ヶ所に設け原材の年消費高四万石を

越え全工場の敷地總坪數四千餘坪にして製材施設は汽罐横置多管式、汽機等を整へその設備の完整と製材料の大は全國業界有數とせられるものである。

東京に支店、大阪、名古屋に出張所を置き販路は全道に亘る外内地及海外に伸張してゐる。

旭川木工場

旭川市宮下通十四丁目
電話 二四四六番

明治四十年大我口永松氏創業工場設備の規模の大なるは本市第一にして製材鋸十數台に百餘馬力の動力を配し製材をなし販路は本道各地に亘り就中道内各炭礦の需要最も多く其他東京に仕向けらるゝ量少なからず逐年着實なる進展を見せてゐる。

其他主なる木工場左の如くである

製品	店名	所在	氏名	主ナル販路	電話
製材及請負	田中組(田中銀次郎)	宮ノ八左七	(支配人)杉山宗十		二、〇二一
製材	吉富木工場	宮ノ十四右三	吉富榮太郎	旭川及道内各地	二、〇八七
仝	白川木工場	三ノ二十二	白川五一	仝	三、〇七八

明治メリーミルク

國産の權威
新鮮純良
母乳代用第一品
ヴイタミンBの始祖
鈴木農學博士推奨

明治製菓株式會社
旭川煉乳工場
株式會社明治商店
旭川出張所

仝	小泉恒吉商店	宮ノ十四右一	小泉恒吉	東京關西九洲
仝	森松木工場	旭町七	森松久孝	外仝國一圓
仝	大坪木工場	宮ノ二十	大坪三次郎	仝
仝	森本木工場	旭町二丁目	森本喜代吉	旭川及道内各地

二、六四五	旭川及道内	仝
三、八七三	二、九九〇	上
三、四一九		

明治製菓株式會社旭川工場

新旭川四八四
電話三七八五番

本社は本邦製菓界に森永製菓社と並び稱せらるゝ明治製菓株式會社（明治製糖株式會社姉妹社 資本金五百万圓）にして昭和三年新旭川に最新機械裝置完整せる現煉乳工場を新設し爾來鋭意乳製品の製造に當りワンステップワン（一日の努力一歩の向上）を經營の方針となしその製品明治メリーミルク明治バターは本邦代表乳製品なりとして斯界に推賞せられてゐる。

然も打ち續く不況に依り賣行不振の爲め斯業一様に退嬰的なるに拘はらず同社は更に進んで新販路を煉乳の世界的市場たるシンガポールを中心とする海外市場に開拓し本旭川工場製品を輸出品となし從來同地方を獨占せる英獨社製ワシミルクを漸次壓倒し之を驅逐しつゝある躍進振は同社の堅實なる

發展と旭川工場製品の優秀を語る證左にして本市工産品中の優なるものとして誇る所以である。

帝國製菓株式會社旭川工場

本社はビスケット製造會社として本邦屈指の帝國製菓株式會社(本社函館)にして、工場は函館、小樽、旭川、仙臺に在り。

旭川工場は昭和二年八月本市工場地帶たる新旭川に他工場に先驅して新設せられたるものである。設立以來原料材料工賃運賃等生産の合理化を期し、不斷の研究を續け、よく財界の不振に善處し今日の發展を致し、中部北海道菓業界に貢献する處又甚大なると認められてゐる。旭川工場は種谷源太郎氏を工場長とし經營に當り、生産合理化需要者本位をモットーとし、逐年業績を擧げてゐる。

販賣製品　ビスケット類　乾燥物　艶掛物　金米糖　花輪糖

各種工場

製菓工場		
函館菓子製造株式會社旭川工場	新旭川	二ノ八
千秋庵製菓工場	中屋製菓工場	二ノ七
	淺岡旭豆工場	二ノ十二
	泉屋製パン所	二ノ七
製麺工場		
森田製麺所	宮ノ十	
株式會社三箇製麺工場	一ノ十九	
製粉工場		
北島製粉所	常盤三	
株式會社丸山製粉所	新旭川	
清酒飲料水工場		
壇野谷酒造工場	大町三	
株式會社北海屋商店旭川工場	宮ノ三	
建具、家具、指物工場		
淺香家具工場	三ノ十二	
青山洋家具工場	三ノ九	
松本建具工場	二ノ十二	
尾崎家具工場	六ノ七	
松森建具工場	八ノ十五	
城建具工場	一ノ二	
中島家具工作工場	一ノ十二	
林建具指物工場	三ノ十八	
伊藤指物工場	二ノ四	
木工場		
旭川木管株式會社	近文	
山下鉛筆製材所	南一ノ三一	
大坪木工場	宮ノ二十一	
北海木材株式會社旭川工場	一ノ西五	
松浦木材店經木部	南一ノ三一	
糸川木工場	一ノ二十	
白川木工場	三ノ二十三	
鐵工場		
鐵道省札幌鐵道局旭川工場	宮ノ十五	
佐藤鐵工所	二ノ六	

高橋鐵工所	二ノ十二
田中鐵工所	一ノ二
半田工作鎔接所	三ノ一九
湊鑄物工場	二ノ一七
合資會社成久式製作所	一ノ一七
金子式・海老胴曲製作所	大町九

疊工場

岡田疊製造所	四ノ九
高木疊造所	一ノ九
菊地疊製造所	一ノ十三

硝子工場

新出硝子工場	常盤
淺原硝子工場	三ノ二十三

製綿工場

旭川製綿株式會社工場	三ノ十三

印刷、整版、製本工場

坂野印刷所	二ノ五
吉川印刷所	二ノ十四
旭川印刷所	五ノ十
合資會社小寺印刷所	一ノ九
北日本西島印刷所	一ノ六
上條印刷所	三ノ十
太洋堂印刷所	四ノ十
西村印刷所	四ノ十四
其水堂旭川支店印刷所	五ノ十三
旭川新聞社整版工場	三ノ九
北海日々新聞社整版工場	七ノ七
合資會社山崎製本印刷所	三ノ九
佐藤製本所	三ノ九

其他工場

波多野石鹼製造所	一ノ西六
旭精油商事株式會社工場	四ノ十四
水上ゴム工業所	二ノ十八
櫻川莫大小工場	四ノ十五
籔野商會工場	一ノ十二
藤瀨農具製作所	一ノ九

教育

沿革概容　本市草創の際杉谷宇衛門氏が當地方に巡錫の僧久教淵氏をして忠別河畔の堀立小屋に於て讀書手習習字を教授せしめたるを以て本市教育機關の嚆矢とし明治二十五年瀬古今次郎氏が共成黌を創立せるを之に亞ぐものとす。明治二十六年三條通八丁目に公立忠別尋常小學校(現中央校)を新築し同年九月上川第一尋常小學校(現日章校)を開校し爾來戸口の增加と共に相次いで六小學校創立せらる。

明治三十六年北海道廳立上川中學校(現旭中校)設置せられ同四十四年廳立旭川高等女學校の設立を見る。之に前後して私立女學校幼稚園等の開設あり本市教育界この頃より体裁を備ふ。

大正四年女子職業學校(現北都高女校)新設せられ大正十二年師範學校開始同年隣村永山に農業學校創設せらる。

大正十一年旭川市商業學校(昭和二年道廳移管)の開校を見現勢別掲の如く中小學校充實せるも本市が地位上より將來工業都市として進展しつゝある以上之が指導機關として本市に高等工業學校設置は

緊切にして旭川市、旭川商工會議所等その急要を高唱しつゝあるを以てその實現も近くにあらう。

中等學校(廳、市立)

(昭和六年調)

校名	創立年月日	位置	校長	敷地坪數	校舍坪數	教員數	學級數	在學生徒數	創立以來卒業者數
旭川中學校	明治三六、四、一	六條通十一、二丁目	千葉精一	一五、二五五	一、七六四	四〇	二五	一、一九二	二、〇三七
旭川商業學校	大正一一、四、一	宮下通西三丁目	川合光寛	六、四九九	一、七六二	三五	一九	八四四	五五七
旭川師範學校	大正一二、四、二三	北門町九丁目	小野貞助	三四、四八五	四、一二二	五三	二〇	八〇九	八五一
旭川高等女學校	明治四四、一〇、一	五條通四丁目	平澤虎一	三、五九七	八八三	二五	一三	六一六	一、七五二
北都高等女學校	大正五、四、一一	八條通十六丁目	奥村季吉	三、六〇〇	一、三二二	三六	二一	九〇二	二、八九七
永山農業學校	大正五、一二、三	上川郡永山村	鈴木好一郎	一〇、三三四	六五六	一六	六	二〇六	二三九

各種學校及幼稚園

校名	創立年月日	位置	校長	敷地坪數	校舍坪數	教員數	學級數	在學生徒數	創立以來卒業者數
旭川實科高等女學校	明治三一、一〇、二〇	四條通十二丁目	澤井兵次郎	七二九	六三五	一三	七	二〇〇	八七一
精華女學校	明治四一、一〇、一六	四條通十一丁目	高平常世	三三四	二一一		一〇	四六	七四九

小學校

校名	創立年月日	位置	校長	敷地坪數	校舍坪數	教員數	學級數	在學兒童數	創立以來卒業者數
旭川盲唖學校	大正一、六、一	八條通八丁目	南雲總次郎	三七二	一八三	一〇	一	七八	三一
旭川中等夜學校	大正一二、五、五	旭川中學校內	千葉精一	—	—	三一	四	一二九	二三八
旭川商工學校	大正六、四、一	六條通九丁目 中央學校內	島村清松	—	—	一二	五	一三〇	二、一六六
北鎭尋常高等小學校附屬幼稚園	明治四四、九、二	第七師團衞戍地	永松種藏	—	—	二	二	五七	三三三
精華女學校附屬幼稚園	大正三、九、二二	四條通十一丁目	高平常世	—	—	二	二	三五	二、〇三六
旭川實科高等女學校附屬旭幼稚園	大正四、一二、三	旭川實科高等女學校內	澤井兵次郎	—	—	二	三	六五	二三八
相愛幼稚園	昭和三、五、一	六條通十丁目	白石トク	九五	四五	三	三	三八	五三
中央尋常高等小學校	明治九、一、一七、二六	六條通九丁目	島村清松	七、二〇〇	二、〇一三	三三	三一	一、九五〇	八、七二四
日章尋常高等小學校	明治三、五、六、一	六條通五丁目	今宮鐵也	二、四四九	一、九〇八	三一	二九	一、七七六	六、二二五
大成尋常高等小學校	明治三五、六、一	六條通十丁目	河田忠平	三、六〇〇	二、八三五	四一	三九	二、五三三	六、九八八
北門尋常高等小學校	明治二、一、三、六、二〇	北門町九	石原惣六	五、二一〇	一、一八七	二〇	一八	九七二	四、〇八〇
北鎭尋常高等小學校	明治四四、九、二	第七師團衞戍地	永松種藏	七、七七四	六〇二	一二	九	二八八	六九六
朝日尋常高等小學校	明治四四、一、一	五條通二十一丁目	竹下豫五郎	三、七八〇	一、七九二	三五	三三	一、九〇五	五、〇四二
青雲尋常高等小學校	大正二、七、一七	一條西二丁目	工藤清	五、一一二	一、三〇五	二九	二七	一、六七六	二、四一〇
近文尋常小學校	大正八、四、一	五線南三號	栃木朔二	一、五〇〇	一七四	四	四	一八五	一七六
新北門尋常小學校	昭和二、一〇、五	旭町	大和田俊	六、二〇六	一、〇二二	二〇	一七	一、〇九〇	三一六
啓明尋常小學校	昭和一、三、一二	南二條二十二丁目	芦田省三	三、八一〇	一、三一四	一四	一二	八〇六	二二九
日新尋常小學校	昭和六、九、一七	宮下通十二丁目	三井專次郎	一、六二〇	一、四三〇	一八	一七	一、〇六〇	—

公私 教育社會施設

旭川職業紹介所

旭川市三條通十一丁目
電話 三六一〇番

大正十五年五月失業者の統制、救濟の目的を以て開設せられ始め五條通十三丁目旭川產兒院に於て紹介事務を取扱つたが爾來求人求職等利用激增するに伴ひ同所に狹隘を感じ昭和三年十月工費壹萬五千圓を以て三條十一丁目現廳舍を新築同所に移轉したのである。

開設以來取扱者數

	男	女	合計
求職人	一、五八一	四八二	二〇、六三四
求職紹介	一四、四七〇	二、六五五	一七、一二七
就職	七、四五六	一、七三二	九、一六八
	五、四〇四	一、二六〇	六、六六四

公益質屋

旭川市九條通九丁目

昭和五年六月一日庶民の融資機關として設立せられ現在は貸付額五拾圓を限度となせども將來は對商品貸付をなし中小商工業者の資金の圓滑に資するを期してゐる。

昭和七年一月調査の開業以來の業績次の如くである。

貸附額	貸附口數	返濟額	利息	流質
六〇、八三二円	一〇、七八四口	四五、九三七円	二、〇三〇円	七三円

財團法人下村育英財團

旭川市五條通六丁目左四號
電話二三二四番四二〇八番

大正七年四月本市の實業界の功勞者下村長藏氏が社會事業に貢献するの決意に依て全私財を擧げて同團を設立したものである。本財團は將來有爲の青年學生に學費を貸與し國家有用の材を養成し且下村文庫を設け公衆の閲覽に供し知識の向上啓發に努むるを其の事業とし現在三十餘名の學生を養成しつゝあり一方文庫の充實を圖つて一般に貢献する所實に甚大なるものがある。

現在下村文庫の概況並に同團育英資金によつて學業を終へ社會に活躍するもの別記の如く、いづれも有用の地位を占めつゝあるは故人の高潔至誠なる人格の反映といふべく同團事業の進展とともに邦家の爲め慶賀に堪えぬ所である。

下村文庫　藏書一万三千部　閲覽人員數　一万二千人

同團出身者　百二十七人（内八十人卒業）

學士　四四人（法六、工五、理二、經濟一、醫一六、商二、文七、農五）

專門校　三六人（高工七、高商七、北大實六、其他一六）

旭川消防組

（事務所　旭川市役所）

本市消防組の活動は他都市に誇るべきものにして之に配する喞筒其他諸機具の整備と相俟つて本市に大火を見ざる所因となす。

全市九部に分ち常備部を市の中央に置き日夜有事に備へ火防用水線は宮下、一條、二條、三條、四條、六條の各條通に布かれ殆ど全市を潤し、喞筒は自動車六臺、蒸氣三臺、オートバイ一臺にして總馬力三四七、放水量八十四石に及ぶ。

組員編成は組頭笠原定藏氏以下九部長（別掲）の組員百八十四名に分れその統制の一致と大事に於ける活躍は全道に範たるものとして推賞せられてゐる。

旭川市聯合衛生組合

（事務所　旭川市役所）

組合長松崎半五郎氏副組合長瀧波勘四郎氏となし市内を各區組合に分ち伍長二百五十餘人を以て專ら市民の保險衛生に努め其の主なる事業としては六月二十七日を結核豫防デーとし之が豫防を徹底せしめ其他防疫の宣傳、衛生講演會を開催する等極力市民保健に努めてゐる。

尙火防衛生婦人會あり、荒井ベン子氏を會長となし會員一万三千餘人を推し相俟つて火防並に保健

上遺憾なきを期してゐる。

旭川教育會

（事務所　旭川市役所）

大正十四年十一月七日の創立にかゝる事務所を市役所内に置き會長奥田千春氏副會長小野貞助氏會員は市内中小學校教職員並に一般有志五百五十名としその事業として講演會、講習會、体育奬勵施設をなす等斯道の進歩向上に寄與する所多い。

青年訓練所

所名	生徒數	
中央青年訓練所	一三二名	
新北門青年訓練所	六五名	
今井青年訓練所	四七名	（今井商店々員を以て組織し日章校に於て訓練をなす）
大成青年訓練所	二五名	（乾物、荒物二組合の所屬の店員を以て組織す）

旭川青年團

（事務所　旭川市役所）

大正十四年四月一日創立せられ現在奥田市長を團長とし全市尋常高等小學校卒業生を主体とし男子

團員一千五百四十二人に達し女子青年團は一千八十五人の團員を擁し共に講演會、講習會等に參會し向上發展の途に進むと共に公民としての修養に努めてゐる。

旭川少年團と旭少年團

旭川少年團、大正四年十一月創立市内各小學校五年以上男生を團員となし奥田市長を團長と仰ぎ團員現在二八〇八人

旭少年團は旭川中學校一、二年生選拔生を團員となし荒瀧實氏を團長とし共に体育精神的訓錬に努むると同時に神社境内及街頭掃除又は有事に際しては小國民として奉仕する等來有用の公民たらんとする修養を積みつゝある。

北海ハモニー協會

荒瀧實氏を會長佐藤門治氏を理事長とし市内女學校小學校女生百五十餘名を會員とし校外に於ける情操教育を目的とする女子教養團体で近くは滿州派遣軍に對し慰問の爲め協會員を派遣する等の事業を敢行し全國的にその名を認めらるゝに至つた。

旭川市榮町西一丁目

旭川育兒院

明治三十五年十月創立始め上川孤兒院と稱したるが大正十年廢院の止むなきに至りたるを水下關吉氏之を繼承す。同氏夫妻は孤兒養育を畢生の事業なりとして献身的に之に當り百方奔走の結果院舍を竣成し現在迄收容養育せるもの延人員八千二百六十人に及び目下二十一名の孤兒を收容し水下氏一家を擧げ献身的にその養育に努めてゐる。

旭川市宮下三丁目

旭川養老院

昭和六年十一月市費四千八百圓を以て構築年齡六十五歲以上にして扶養者なき老衰貧困者を收容し老後を養はしむ。現在收容者數七名である。

旭川市常盤通中島
電話 二八七四番

旭川救護院

明治四十三年十一月創立せられ西村信吉氏自ら院長として之を經營したるが同氏の沒後石井鐵之助氏幹事となり昭和二年九月組織を財團法人となし只管行路病者精神病者の加療救護に盡瘁してゐる。現在收容者三十六名である。

旭川市中島新町
電話三九〇七番

旭川保護會

大正八年一月當時の旭川地方裁判所長加納氏が免囚の保護と善導の要を痛感し關係各方面に奔走斡

旋の上之を創設し大正十三年五月より收容開始し昭和二年十二月現在の地に新築移轉し現檢事宮崎國松氏を會長として免囚の保護善導に寧日なく多大の効果を收めてゐる。

現在收容者四名にして開設以來の收容者延人員は五千百十四人に及んでゐる。

社寺

上川神社

一、御鎭座地　北海道旭川市神樂岡

二、御祭神　天照皇大御神、大巳貴大神、少彦名大神

三、由緒沿革概要　明治三十六年一月創立許可セラレ同三十九年十一月村社ニ列セリ

大正十二年十一月無格社近文神社ヲ合祀シテ配座ノ神トス

大正四年六月鄕社ニ加列セラレ同十二年十二月縣社ニ昇格

大正十三年六月神樂岡ヘ遷宮式奉行

四、創立者及神職　石田太一、堀井良三、秋山清美、柴田善直ノ創立ニシテ初代神職柴田善直、二代現社司柴田直胤

縣社上川神社神事曆

月	歲旦祭	一日	元始祭	三日
一月			次祭	廿一日

二月
月次祭　一日
紀元節祭　十一日
祈年祭　十七日
月次祭　廿一日

三月
月次祭　一日
春季皇靈祭遙拜式　廿一日
月次祭　廿一日

四月
月次祭　一日
神武天皇祭遙拜式　三日
月次祭　廿一日
天長節祭　廿九日

五月
月次祭　一日
春季講社大祭　十五日

六月
月次祭　廿一日
月次祭　一日
婦人會獻樂祭　十九日
札幌神社祭遙拜式　十五日
伊夜日子敬神講社祭　十五日
月次祭　廿一日
大麻頒布式　
大祓式　三十日

七月
月次祭　一日
例祭齋宮祭　二十日
大祭　廿一日
翌日祭　廿二日

八月
月次祭　一日
月次祭　廿一日

九月
月次祭　一日
近文金刀比羅祭　十日
秋季講社大祭　十五日
月次祭　廿一日
秋季皇靈祭遙拜式　廿三日

十月
月次祭　一日
神嘗祭遙拜式　十七日
月次祭　廿一日

十一月
月次祭　一日
明治節祭　三日
月次祭　廿一日
嘗祭　廿三日

十二月
月次祭　一日
大正天皇祭遙拜式　廿一日
大祓式　廿五日
除夜祭　卅一日

寺院

宗派	寺院	本尊	住職	所在	建設年月
浮土宗	報恩寺	阿彌陀如來	本多淨嚴	日ノ出町五丁目	明治三十八年四月
浮土眞宗	本派本願寺近文說教所	阿彌陀如來	森井法了	旭町五丁目	昭和三年十二月
浮土眞宗出雲路派	光寺	阿彌陀如來	平通尊	大町十一丁目	明治三十三年四月

眞宗大谷派	大谷派本願寺別院旭川支院	阿彌陀如來	大平雷明	宮下通二丁目	明治二十四年
曹洞宗	大休寺	釋迦牟尼如來	神田寛量	五條通五丁目	明治二十七年
曹洞宗	曹洞宗說教所	釋迦牟尼佛	下條圓指	四條通二十二丁目	大正二年十月
曹洞宗	曹洞宗說教所	釋迦如來	森川德應	旭町十三丁目	大正九年四月
淨土宗	延命寺回向院	阿彌陀如來	村田淨順	市外神居村墓地	明治四十二年五月
眞宗大谷派	願船寺	阿彌陀如來	赤松美秀	大町十丁目	明治三十五年七月
眞宗本願寺派	慶誠寺	阿彌陀如來	石田慶封	五條通六丁目	明治二十七年
淨土宗西山光明寺派	興隆寺	柳谷觀世音	杉森省立	十條通八丁目	大正六年八月
眞宗興正派	興正寺派說教所	阿彌陀如來	中條秀雲	三條通十六丁目	明治三十八年十一月
古義眞言宗	金峰寺	大日如來 弘法大師	谷口秀峰	五條通十七丁目	明治四十一年五月
本妙法華宗	教會所	日蓮上人十界ノ曼荼羅	吉田日應	旭町一丁目	大正七年六月
日蓮宗	妙法寺	十界本尊	河本英秀	六條通十九丁目	大正元年四月
眞言宗智山派	眞久寺	不動明王	久志隆象	五條通四丁目	明治二十五年六月
眞宗高田派	眞宗高田派說教所	阿彌陀如來	倉田覺道	一條通十六丁目	大正二年五月

本妙法華宗	白蓮講務所	十界勸請ノ大曼荼羅	白戸英信	日ノ出町一丁目	大正六年七月
淨土宗	善光寺	一光三尊阿彌陀佛	越野大興	五條通三丁目	明治三十八年六月

一月

御正忌會	各寺	
修正會	本願寺別院	
圓光大師御祥月	本願寺別院	
大般若祈禱會	大休寺	曹洞宗說教所
國禱會	妙法寺	

二月

永代經	本派本願寺近文說教所	
現如上人御祥月	本願寺別院	
聖德太子御祥月	本願寺別院	
豐川稻荷眞天初午大休寺		
開山禪師御祥忌	大休寺	
釋尊涅槃會	大休寺	曹洞宗說教所
	金峯寺	教會所
	興隆寺	善光寺
祖師御降誕會	教會所	
節分星祭	妙法寺	
開祖日隆上人會	白蓮講務所	

三月

彼岸會	各寺	
永代祠堂會	本光寺	慶誠寺
別院功勞者追悼會	本願寺別院	
慧燈大師御祥月	本願寺別院	
納骨堂供養	金峰寺	
弘法大師正御影供	眞久寺	

四月

宗祖大師降誕會	本願寺別院	
相續講追悼會	本願寺別院	

開完記念日　本願寺別院
春季永代祠堂會　本願寺別院　眞宗高田派說教所
釋尊降誕會　大休寺　曹洞宗說教所　興隆寺　教會所
宗祖止御影供會　金峰寺

五　月

釋尊降誕會　曹洞宗說教所　回向院　慶誠寺
觀世音山開　回向院
鬼子母神大祭　妙法寺
宗祖大師御忌會　善光寺

六　月

春季觀世音大祭　報恩寺
戰死病沒者追悼會　眞久寺
鎭守大祭　大休寺
記念大法會　興隆寺
宗祖降誕會　金峯寺
最上荷稻大祭　妙法寺
不動明王大祭　眞久寺

七　月

延命尊例會　曹洞宗說教所
創立記念日　願船寺
觀世音大祭　興隆寺

八　月

盂蘭盆會　各寺
夏之御文　本願寺別院
地藏尊大祭　回向院　善光寺
永代祠堂會　慶誠寺　眞宗高田派說教所
歡喜會　慶誠寺

九　月

彼岸會　各寺
宗祖報恩講　本光寺
秋季永代祠堂會　本願寺別院
婦人追悼會　本願寺別院
創立記念日　大休寺
納骨堂供養　金峰寺

六角堂觀音大祭　眞久寺

十　月

秋季觀世音大祭　報恩寺
報恩講　各寺
永代祠堂會　本光寺
達磨忌　大休寺
御開山忌　大休寺
日蓮上人御會式　教會所　妙法寺
宗祖龍口御難會　白蓮講務所

十一　月

宗祖御正忌會　本光寺　本願寺別院
宗祖大師報恩講　本願寺別院　願船寺
釋尊成道會　曹洞宗說教所
十夜法要　善光寺

十二　月

大正天皇御正忌　本願寺別院
釋尊成道會　大休寺
佛名法會　興隆寺　善光寺

基督教教會

教會名	所在	管理者
旭川組合教會	六ノ十右四	田中喜代松
日本メソヂスト旭川教會	四ノ十二左五	山口友治
日本聖公會旭川教會	三ノ十三左七	富田恒躬
日本基督教會	二ノ十一左十	細川慶次
旭川天主公教會	五ノ十一左四	森信夫
救世軍	三ノ十一左十	